

エイブリー・リン——「真・善・忍」の原則に
従って修煉する僧侶の語りに基づく

俗世間へ



ENTERING THE WORLD

入世間

一生の雲遊、魂の帰郷



THE LIVES
MEDIA®

俗世間へ

(ENTERING THE WORLD)

一生の雲遊、魂の帰郷

著者：エイヴリー・リン (Avery Lin)

中国の古代の原理「真・善・忍」に基づく修煉法に、真摯に取り組んできた一人の中国人僧侶の語りをもとに記された物語。

Copyright © 2025 THE LIVES MEDIA。すべての権利を
保有します。無断複製を禁じます。

編集部より

本書は、実際に起きた出来事や実在の背景、実在の人物の語りに基づいて執筆されたものです。ただし、個人のプライバシーを尊重し、関係者に不測の影響を与えないため、登場人物の名前や特定の識別可能な情報については、一部を変更・省略、または文学的表現として再構成しております。

本文中の一部は、当事者自身の視点から語られたものであり、それぞれの時点での経験や認識を反映しています。そのため、これらの意見や見解は、必ずしも THE LIVES MEDIA の立場を代表するものではありません。

文体面においては、編集部が必要な校正を行っておりますが、登場人物の語りの素朴さと物語の生命力を最大限に保持するため、原文の語り口や雰囲気ができる限り尊重いたしました。

編集部



はじめに

この物語は、ニューヨーク郊外の山の中腹にひっそりと佇む小さな家で、黄昏時に交わされた会話をもとに綴られています。冷めかけたお茶の湯気が夕暮れに溶けてゆくその向こう側に座っていたのは、七十歳を越えた一人の修行者、**馬長生（マ・チャンシェン）**さんでした。その語り口は、高僧の説法のようなものではなく、世の移ろいを静かに見つめてきた者がぼつりぼつりと打ち明ける、素朴で静かな語りでした。

私の役割は、ただ耳を傾けること。それ以上でもそれ以下でもありません。

そこにいたのは、劇的な展開を求めるインタビュアーではなく、ただの一人の後輩として、目の前に流れる人生の旅路を、静かに書き留める者でした。

それは、半世紀以上にもわたる旅でした。中国現代史の嵐の中で始まり、三十年に及ぶアジア各地を巡る修行の道を経て、思いがけない場所で魂の帰り道を見つけるに至る——。ときに不思議さを湛え、ときに深い苦難に満

ちていても、どこか常に、静かな落ち着きを感じさせる物語です。

馬長生さんの物語は、単なる回想録ではありません。私にとってそれは、信念の力、探し求めることの代償、そして人を試練の向こうへ導く目に見えぬ力の存在を、まざまざと示してくれる生きた証でした。

今ここに、そんなかけがえのない記憶の断片を、そっと並べてみたいと思います。その静かな流れの中に、読む方それぞれの心が、何かを感じ取っていただければと願っています。

エイヴリー・リン

第一日目

エイヴリー・リン（Avery Lin）：

馬おじさん（馬伯父）、こんにちは。今日またお会いできて、とても嬉しいです！

前回お約束した通り、今日は馬おじさんのこれまでの人生について、道を求めてこられた体験について、日常の中での修行、そして個人的な気づきや悟りについて、お話を伺いに参りました。

馬長生（マ・チャンシェン）：

（馬おじさんはエイヴリーを見つめ、穏やかな笑みを浮かべたまま、あたたかな眼差しで頷いた。）

こんにちは、エイヴリー。こちらこそ、また会えて嬉しいよ。うん、約束通りだね。そこに座って、ゆっくり話そうか。

わしの話なんて、大したことじゃない。ただ、自分が歩いてきた道で見たこと、感じたこと、思ったことを話さだけさ。

聞いてくれるなら、喜んで語ろう。

（馬おじさんは一口お茶をすすると、そっと湯飲みを置いた。静かな家の中、茶碗が受け皿に触れるかすかな音が、ふわりと響く。）

話を始めるなら、だいぶ昔にさかのぼらなければならないよ、エイヴリー。

わしが生まれたのは 1949 年、広東省だった。その頃はまだ国の情勢が不安定でね。

両親は熱心な共産党員で、革命の理想を心から信じていた。政治活動にも積極的に参加していて、当然、わしもその流れの中で育てられたよ。

幼い頃から、未来は明るい、党の導く道にこそ希望がある——そうした歌やスローガンが自然と心に染み込んでいた。

でもな、同じ家の中に、まったく別の流れもあったんだ。祖父——わしの父方のじいちゃんは、全然違った。世の中から距離を置き、静かな生活を愛していた。

老子の『道德経』や儒家の経典に夢中でね。わしの名前、「馬長生」も、じいちゃんが名付けてくれたんだ。

当時はその意味がよく分からなかったが、そこには何かしらの願いが込められていたんだと思う。

じいちゃんは多くを語らなかったし、時勢について親と議論することもなかった。

でもその静かな佇まい、時折ぽつりと漏らす深い言葉は、

まるで細く降り続く雨のように、時間をかけてわしの心に染み込んでいったんだ。

そして時は流れ、1966 年、わしが 17 歳のとき、「文化大革命」が大々的に始まった。

若者というのは、大きな理想や派手な掛け声にすぐに心を動かされるものさ。

わしもその例外ではなかった。意気揚々と共産主義青年団に参加し、「四旧破壊」の運動——すなわち、古い思想や文化、風俗、習慣を打ち壊す活動に加わった。

当時は、それこそが新しい社会を築くための貢献だと信じていたよ。

……若さってのは、本当に未熟なものだね、エイヴリー。

（馬おじさんはふっと息をつき、窓の外を見やった。夕陽の光が、木々の梢にやわらかく染み込んでいた。）

エイヴリー・リン：

はい、わたしも「文化大革命」の背景について歴史書で読みました。……本当に恐ろしい時代だったんですね。

その頃、共産主義青年団の一員として、後になって後悔されるようなことを、馬おじさんはなされたことがあったのでしょうか？

馬長生：

（馬おじさんはしばらく黙っていた。遠くを見つめるまなざしには、楽しい思い出ではない過去がよみがえっているようだった。刻まれた皺の中に、深い哀しみが滲んでいた。）

あったよ、エイヴリー。……今でも思い出すたびに、胸が重く、心が痛むような出来事がある。あの頃の、盲目的な熱意、空っぽのスローガンに対する純粹すぎる信頼——それが、わしを、そして当時の多くの若者たちを、過ちへと導いてしまった。

（少し間をおきながら、声の調子がやや沈む。）

当時の「四旧破壊（しきゅうはかい）」の勢いは本当にすごかった。寺や祠、祖先から受け継がれた文化財の数々は、「迷信の象徴」「封建社会の遺物」として、容赦なく破壊されたんだ。わしも、そんな流れに巻き込まれてしまった。

ある日、村からそう遠くない山のふもとにある古い寺院——代々続いてきた由緒あるお寺——を、「処理する」任務を、青年団の仲間たちと一緒に任されたんだ。その寺は、古くて苔むした瓦屋根、荘厳な造りだった。でも当時のわしの頭の中には、「これは封建の遺物、壊すべきものだ！」という考えしかなかった。

われわれは大声を上げながら、仏像を壊し、祭壇をひっくり返し、あちこちを荒らし回った。木が碎ける音、供物台が粉々になる音——今でも、そのときの熱狂的な気持ちははっきりと覚えている。「これこそが革命的行動だ」「時代を前に進めているんだ」と、本気で信じていたよ。

（馬おじさんの声が詰まり、一瞬目を閉じて、忌まわしい記憶を振り払うかのように顔をそらした。）

そして、悲劇は起こった。最後の屋根瓦を壊そうと夢中で屋根に登っていたとき、古くなって腐った大きな梁が突然崩れ落ちて、わしの頭に直撃したんだ。鋭い激痛を感じた直後、視界が真っ暗になって——そこで意識が途切れた。

……今思えば、それはまさに「その場で返ってきた報い（因果応報）」だったのかもしれないね、エイヴリー。間違っただけをすれば、いずれその報いはやってくる。あの寺を壊したこと、それはずっとわしの心に深い傷跡を残してきた。まるで魂の中に刻まれた傷跡のように、それは今でも消えずに残っているんだ。

エイヴリー・リン：

……そのような出来事は、一つの世代にとっても本当に痛ましいことです。

そして、その伝統的な価値が失われたことで、後の世代にも大きな影響を与えたと思います。

馬おじさんがあのとき木の梁に打たれて気を失ったこと……修行や霊的な視点から見れば、まさに「即時の因果応報（カルマの報い）」だったのかもしれないね。

その後、すぐに何か気づきや変化があったのでしょうか？

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷き、考え込むような表情を浮かべた。）

そうだね、今にして思えば、あの落下、あの梁は、単なる事故じゃなかった。あとになってようやく分かったことだが、あれは転機だった。それまで信じることも知らなかった世界からの介入——それが始まりだったんだ。

わしは三日間ずっと意識を失っていたんだよ、エイヴリー。家族や仲間はきっと、ずいぶん心配しただろう。その三日間、現実の世界のことは何一つ覚えていない。でも、意識のないその間、わしはとても奇妙な、いや、あまりにも鮮明で現実のような夢を見ていた。今でも、その光景一つ一つをはっきりと思い出せるんだ。

（馬おじさんは遠くを見つめるように目を細め、小さな家の壁を越えて、遥かな場所を思い浮かべるかのようだった。）

夢の中で、わしは真っ暗で冷たい場所にいた。そのとき突然、やわらかな光が差し込み、一人の高僧が目の前に現れた。濃い黄色の袈裟をまとい、穏やかでありながら威厳に満ちた表情の方だった。その方は、わしをじっと

見つめ、その眼差しは、まるでわしの心の奥底まで見通しているようだった。

高僧は多くを語らなかったが、一つ一つの言葉が鐘の音のように心に響き、わしの無知な魂を揺さぶった。わしが寺を破壊したこと、仲間たちと行ったその行為——それがいかに大きな罪であり、どれほど重い業を生むものだったかを、明確に指摘された。神仏が宿る神聖な場所を破壊することは、神仏への冒瀆であると。もし真心から悔い改めなければ、地獄での苦しみが待っており、その業は到底償いきれない——そう告げられた。

その言葉を聞いたとき、わしは震えた。……エイヴリー、本当に恐ろしかったよ。地獄での苦しみ、そして高僧が語った罰の数々が、わしを完全に包み込んだ。でも、それ以上に、後悔の念があまりにも深く心に湧き上がった。どうして自分は、あんな極端な言葉を信じてしまったのか。どうして、あんな残酷な行動に加担してしまったのか——。

わしは夢の中で泣いた。……何度も頭を地に下げ、必死に許しを乞うた。この罪を償う道を、どうか教えてください——と。

（その場面を思い出すように、馬おじさんの声が震え、語り口が少し沈んだ。）

わしの悔い改める気持ちが本物であると見て取ったのか、その高僧はやがて語りかけてくださった。

「お前にはまだ善念が残っている。悔い改めの心がある。そのゆえに、私は道を授けよう。」「今すぐ、誤った道——共産党の道を捨てよ。そして出家し、正しい道（正法）を求めよ。だが忘れるな、決して一つの寺に安住してはならない。自らの足で四方を旅し、至るところで法を求めるのだ。その道は困難を極め、長く続くものとなる。それはお前が業を償うためであり、またお前の誠と決意が本物かを試す旅でもある。」

そう言い終えたとき、高僧の姿は次第に薄れていき、やがて消えた。そしてわしは、ゆっくりと三日ぶりに意識を取り戻した。

目を開けたとき、病院のベッドの上で、周りには家族がいた。その瞬間、わしは確信した。あれはただの夢ではない——

それは警告であり、運命の導きだった。そしてその時か

ら、わしの人生は、もはや以前のままではいられないと、心から感じたんだ。

エイヴリー・リン：

なるほど……修行者の視点から見れば、それはまさに「啓示」と呼ぶべき出来事だったのですね。

それで……馬おじさんはすぐにその導きに従ったのですか？ご家族の反応はどうでしたか？

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷き、その眼差しには揺るがぬ決意が宿っていた。）

そうだよ、エイヴリー。あれはもはや単なる夢ではなかった。あれは「啓示」だった。拒むことのできない呼びかけだった。目が覚めた後も、高僧の言葉が頭の中で何度も何度も響いていた。あまりにも鮮明で、力強かった。頭の傷の痛みも、疲れも、すべて消えたように感じた。代わりに、固い決意がわしの中に芽生えていた。「進むべき道はこれしかない」と、そう確信していた。

回復してすぐ、わしは両親に自分の決意を話した。「出家します。これまで親が敷いてくれた道は歩みません」と。

（馬おじさんは小さくため息をつき、顔に一瞬かすかな哀しみがよぎった。）

両親の反応は……激しかったよ。彼らは決して受け入れられなかった。共産主義に人生を捧げてきた二人にとって、たった一人の息子が突然出家すると言い出し、「迷信」のようなものを信じるなど、それは名誉の汚れであり、裏切りそのものだった。

「頭でも打っておかしくなったのか？」「誰かに洗脳されたのか？」——そんなふうに決めつけられた。罵られ、脅され、時には棒で叩かれたりもした。「そんな道を選ぶのなら、もう親だと思うな。家を出て二度と戻るな」と言われたよ。もちろん、内心ではわしのことを心配していたのだと思う。でも、彼らの信じてきた「理想」があまりにも強く、親としての情さえもかき消してしまっていた。

そのとき、胸は張り裂けそうに痛んだけれど——でも、わしの決意は一ミリも揺るがなかった。高僧の言葉、あ

の破壊された寺の光景、自分が背負った業……すべてがわしを突き動かしていた。「行かなければならない」と。

あの状況の中で、唯一わしに反対しなかったのが祖父だった。祖父はわしの顔をじっと見つめ、優しく、どこかすべてを見通したような眼差しを向けてくれた。そして、何も言わずに部屋に入り、すり切れた一冊の『道德經』を手にしてきて、わしに渡してくれたんだ。「おじいちゃんには、これしかあげられない。大切に持っていきなさい。」と。

……その本は、今もわしの手元にある。それは、祖父からの静かな励ましの言葉であり、何よりの宝物なんだ。

そして、1967 年のある早朝——まだ夜明け前の暗がりの中、わしは家を出た。手にあるのは『道德經』と古い衣服だけ。山奥のひっそりとした小さな寺を訪ね、わしはその住職にすべてを話した。過ち、奇妙な夢、家を出た理由、そして何より「四方を旅し、法を求めたい」という決意を。

年老いた住職は、わしの話に静かに耳を傾け、理解と慈しみに満ちたまなざしを向けてくださった。そして、わしの強い意思を感じ取ってくださったのだろう、頭を剃る儀式を行ってくれたんだ。そのとき授けられた法名が、

「釈長行（シャク・チョウコウ）」——つまり、「長く歩み続ける者」。寺から頂いた、くたびれた茶色の僧衣を身にまとい、わしの放浪の旅は始まった。

その瞬間から、「馬長生」は死んだ。ただ法を求める旅人、「釈長行」だけが残った。終わりの見えない旅へと、たった一人で歩み出したんだ。両親とは、それ以来一度も会っていない。顔を見れば、自分の決意が揺らいでしまうかもしれない。……そう思ったからさ。

エイヴリー・リン：

……なんて強くて、はっきりとした決断だったのでしょ
う。正直に言うと、もし自分がその立場にいたら、修煉
というものがまだ何かも分からない状態で、馬おじさん
のような勇気を持てたかどうか……自信がありません。

出家された直後、最初の頃には何か大変なことはありま
したか？例えば、周りの人たちに嘲笑されたり、当局か
らの圧力を受けたり……。

馬長生：

（馬おじさんは小さく首を振り、ほろ苦い笑みを浮かべた。）

決断は確かに迷いのないものだったよ、エイヴリー。でも、その先に待っていたのは、あまりにも見通しの立たない、陰しい道のりだった。

あのときのわたしには、ただ漠然と「行かなければならない」「高僧が語った“真の法”を探さなければならぬ”——という内なる衝動しかなかった。修煉とは何か、どうやって修めるのか、それすらよく分かっていなかったんだ。頼りにしていたのは、ただ一つの約束と、心の奥から湧き上がる確信だけだった。

家を出て、粗末な茶色の僧衣を身にまとった最初の日々——それは大きな試練だった。まず最初に襲ってきたのは、「孤独」だった。それまで家族もいて、仲間もいて、「革命」という旗の下で一体感を感じていた若者が、突然、何の支えもなく、見知らぬ土地でひとりきりになる。夜になれば、市場の片隅や見知らぬ寺の軒先で体を丸めて眠る。そのとき、家が恋しくて、両親の顔が浮かんで、過ちに満ちていたとはいえ、仲間たちと過ごした日々さえ懐かしく思えて、胸が締めつけられた。

そして、世間の目。当時はまだ「文化大革命」の熱気が残っていた。若い者なら、当然「生産の前線」に立ち、「革命の実践」に身を投じるべきだという空気があった。そんな中で、頭を剃り、道端で托鉢している青年——人々はわしに冷たい視線を向けた。好奇、軽蔑、不信……「怠け者」「労働から逃げてるだけ」「反革命分子が僧侶のふりをしている」——そんな陰口を叩かれたこともある。

かつて一緒にスローガンを叫んだ友人たちは、わしに背を向けた。無視する者、あからさまに馬鹿にする者……「頭がイカれた」「魔に取り憑かれた」などと笑う者もいた。最初は心が傷ついた。孤独が身に染みて、涙が出そうになった。でも、わしは高僧の言葉を思い出した。自分が背負ってしまった業、償うべき罪を思い出した。だから、それもまた「試練」なのだと自分に言い聞かせ、耐えた。

幸いなことに、出家して間もない頃は、当局からの直接的な妨害は受けなかった。おそらく、わしがただの一人の放浪僧であり、しかも田舎をうろうろしているだけだったから、目立たなかったのだろう。あるいは「頭のおかしい奴」と思われて、無視されていただけかもしれない。

い。だが、当時の空気は常に張りつめていた。「革命の流れに逆らう者」に対する不信感が常に漂っていた。だから、わしはいつも言葉に注意し、人の多い場所を避け、誤解を招くような行動を慎んでいた。

そして何より――最大の困難は、「自分自身との戦い」だった。「自分は本当に正しい道を選んだのか?」「この道を最後まで歩ききれるのか?」そんな疑問が、心の奥底で何度も浮かんできた。とくに、飢えや寒さ、病に苦しんでいるとき――その問いは容赦なく迫ってきた。

でも、そのたびに、あの高僧の威厳ある姿が心に浮かんだ。あの教えの言葉が、再びわしを立ち上がらせてくれた。祖父から受け取った『道德経』も、まるで友のように、ずっとわしに寄り添ってくれた。その中の一節一節が、不安に揺れるわしの心を、そっと癒してくれたんだ。

こうして――一歩、一歩、また一歩。わしの「法を求める旅」が始まった。どれくらいかかるのか、どこへ向かうのか――何も分からなかった。あったのは、たった一つの「信念」と、「最後まで行くしかない」という意志だけだった。

エイヴリー・リン：

それで、当時の馬おじさんには、何か具体的な方針や計画があったのですか？例えば、有名なお寺を訪ねたり、チベットへ向かったり、あるいは『西遊記』の三蔵法師のように、インドまで経典を求めに行こうと考えたことは……？

馬長生：

（馬おじさんは懐かしそうに、やさしく微笑んだ。）

具体的な方針があったかと言えば、そうでもなかったよ、エイヴリー。そのときのわしの頭の中にあったのは、あの高僧の言葉だけだった。「自ら四方を巡り、至る所で法を求めよ」——でも、どの山に行けとか、どの寺を訪ねろとか、そういったことは一切言われなかった。特に強調されたのは、「一つの寺に安住してはならぬ」ということだった。

それに、三蔵法師が天竺まで経典を求めに行ったような壮大な旅とは比べものにならないよ。あの人には最初から明確な目的と道のりがあった。でもわしはというと、ただの罪深い者であり、懺悔と誓いを胸に「真の法」を探し求めるしかなかった。

最初はとても単純な発想だったんだ。「とにかく歩こう。行った先にお寺や道観があれば寄ってみよう。話を聞こう。教えを受けよう。」そうやって、どこかに高德な僧侶や道士がいて、何かを教えてくれるかもしれない、そう思って各地を回っていた。

そのときのわしにとって唯一の「羅針盤」は、漠然とした信念、そして内側から湧いてくる「ただ歩き続ければ、きっと出会える。探し続ければ、きっと見つかる」という思いだった。持ち物といえば、祖父から受け取った『道德経』と、心の中の誠意、それだけだった。歩いて、尋ねて、観察して、耳を傾けて……ときには、道そのものが自分を呼んでいるように感じて、その直感に従って進むこともあった。

だからと言って、「最初からチベットへ行こう」「インドに行くべきだ」という明確な計画があったわけじゃないよ。そのような土地に足を運ぶことになったのは、もっともっと後のこと。それは自然の流れの中で生まれた「縁」だった。

わしの旅は、まるで水の流れのようなものだった。岩に出会えば避けて流れ、谷間があればそこを通り抜ける。

ただ一つの目的地、それは「大海」にたどり着くこと。
つまり、わしがずっと探し求めていた「真の法」なんだ。

（馬おじさんは話を止め、ゆっくりと湯飲みを手に取り、お茶を一口すする。窓の外では夕陽が沈みかけており、辺りは橙色の光に包まれていた。静寂の中に、時の流れだけがやさしく漂っていた。）

エイヴリー・リン：

馬おじさんのお祖父さまは、そのとき何か具体的な導きを与えてくれたのでしょうか？あの『道徳経』を渡してくれたことについてですが……。正直、ああいった書物は、まだ若くて人生経験も乏しく、修煉や教理の基礎もない若者にとっては、かなり難解なのではないかと思うんです。

馬長生：

（馬おじさんはゆっくりと頷き、まるで目の前にあるかのように見えない本を見つめてから、再びエイヴリーに目を向けた。）

祖父については、前にも話したとおり、あまり多くを語る人ではなかった。直接的に教えるというよりは、自分の生き方、沈黙の姿勢そのもので示してくれる人だった。『道德經』を手渡されたときも、特別な説明や助言はなかった。ただ一言、「おじいちゃんには、これしかあげられない。大切に持っていていきなさい。」それだけだった。その言葉と、あのときの祖父の眼差しは、わしにとって何千の教えよりも深く心に残った。まるで、「この本が、これからのお前の道を照らしてくれるだろう」という、静かな信頼と託しのよう感じられた。それこそが、祖父がわしに示してくれた最大の道標だったと思う。

そして、エイヴリーの言う通り、『道德經』を読むというのは、当時のわしにとって本当に難しかったよ。十七、十八の若者で、頭の中はまだ「革命」の熱気に満ちていて、大きな出来事を経験したばかり。仏や道の教えに触れたこともない者が、老子の言葉を読み解くなんて、無理があった。

（馬おじさんはふっと笑い、どこか自嘲するような優しい表情を浮かべた。）

最初のころなんて、正直言って、読んでもまるで分からなかったよ。文字は読めるけど、その意味はまるで霧の

中。「道可道、非常道；名可名、非常名」……そういった言葉を、何度読んでも意味がつかめなかった。何度も挫折そうになったし、「なんでこんなに難しいんだ」と頭を抱えたこともある。

でもね、不思議と手放すことはなかったんだ。分からなくても、読んでいた。道の途中で腰を下ろしたとき、宿を見つけられなかった夜、月明かりの下で、空腹に耐えながら——とにかく、読む。それはまるで、寡黙な旅の伴侶のようだった。寒さや孤独を和らげてくれる、静かな存在だった。やがて、わしは無理に理解しようとはせず、ただ読むようになった。理屈で把握しようとはせず、言葉の響きや行間に自然に心を委ねるようになっていった。

そしてその後の長い旅の中で、数々の困難や出会いを経て、少しずつ、その言葉の意味が光を帯びて見えてくるようになった。以前は理解できなかった言葉が、ある出来事をきっかけに、ある体験を通して、突然「ああ、そういうことか」と腑に落ちる瞬間が訪れるようになった。

たとえば、人から冷たくされたり、侮辱されたりしたとき、水の柔らかさや謙虚さについて説いている言葉が自然と浮かんできた。世の中の無常や移り変わりを目にし

たときには、「非常道」という言葉の奥深さに思いを馳せた。そうやって、『道德経』は単なる読む本ではなく、人生そのものを照らす鏡のような存在になっていった。

それは、地図のように具体的な道順を教えてくれるものではなかった。でも、心の中の暗がりにそっと灯をともしてくれる灯火のようなものだった。物事を見る角度を変えてくれる、落ち着きと深みをもたらししてくれる存在だった。それこそが、あの厳しい旅路の始まりに、祖父がわしに与えてくれた「ご縁」だったのかもしれない。

（馬おじさんは語るのをやめた。部屋は再び静寂に包まれ、外では葉がさらさらと揺れ、夕陽はさらに濃くなって、一日の終わりをそっと告げていた。）

エイヴリー・リン：

こうして馬おじさんのお話を聞いていると、ふと孫悟空の修行の旅を思い出してしまいました。

彼も道教の師である菩提祖師のもとで七十二の変化を学びながら、のちには三蔵法師とともに西天へ経を求める

仏教の旅に出て、最終的には「闘戦勝仏」となるでしょう？

……すみません、変な連想かもしれませんが、馬おじさんも『道德経』を手にしつつ、仏門に入られたと聞いて、つい重ねてしまいました。

馬長生：

（馬おじさんはやさしく微笑み、エイヴリーの発想を面白そうに受け止めた。）

いやいや、エイヴリー、それはとても面白い視点だよ。決しておかしい連想なんかじゃない。孫悟空という存在は非常に特異なキャラクターだし、その修行の道の中には、修煉の真理がいくつも隠されていると思う。

たしかに、わしも『道德経』を携えながら、仏門に入った。その事実だけを見れば、道と仏という別の道を歩いているように思えるかもしれない。けれど今振り返ってみると、わし自身もどこか孫悟空に似たところがあったのかもしれない。祖父から授かった道教の経典を手にしつつ、夢に現れた仏門の高僧の導きによって出家を決意した――。

出家を決めたとき、あの夢に出てきた仏教の高僧の姿が、わしの心に深く刻まれていた。だからこそ、髪を剃り、粗末な僧衣をまとい、俗世と決別するという道を選んだ。それは、心の決意を形にするための第一歩だった。

そして、『道德経』は祖父からの形見であり、旅の友でもあった。当時のわしは、その二つが矛盾しているとは思っていなかった。ただひたすら歩きながら、読んで、考えて、感じていた。苦しみに直面したとき、困難に出くわしたとき、何かの縁で仏教の経文や教えに触れたとき——それらがふと意味を持ち始め、道が照らされるように感じる瞬間があった。それはまるで、小さな灯りが一步步ずつ先を照らしてくれているようだった。

わしは単純に考えていた。昔の聖人たちは、みな人に善を教え、苦しみから脱する道を示していたのだと。道であれ、仏であれ、その先にあるのは何かしらの救いであるに違いないと。

（馬おじさんは一瞬言葉を切り、目を遠くへ向けた。）

……もちろん、それは数十年前のわしの考え方だ。のちに真の大法に巡り合ってから、わしは「不二法門（ふにほうもん）」という法理の深さ、そして修煉における

「専一（せんいつ）」の重要性を心から理解するようになった。そのときには、こうした問題に対する見方もまったく変わっていた。でも、それは後の話。縁が熟してからのことだ。

当時のわしは、ただ一冊の古い書物を手にし、どこかにあるはずの光を求めてさまよう旅人にすぎなかった。そして、古来の悟りを得た人々の言葉の中に、不思議と共通する「善への指し示し」があるように思えたんだ。

孫悟空だってそうだよ。最初は菩提祖師のもとで道教の術を学び、その後、三蔵法師に仕えて幾多の苦難と試練を乗り越え、最後には仏の位に至る。彼が苦しみながらも前進し続けたその道程——その一步一步が、まさに心を磨くための鍛錬だったのかもしれない。

（馬おじさんはそっとエイヴリーを見つめた。彼の目には、慈しみと励ましが込められていた。エイヴリーのように心から道を求め、深く思索する者には、それを見守る者としての喜びがにじんでいた。）

エイヴリー・リン：

その最初の時期を越えてから、馬おじさんの旅はどのように続いていったのでしょうか？

馬長生：

（馬おじさんは長く静かに息を吐いた。それは、これから語られる波乱に満ちた年月への静かな導入のようだった。夕方の光は完全に消え、小さな部屋はやわらかな闇に包まれ始めた。馬おじさんはそっと手を伸ばし、小さな卓上ランプのスイッチを入れた。暖かい黄色の光が部屋に広がる。）

初めの戸惑いや苦勞を乗り越え、わしはようやく本格的な「四方を巡る旅」に踏み出した。それは、あの高僧から授かった言葉に従ったものだった。……そしてその旅は、なんと三十年にも及ぶことになったんだ、エイヴリー。三十年の放浪。人の甘苦を味わい尽くす年月だった。時には、生と死の境すら、わずか一步の差しかなかった。

わしの足跡は、中国各地の有名な寺院や道観、そして人里離れた場所にまで及んだ。肥沃な平野から、風の吹きすさぶチベット高原に至るまで。ときには縁に導かれて、仏教の根本地とも言えるインドやネパール、そしてタイの地にまで足を運んだ。どこかに「真の法」があるので

はないか——そんな一縷の望みにすがりながら、名山、古寺、高德の僧がいると聞けば、わしはどこへでも向かった。

その道のりは、誇張ではなく「生きるための試練」の連続だった。飢えや寒さは日常茶飯事。数日間、何も口にできず、托鉢でようやく一食を得る——そんな日々が続いた。夜になると、寺の軒下、橋の下、市場の片隅、あるいは洞窟や街道沿いの木の根元が「家」になった。北国の皮膚を刺すような寒さ、南方の焼けつくような酷暑、雨と風にさらされる長い夜……そうしたすべてが、日々の現実だった。

病もまた、わしを容赦なく苦しめた。熱帯のマラリアや赤痢にかかり、身体を蝕まれた。ときには深い山の中で倒れ、意識を失い、死の境をさまよった。わしを現世に繋ぎとめていたのは、ただひとつ、あの「法を求める」という決意と、高僧との約束だった。

そして道中には、いつも危険が潜んでいた。わずかに持っていた物が盗まれるのは、まだ軽い方だった。ときには偽僧に騙され、着ていた僧衣すら奪われたこともあった。山中では野獣に出くわし、足を滑らせて崖から落ち

そうになったり、川を渡る際に溺れかけたこともある――語ればきりがない。

（馬おじさんの声が少し低くなり、その語りには深い憂いや苦難の重みがにじんでいた。）

飢えや寒さは、確かに過酷だった。だが、人の心の冷たさや孤独――それが何よりも堪えるものだった。通行人に「詐欺師だ」「スパイだ」と罵られ、遠巻きにされ、見下される。そうした目線は、鞭よりも痛く、心を削った。長い夜、誰にも話しかけられず、一人で己の弱さ、疑念、故郷や家族への想いと向き合わなければならなかった。わしも何度か自問した。「自分は本当に正しい道を歩んでいるのか?」「これだけのものを犠牲にする価値があるのか?」

（しばしの沈黙が訪れた。馬おじさんは記憶の底に沈んでいる何かを静かに見つめ、エイヴリーもまた言葉を挟まず、そっとその空気に寄り添った。小さな部屋に響くのは、二人の静かな呼吸音だけだった。）

……だがな、エイヴリー。本当に不思議なことだが、そうした苦難の中でこそ、わしの信念は鍛えられていった。そして、まさに最も絶望的な状況の中でこそ、信じられ

ないような「縁（えにし）」に出会い、常人では想像できないような不思議な出来事を目にするようになった。そうした「何か」に出会うたびに、わしはもう少しだけ、歩いてみようと思えたんだ。

エイヴリー・リン：

そう考えると、馬おじさんの法を求める旅は、まさに『西遊記』の無数の試練を乗り越えるようなものでしたね……三十年、それは私の年齢よりも長い時間です。本当に、想像もつかないほどの苦難があったことでしょう。

でも、そのような困難の中で、さらなる啓示のような出来事や、特別な縁、いわゆる「奇遇」のようなものはあったのでしょうか？

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷き、遠くを見つめるような目で、記憶のページを一枚ずつめくるように語り始めた。）

本当に、その通りだよ、エイヴリー。三十年というのは、果てしない年月だった。もしも、絶望の中に差し込む希望の光がなければ、もしも、ふとした啓示や奇跡のよう

な出会いがなければ、きっと、わしはあの道を最後まで歩き抜くことはできなかったと思う。

苦しみについて語れば、限りがない。ある年の冬のことを今でも覚えている。わしは北方の山中にいた。雪が白くすべてを覆い尽くし、寺院はどこも閉ざされ、人の気配すらなかった。寒さをしのぐために、小さな岩穴を見つけて、そこで一夜を過ごすことにした。食料は数日前から尽きており、空腹で腹は鳴り、身体は寒さで震えていた。わしはただ身体を丸め、『道德経』を胸に抱きしめ、わずかなぬくもりを感じながら意識を保とうとしていた。そのとき、心の中で「もしかしたら、ここで死ぬのかもしれない」と思った。

寒さと飢えの中、うとうとと意識が遠のいたとき――あの夢の中の高僧が、再び現れたんだ。今回は何も言わなかった。ただ、慈悲に満ちた眼差しで、静かにわしを見つめていた。それだけだったのに、不思議と力が湧いてきた。目が覚めると、雪は止んでおり、少し身体が軽く感じられた。わしはなんとか岩穴を出て、よろよろと歩き出した。しばらくすると、一人の獵師に出会った。彼はわしに乾パンのような携帯食を分けてくれ、近くの村の場所を教えてくれた。そのとき、命をつないだ。

また別のときには、南方の国境近くでマラリアのような熱病にかかり、誰もいない草の小屋で倒れていた。薬もなく、誰の助けもないまま、何日も高熱にうなされていた。死を意識し始めたその夜、夢の中でわしは、棘だらけの道を歩いていた。足元は痛く、前に進むのもやっとだった。でも、その先には、まばゆい光が差し込んでいた。夢から目覚めると、目の前に一人の老婆がいた。少数民族の人のようにだった。彼女は、わしは何日もここに倒れているのを見つけて、水と薬草を持ってきてくれた。そのおかげで、奇跡的に回復したんだ。

そういった経験を通して、わしはますます確信するようになった。苦しみの中でも、どこかで見えない力が導いてくれている――と。

そして、奇縁といえど、忘れられない出会いがいくつかある。たとえば、あの嵩山（すうざん）を訪れたとき。あの地には、かつて有名な少林寺があった。もちろん、わしを訪れた頃には、すでに伝説にあるような厳かな雰囲気は失われており、俗世の色が濃くなっていた。それでも、どこかに本物の修行者がいるのではと期待し、何日かその周辺をうろついていた。

すると、山の中腹にある古木の下で、毎日のように静かに座っている一人の老僧を見かけた。彼はとても質素な姿で、誰とも話さず、自然と一体になっているようだった。わしは思い切って彼のもとへ近づき、合掌して頭を下げ、「教えをいただけませんか」と尋ねた。

老僧はゆっくりと目を開け、わしを一度じっと見てから、穏やかに微笑んだ。そして、何も尋ねずに、ただこう言った。「心が誠であれば、岩さえも開く。しかし、この岩はすでに風化している。法はもう、ここにはない。南へ行きなさい。そこには、より高い山と、より白い雲がある。」

それだけ言うと、再び目を閉じた。わしはその言葉の意味を考えながら、しばらくその場に立ち尽くしていた。

「この岩はすでに風化している、法はここにはない」――それは、わしのわずかな希望に冷水を浴びせるような言葉だった。でも、「南へ行け。そこには高い山、白い雲がある」――その一言は、まるで新たな方向を示してくれる灯のようでもあった。

結局、その老僧から直接的な教えは何も得られなかったが、その一言にこめられた慈悲と深い智慧は、わしの心に強く残った。わしは深く頭を下げ、静かにその場を離

れた。心の中には、まだぼんやりとはしていたが、新たな決意が芽生えていた。

こういった出会いは、短くても、まるで大海の中で灯る灯台のように、わしの歩む方向を照らしてくれた。そして、わしに教えてくれた。「本物の修行者というのは、賑やかな場所にはおらず、ひっそりと、静かに、そして素朴に生きているものなのだ」と。

（馬おじさんは話を止め、ふと窓の外に目をやった。夕暮れがあたりを染め、彼の顔をやわらかな黄金色に照らしていた。虫の音が、静かな空間にやさしく溶け込んでいた。）

エイヴリー・リン：

あのときの少林寺の高僧も、きっとすべてを見通しておられたのしょうね……馬おじさんの縁、そして歩むべき道も。

修行の道で出会う啓示や奇遇——そういったものは、私たちのような若い修煉者にとって、本当に魅力的で心に

響くテーマなんです……。でも、そろそろ日も暮れてきましたし、今日はこのあたりで一度区切りにして、また明日お話を聞かせていただけますか？

馬長生：

（馬おじさんはゆっくりとうなずき、穏やかな微笑みを浮かべたまま、窓の外に目を向けた。山の向こうには夕陽の最後の光がかすかに残っており、空にはオレンジ色の名残が静かに漂っていた。そして再び、やさしい声で言った。）

そうだね、エイヴリー。確かにもう遅くなってきた。こういう話は長くなるものでね、一度に全部語り切れるものではないよ。今日はここまでにしよう。また明日、時間があれば続きを話そうか。

（馬おじさんはゆっくり立ち上がり、軽く背伸びをしてから、エイヴリーにやさしい眼差しを向けた。）

こうして昔の話を若い人に語れるのは、わしにとっても嬉しいことだよ。エイヴリーのように真剣に耳を傾けてくれる人がいて、しかもそんなに深い思索を持っている――わしは、まるで若い頃の自分を見ているような気

がしたよ。あの頃のわしも、ただただ真理を求めて、心を燃やしていた。

さあ、今日はもうゆっくり休みなさい。山道は夜になると足元が暗いから、気をつけて帰るんだよ。

第二日目

エイヴリー・リン（Avery Lin）：

こんにちは、馬おじさん。今日もまた来ました。

馬長生（マ・チャンシェン）：

（馬おじさんはお茶の席に座り、窓の外の傾きかけた夕

陽を静かに見つめていた。エイヴリーの声に気づくと、やさしい微笑みを浮かべて振り返った。）

やあ、いらっしゃい、エイヴリー。座って。ちょうど今、お茶を淹れたところなんだ。

（馬おじさんはエイヴリーに向かいの椅子を勧め、ゆっくりと湯飲みに温かいお茶を注いだ。立ち上る湯気に、山のお茶のかすかな香りが漂う。）

さて、今日は昨日の続きだね。三十年にも及ぶ道を求める旅——それは、まさに波乱万丈の歳月だった。昨日も少し話したように、飢えや病、危険との闘いだけではなく、時に信じられないような出来事や、奇跡のような出会いもあった。そして、もうすぐ辿り着けるかと思えば、まだ遥かに遠かったと気づく、そんな瞬間もあったんだ。

（馬おじさんは一口お茶を含み、遠くを見つめながら、色彩に満ちたあの年月へと想いを馳せた。）

エイヴリー・リン：

はい、とても楽しみにしています。時間の流れは気にせずに、思い出のままだに語っていただければ嬉しいです。特に心に残っている出来事から、ぜひ。

馬長生：

（馬おじさんはうなずき、微笑んだ。）

そうだね。三十年という長い年月の中では、記憶にも濃淡がある。はっきり覚えているものもあれば、ぼんやりとした断片だけが残っているものもある。だから、今日はその中でもとくに心に深く刻まれている出来事——人生の転機とも言えるような体験から話すとしよう。時系列は前後するかもしれないが、それもまた自然な流れの中の語りだと思ってくれたらいい。

（馬おじさんは湯飲みを置き、エイヴリーを見つめるまなざしに静かな励ましの色が浮かんでいた。）

わしの信念を大きく支えてくれた出来事の一つに、チベットのラマ僧が「坐化（ざけ）」される場面に立ち会ったことがある。それは、わしが出家して十年以上経った頃だったと思う。あの頃、わしは青蔵高原の辺境を放浪していた。空気は澄み、静寂が広がり、人々はとても信仰深かった。

ある日、小さな村に辿り着いたとき、村人たちが「尊いラマ僧が間もなく入寂される」と噂していた。そして、

その方が最後の法話をなさるというのだ。わしは心の底からお会いしたいと思い、その場所へ向かった。

着いたときには、法話はすでに終わっていた。高齢のラマ僧は、石の台座に座して瞑想しておられた。そのお顔は仏のように穏やかで、安らかさに満ちていた。周囲には弟子や村人たちが静かに座っており、場には厳かな空気が漂っていた。

わしも一角に腰を下ろし、そっと合掌しながら心の中で「何か少しでも縁があれば……」と願っていた。すると突然、瞑想していたラマ僧がゆっくりと目を開けられた。その目は、信じられないほど澄んでいて、まっすぐにわしを見つめてきた。

一瞬、驚いた。なぜ自分を見ておられるのか……と思ったそのとき、口は動いていないのに、心の中にはっきりと声が響いた。「道はまだ長い。信念を持ち続けよ。」

わしは息を呑み、ただただ圧倒された。その一言は、疲れきっていた心に雷のように響き、長年蓄積していた疑念や疲労が一気に吹き飛ぶようだった。ラマ僧はその後、静かに目を閉じ、再び深い瞑想に入られた。

数分後、驚くべき光景が目の前で起こった。ラマ僧の身体から、虹のような五色の光が放たれ始めたのだ。その光はだんだんと強くなり、ついにはその御身体そのものが縮んでいき、小さく、小さくなり、やがて完全に消え、残されたのはひとつのまばゆい虹のような光球だった。それはふわりと空中に浮かび、ゆっくりと青空へ昇っていき、そして、跡形もなく消えていった。

その場にいた全員が、言葉を失い、そして自然とひざまずいた。わしも同じように、涙が溢れ出して止まらなかった。これほどまでに超越した「去り方」を、目の当たりにしたのは初めてだった。ああ、やはりこの世には神仏がいる。真に修行を極めた者は、こうして肉体を超えて去るのだと、確信した瞬間だった。

そして、そのラマ僧が残してくださった「道はまだ長い、信念を持ち続けよ」という一言。それは、その後わしが何度も困難に直面したとき、何度も思い出す支えとなった。心が折れそうになるたびに、わしはあの虹の光球を思い出し、そして歩き続けようと力を取り戻すことができた。

（馬おじさんは言葉を止めた。手にしていたお茶は、いつの間にか冷めていた。）

エイヴリー・リン：

……その情景、本当に胸を打たれます。こういった「坐化」の現象については、ネットの記事などで読んだことがあります、実際に体験談として聞くのは今回が初めてです……。

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷いた。目には、あの記憶の余韻がいまだに残っているようだった。）

そうだね、エイヴリー。本や噂で聞くだけだと、どうしても半信半疑になってしまうものだ。でも、自分の目で見て、五感で感じたとき——その信念は揺るぎないものになる。決して誰にも否定できない「真実」として、自分の中に根づくんだ。

ヒマラヤ山脈の山中を放浪していた頃、もう一つ、忘れられない体験があった。あれはネパールのとある人里離れた山岳地帯だった。山々は幾重にも連なり、白い雲が峰をまとい、空気は澄みきっていた。そこに向かう前、ほかの巡礼者や現地の人たちから「空を飛ぶ僧侶」の噂

を耳にしたことがあった。「どこから来たのか分からない年老いた僧侶が、まるで葉っぱのように山から山へと舞いながら移動する」というのだ。ある人は彼を菩薩の化身だと言い、また別の人は、何世にもわたって修行を積んだ高僧だと語っていた。わしもその話を聞いたが、旅の途中では不思議な話をたくさん耳にするし、そのときはさほど気にしていなかった。

ところがある夕方、人気のない谷あいでは道を探していたとき、ふと目を向けた先の高い山肌に、岩の突端に立っている一人の僧侶を見かけた。小柄な体で、静かに立っておられた。その姿には何とも言えない軽やかさと気品があり、まるで肉体の重さから解き放たれているかのようなだった。わしの胸は高鳴り、「これは……ただごとではない」と直感した。

するとその僧侶は、そっとひざを曲げるような動作をし――そして、ふわりと宙に浮かび上がった。急に飛び立ったわけではなく、まるで一枚の葉が風に乗って漂うように、ゆっくりと山と山の間の深い谷を越えていった。早くも遅くもなく、ただ空中を優雅に進んでいくその姿は、まるで空を散歩しているかのようなだった。袈裟が風に舞い、大きな蝶のように美しかった。

わしは、息をするのも忘れてその様子を見つめていた。本当に、自分の目を疑った。その光景は数分ほど続いたのち、僧侶は反対側の山の岩場に静かに降り立ち、そのまま林の中に姿を消していった。

彼が完全に姿を消してから、わしはようやく我に返った。驚きと感動で胸がいっぱいだった。あれは間違いなく、常人の域を超えた「神通力」の一つだった。あのとき初めて、わしがこれまで聞いていた話が、決して虚構でも幻想でもないことを理解した。でも、わしは彼を追いかけたり、無理に話しかけようとはしなかった。あれは特別な「縁」であり、ただ「見せていただいただけ」で充分だった。彼はまるで伝説のように現れ、伝説のように消えていった。

こういった「奇遇」は、わしに直接修行法を授けてくれるわけではない。でも、その影響はとても大きい。古代の経典にある「神通」や、「得道者の能力」が、実在するのだと実感させてくれる。それまで漠然としていた「到達点」が、急に現実味を帯びて迫ってくる。ああ、あの場所には確かに「何か」がある——そう確信できるようになるんだ。わしはその体験を通じて、「この道を進み続けよう」と、もう一度強く思うことができた。

（馬おじさんは小さくため息をつき、それからエイヴリーをやさしく見つめた。）

これらは、わしにとって大切な「恵み」だったよ、エイヴリー。でも、こういう特別な体験ばかりではない。実際には、多くの時間が現実の厳しさとの向き合いだった。教えを乞うても断られたり、道を求めて歩いても、希望を見出せないこともあったんだ。

エイヴリー・リン：

ええ、修煉を志す者にとっては「空を飛ぶ」という現象もそれほど驚くべきことではありませんが、まだ修煉の道に足を踏み入っていない人からすれば、そうした話はたいてい「半信半疑」で聞かれるものです。実際に目にしたとしても、錯覚とか、マジックのようなものだと思われるってしまうこともありますね……。

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷き、共感の色を浮かべた。）

まったくその通りだよ、エイヴリー。一般の人々にとって、そういう話は到底信じがたいものだ。錯覚だとか、

作り話だとか、あるいは精巧なトリックだと受け取るのが関の山だろう。というのも、そうした現象は現在の実証科学の枠を超えているし、彼らが学んできた物理法則にも反するものだからね。

でも、一度でも修煉の道に入って、自身の心やエネルギーの動き、精神の変化といったことを少しでも体感した人間にとっては、それほど突飛なことではない。私たちは、この宇宙にはまだ人間の知覚の範囲を超えた神秘的な法則や、より高次の原理が数多く存在していることを知っている。

だからこそ、そうした奇遇は、たとえ直接的に法門を授けてくれるわけではなくても、道を照らす灯火のように、わしの中の「求道の炎」を絶やさぬよう支えてくれた。ああ、自分が追い求めているものは確かに存在するのだ——その確信を、わしに与え続けてくれたんだ。

ただ、さっきも言ったように、いつも奇跡のような出来事ばかりだったわけではない。多くの時間は、期待と失望の繰り返しだった。わしは数えきれないほど多くの大きな寺院、有名な道観を訪ねた。どこそこに徳の高い僧や道士がいると聞けば、すぐに足を運び、心から弟子入りを願い出た。

ある高僧は、わしの話を静かに聞いたあと、しばらく見つめてから穏やかにこう言った。「釋長行（シー・チャンシン）よ、おまえの縁はここにはない。この場所で与えられるものでは足りない。もっと遠くて広い道が、おまえを待っている。」

また別の方はこう言った。「おまえの切なる求道の心は感じられる。でも、私にはおまえを導くに足る徳がない。おまえにとっての真の師は、もっと先で待っている。進み続けなさい。」

また別の道士は、わしが土下座して想いを伝えたあと、しばし沈黙し、こう言った。「進み続けなさい。心が静まり、縁が満ちたそのとき、おまえは呼び声を聞くだろう。そのときこそ、何をすべきかがわかる。」

そうした丁寧な「お断り」の言葉は、最初のうちは本当に辛かった。自分はどれだけ歩き回っても、どれだけ求めても、誰も自分を受け入れてくれない——そういう感覚に打ちのめされそうになった。でもあとから思い返すと、あの言葉の中には確かな慈悲が込められていたと感じるようになった。彼らがわしを受け入れなかったのは、わしに誠意がなかったからではない。むしろ、わしの縁

がまだ熟していなかったか、あるいは彼らの法門が、わしが本当に探しているものとは違っていただ。

むしろ、ああいう意味深な「拒絶」の言葉が、逆にわしの信念を強めてくれたんだ。これは、きっと自分のために特別な道が用意されているのだと。そして、夢に現れたあの高僧が語った「真の師」や「大法」は、どこかでわしを待っていてに違いない。だからこそ、わしの使命は歩みを止めず、自らを鍛え続け、縁が熟すその時を待つことなのだと。

この、失望と希望が交差する感情——それがわしを長い年月支えてきた。実はそれこそが、真の「修煉の試練」だったのかもしれない。もしあの時、わしの心に揺るぎない意志と信念がなかったなら、とっくに道を諦めていただろう。

（馬おじさんは言葉を切り、お茶を注ぎ足した。エイヴリーと自分の茶碗に静かに湯気が立ち上る。その煙を見つめる馬おじさんの瞳には、過ぎ去った無数の道と人々の面影が映っているようだった。）

エイヴリー・リン：

これまで先生が「断られた」時のお話の中で、もし可能でしたら、1～2 回ほど詳しく覚えておられる出来事がありますか？

例えば、そういう導師から弟子として受け入れてもらえなかった際に、「せめてしばらく留まらせていただいて、お説法を聞かせていただけないでしょうか？」とお願いしたことは？

馬長生：

（馬おじさんはゆっくりと頷き、記憶がまるで昨日のことのように鮮やかによみがえる。）

あるとも、エイヴリー。ああいう「断られた」経験は深く心に刻まれていてね。というのも、それは希望が生まれてはまた打ち碎かれる瞬間の連続だったから。君が言うように、わしも簡単に引き下がったわけじゃない。どうしても法を求めたいという一念から、なんとかお願いしてみたこともあった。

今でもはっきり覚えているのは、湖南のある名山に向かった時のこと。そこに、長年隠遁して修行している高德な道長がいるという噂を聞いた。何日もかけて探し回った末に、ようやく竹林の奥にある質素な草庵でその方に

お会いすることができた。その道長は七十を過ぎていたが、姿勢はしゃんと伸びていて、目は星のように鋭く光っていた。

わしは深く頭を下げ、これまでの旅と志をありのままに話し、どうか弟子にさせていただきたいと懇願した。道長はしばらく黙って、わしの目をじっと見つめた。まるで心の奥まで見通されているようだった。やがて静かにこうおっしゃった。

「おまえの志は見て取れる。しかし、わたしたちの間には師弟の縁がまだ満ちておらぬ。おまえが進むべき道はここではない。」

その瞬間、わしの心は沈んだ。でもあきらめきれずにこう食い下がった。

「師匠、もし弟子としてのご縁がないのであれば、せめてここにしばらく滞在させていただきませんか？ 雑用でもなんでもいたします。ただ、日々少しずつでも師匠のお言葉を拝聴できれば、それだけで十分なのです。」

すると道長は穏やかなまなざしのまま首を横に振られた。

「わしに教えられることなど、実はさほど多くない。おまえが学ばねばならぬことは、おまえ自身が旅の中で体験し、悟らねばならぬことなのだ。ここに留まれば、そ

の歩みを遅らせることになるだろう。」

さらにこう付け加えられた。「水は澄むために流れねばならぬ。火は輝くために燃えねばならぬ。おまえもまた、歩みを止めてはならぬ。」

その言葉を聞いて、わしはそれ以上お願いすることをやめた。失望と寂しさはあったが、その言葉の中に確かな慈悲があった。道長は、わしをとどめてぬくもりに包むよりも、あえて試練の道を歩ませることで、真の導きを与えてくれたのだ。わしは深く頭を下げ、草庵を後にした。そして心の中にまたひとつ大きな問いが生まれた――「では、わしの行き着く先はどこなのか？」

もう一つの思い出は、四川の峨眉山にある古刹でのこと。風光明媚なこの地は、仏教四大名山の一つとして知られている。わしはその寺の住職、威厳と徳を兼ね備えた僧侶にお会いし、どうかここで出家させてほしいと願い出た。

住職は黙ってわしの話聞いてくださり、やがて静かにおっしゃった。「おまえには仏法を求める根がある。しかし、この寺で行っている日々の読経や儀礼が、おまえの本当に探しているものと一致しているとは思えない。

おまえの求める法は、これらのお経や朝晩の鐘の音の中にはない。」

わしはそれでも、せめて寺に滞在し、雑用係としてでも仏法にふれたいと申し出た。しかし住職は手を振ってこう言われた。「おまえの道は風の道だ。遙か遠くまで進まねば、本当の空と海を見ることはできぬ。ここにとどまれば、鳥籠の中の鳥に過ぎぬ。いかに餌があり、雨露をしのげても、空を自由に飛ぶことはできぬ。おまえの業（カルマ）は、人の世の荒波の中で、実際の試練を通してしか清められない。」

そして、こうもおっしゃった。「おまえの本当の師は、非常に深遠な法を持つ方で、その方こそが、おまえを真に解脱へと導く。あきらめず、探し続けなさい。縁が満ちた時、その方に出会えるだろう。」

こうした「断られ方」は、明確な答えを与えてくれなかったものの、どれもがまるで預言のようだった。それは希望を失わせるのではなく、逆に希望の火を燃やし続けてくれた。わしは次第に思うようになった。わしのこの長い旅は、特別な準備期間なのだ。真の師と大法に出会った時に、それを本当に受け取るための器となるよう、自分の心を磨く時間なのだと。そうして、どんなに断ら

れても、どんなに心が沈んでも、「これはまたひとつ越えるべき関門だ」と自分に言い聞かせて、また歩き出したのだった。

（馬おじさんは話を止め、そっと額に手を当てた。かつての失望の記憶も、今こうして振り返ると、すべてが深い意味を持つ天の配剤だったのだと、静かに思い返しているようだった。）

エイヴリー・リン：

では、長年にわたる法を求める旅の中で、先生と同じように法を探し求めている人たちに出会ったことはありますか？つまり、同じ志を持つ仲間のような方々に…

馬長生：

（馬おじさんは静かに頷き、同じ境遇にあった人々への共感を込めた微笑みを浮かべる。）

ああ、あったとも、エイヴリー。たくさんいたよ。万里に及ぶ旅の中で、孤独は常だったが、時折幸運にも同じ志を抱く者たちと出会うことができた。皆それぞれ違う場所から来ていて、背景も様々だった。筆を捨てた書生

もいれば、純朴な農夫、また社会的地位を持っていたのにすべてを捨てて修行の道に入った人もいた。

それぞれが、それぞれのやり方で道を求めている。経典を読み解くことに専念する者もいれば、厳しい修行によって身体と精神を鍛える者もいた。そして、わしのように、あてもなく寺から道観へと歩き続け、名師との出会いを一縷の望みにしていた者もいた。

あるときのことをよく覚えている。四川のあたりで、西藏（チベット）へ向かっていたとき、痩せこけてはいたが目に強い光を宿した一人の男に出会った。彼は非常に独特な苦行を行っていた。三歩進むごとに、地面にひれ伏し、額を地に着けて一礼をする。そしてまた三歩進む――それを絶え間なく繰り返しながら、はるか西藏を目指していたのだ。聞くところによると、彼は湖北省から何県も跨いで、ずっとこの方法で歩いてきたという。

ある日の昼下がり、わしらは道ばたの一本の大樹の下で休憩を取った。そのとき彼と会話を交わす機会があり、彼の話から、法を求めるその誠の心と、驚くべき意志の強さがひしひしと伝わってきた。彼は、「このように身体を尽くして苦を受けることでこそ、業を清めることが

でき、仏や菩薩に感応されて、西藏のどこかの寺で弟子として受け入れてもらえるだろう」と信じていた。

彼のひたむきな姿に、わしは深く感銘を受けた。ちょうどその頃、わし自身も進むべき道を見失いかけていた時期だった。だから、彼の修行方法を見て、「自分もやってみようか」と思ったんだ。これもまた、誠の心を示す一つの方法であり、業を消す手段かもしれない、と。

そして実際にわしも一時期、彼のやり方を真似て、三歩進んではひれ伏す修行を試してみた。ところがほんのわずか進んだだけで、全身が痛み、疲れ果ててしまった。そのとき、彼の意志の強さがどれほど並外れていたかを、身をもって知ったんだ。

やがて幾多の困難を乗り越えて、二人はようやく西藏のある大きな僧院にたどり着いた。彼はその長く厳しい修行の姿勢を認められ、あるラマ僧に弟子として迎えられた。感激のあまり、彼は涙を流して喜んでいた。

一方で、わしはといえば、同じようにそのラマ僧のもとを訪れて、入門を願い出た。ラマ僧はしばらくわしを見つめ、そして静かにこう言われた。「おまえの道を求める心は尊い。だが、いまのままだはおまえの業はまだ重

く、ここには縁がない。おまえの本当の師は、もっと先に待っている。」

その言葉を聞いたとき、わしの心には深い失望が押し寄せた。「自分もこんなに努力したのに、なぜ認めてもらえないのか？」と。仲間が受け入れられる一方で、自分はまたもや旅を続けねばならぬとは、何とも言いようのない虚しさだった。

だがそのとき、わしは夢で出会った高僧の言葉を思い出した。「この旅は長く、困難を極める。業を償い、心を試すものだ」と。ラマ僧の言葉に拒絶の響きはあったが、同時にそれは、わしの特別な宿命への再確認でもあった。

（馬おじさんは少し沈黙し、感情を落ち着けるように目を閉じる。）

ああいう出会いは、短くても大きな励みになる。自分がひとりぼっちではないと感じられるんだ。わしらは互いにわずかな知見を交換し合い、ときには黙ってともに空を見つめるだけでも、それが心の支えになる。遠くにあるはずの答えを、同じ空の下で探しているという、それだけでも十分だった。

とはいえ、そうした出会いも長く続くことは稀だった。誰しもそれぞれの縁、歩むべき道がある。共に旅したとしても、それはほんの一時の交差にすぎず、また別の道へと分かれていく。まるで大海原を漂う小舟のように、一瞬だけ並走して、また別方向へと漕ぎ出していくようなものだ。

でもな、あのときの出会い、彼らの純粋な求道の心——それだけは、今でもわしの胸にしっかりと残っている。

エイヴリー・リン：

「三步一拝」の修行法については、私も聞いたことがあります。以前、YouTube でそのように修行している人の映像を見たこともあります。直接この目で見たわけではありませんが、それでも彼らの求道の心を感じることができました…。

馬長生：

（馬おじさんは頷き、どこか遠くを見つめるような目になる。）

そうだね、エイヴリー。今の時代はインターネットがあるから、君たちはそのような修行者の映像や情報に比較的簡単に触れられる。でも、私の時代にはそんな情報はほとんどなかった。だからこそ、ああして実際に目の前でその誠の心や、鋼のような意志を見せられると、それは非常に強く心に響いたものだ。人間の信念と敬虔な心は、限界をも超える力を生むのだと実感した。

（少し間を置き、声を落として続ける。旅のもう一つの側面を語るように。）

さっき話したような奇跡的な出合いや、志を同じくする仲間との邂逅。それらは、長い道のりの中で、まるで道標のような光だった。でも、それらはあくまで一時のものであり、大部分の時間は、孤独との闘いであり、数々の困難との格闘だった。そして何よりも、自ら学び、自ら悟るという修行の道だった。

私は特定の師に正式に弟子入りして、体系的に学ぶということはできなかった。私の学びの大半は、多くの場から得た断片的なもので構成されている。祖父から譲られた『道德経』は、いつも私のそばにあった親友のような存在だった。人生の節目や苦難のたびに、それを開いて

読み返すと、以前には見えなかった新たな意味が浮かび上がってくることがよくあった。

また、旅の中で出会った僧侶や道士たちの言葉も、貴重な教えだった。それぞれ異なる法門を持ち、異なる解釈をするけれど、時にはたった一言が私の心の扉を開く鍵になることもあった。その言葉をすべて覚え、後に自分なりに考え、照らし合わせていった。

さらには、道中で出会った一般の人々――田畑で働く農民や、素朴な職人たちの口から語られる人生の話の中にも、大切な教訓が込められていることがあった。世の中の真理は、必ずしも高尚な言葉の中にあるとは限らない。むしろ、ありふれた日常の中にこそ、本当の知恵や慈悲が潜んでいることもある。

そして、自然だよ、エイヴリー。雄大な山々、うねる大河、果てしなく広がる森、あるいは道端の一本の草、一輪の野花――それらすべてが無言の師だった。大地と空の巡り、命の誕生と死の繰り返し、それをじっと見つめることで、私は次第に無常の理や、宇宙の調和のようなものを感じ取れるようになった。

だが、最も深い学びを与えてくれたのは、やはり自身が経験した苦しみと試練だった。飢え、寒さ、病、拒絶、孤独…。それらが私の意志を鍛え、心の角を削り落としていった。それによって、自分自身の中にある欲や執着が少しずつ明らかになり、そして一つひとつ手放していけるようになった。困難を一つ越えるたびに、心が少し軽くなり、視界が少し広がるように感じたものだ。

（馬おじさんはエイヴリーをまっすぐに見つめ、その目に誠意が宿る。）

この「自ら学び、自ら悟る」という道は、本当に険しい。誰かが手を引いてくれるわけでもなく、一步一步、自分で踏み出さなければならない。でも、それがきっと天の采配だったんだと思う。なぜなら、試行錯誤の中で自ら気づいたものは、借り物の知識とは違って、骨の髄まで染み込むような「自分自身の智慧」になるからだ。それこそが、真の修行、真の証悟なのだと思う。

エイヴリー・リン：

そうですね、先生のお話を伺っていると、その大切さが少しずつ伝わってきます。でも、私たち若い世代にとっ

て、学びの大半は書物から得たものであって、実際の深い体験はまだこれからです…。

ところで、先生の長い求道の旅の中で、道教や仏教以外の流派に接したことはありますか？『轉法輪』の中で師父が説かれている「奇門功法」のような修煉法に触れたことは？

馬長生：

（馬おじさんは意味ありげに微笑む。）

「奇門功法」について話すのかい？ そうだね、三十年にわたる放浪の中で、私が訪ね歩いたのは、必ずしも正統な仏教寺院や道教の道観だけではなかった。真の法を求めるという一心で、私もかつては様々な流派、世間ではあまり知られていないような神秘的で高度そうに見える法門にも興味を持ち、学びを求めたことがある。

（声を落とし、慎重な眼差しを浮かべながら語る。）

その中には、もう少しで道を誤るところだった経験もあるんだよ、エイヴリー。それは私にとって、決して忘れられない教訓となった。正法の導きがなく、正と邪を見

極める力がなければ、修煉の道がどれほど危険かを痛感した出来事だった。

あれは、すでに放浪して二十年以上が過ぎた頃だったと思う。その頃には、私もある程度の経験を積み、不思議な出来事や異常な修行法についても耳にしていた。ある日、南方の辺鄙な山中に、見た目も立派で、非常に優れた功法を伝授してくれる「先生」がいるという話を耳にした。その法門は、短期間で能力を開発でき、特異な力を得られるという噂だった。私は強く惹かれ、最短で真理に辿り着けるのではと期待して、そこを訪ねた。

その「先生」は確かに魅力的な雰囲気を持っていて、話し方も流暢で、高尚で神秘的な言葉を多用していた。宇宙の構造やエネルギー、常人には理解できない境地について語り、私も当初は感動し、彼の指導に従って呼吸法や動作を練習し、身体に何らかの感応があるようにも思った。私は、「今度こそ本物かもしれない」と思っていた。

しかし、日が経つにつれ、徐々におかしな点が見えてきた。彼の教えには慈悲や正念といった根本が欠けていた。彼は、能力や利益を得ることばかりを強調し、人を支配することなどにも触れ、心を修め、執着を捨てることに

ついてはほとんど語らなかった。弟子たちに対しての要求も次第に奇妙なものになり、時には私利私欲が見え隠れし、人としての基本的な道理すら逸脱していた。

極めつけは、ある日その法門に従って座禅をしていたときだった。集中して「開かれる何か」を感じようとしていた矢先、目の前に現れたのは美しい光景でも、荘厳な神仏でもなかった。そこに広がっていたのは、暗黒の空間であり、冷たい気が全身を包み込むような異様な感覚だった。やがて、歪んだ、醜悪な低次元の存在たちの姿が現れ、まるで亡者や鬼神のような連中が、怒り狂い、争い合い、凶悪な形相で迫ってきた。

私は心底恐ろしくなり、全身が震え、急いで修煉を中断した。鼓動は激しくなり、汗が滝のように流れ出した。

そのとき、私は目が覚めた。「これは間違った道だ」と気づいた。その法門は見た目こそ神秘的だが、その内側には明らかに邪なるものが潜んでいた。それは正法ではなかった。もしこのまま続けていたら、解脱どころか、ますます業を重ね、災いを呼び込み、低次元の存在に憑依されていたかもしれない。

翌朝早く、私は何も告げずにその場を去った。心の中は恐怖と、未熟さゆえの後悔でいっぱいだった。それ以降、私は修煉の道において、一層慎重になった。修行は決して軽んじてはならない。見た目の派手さや、美辞麗句に惑わされてはいけない。心で感じ、善と慈悲の根本原理に照らし合わせなければならない。もし、どんなに高尚に見えても、それが善に背いているなら、それは正法ではあり得ないのだ。

あの出来事は、私にとって道を誤りかけた経験であると同時に、大切な学びでもあった。それ以後、私はますます本物の師、本当の大法を見つけないという願いを強くした。

（馬おじさんは長く息を吐き、その苦い記憶を語り終えた安堵のような表情を浮かべる。）

エイヴリー・リン：

先生のお話を聞いていて、ふと仏教の言葉を思い出しました。「人身難得、中土難生、正法難聞」…

馬長生：

（馬おじさんは静かにうなずき、深い共感をたたえた表情で答える。）

そうだね、エイヴリー。「人身難得、中土難生、正法難聞、明師難遇。」これは仏の教えであり、本当にその通りだと思う。一つ一つが、極めて貴重で得難いものなんだよ。

この人としての身体、一見すると簡単に得られるように思えるけれど、実際には、この世に人間として生まれて、五感を備えて学び修行できるというのは、経典によれば、数えきれないほどの因縁を経てようやく得られるものとされている。

さらに「中土」――神伝文化が存在し、聖人たちが降臨して、経典や修行の道を遺した場所に生まれることも、大きな福分なんだ。

でも、人間として生まれ、中土に身を置き、それでいて正法を聞くことができ、さらには明師に出会って導きを受けられるというのは、それらの中でも特に難しいことだ。まるで大海の中で針を探すようなものさ。

かつて私が邪道に迷いかけたあの出来事、それはまさに「正法難聞」の重みを教えてくれた出来事だった。見かけだけは荘厳で、高尚に聞こえる理屈を並べ、最初は何か感応のような現象も起きたりする。そのような邪門の法でも、そうやって人の心を引き寄せようとする。でも、心の中に真正な道を求める気持ちがなければ、そうしたものに惑わされ、知らず知らずのうちに誤った道へと進んでしまう。

三十年にわたる求道の中で、私は数え切れないほど多くの「師」と自称する人たちと出会った。中には確かに多少の功夫や理解を持っている人もいたけれど、彼らの法門は正法ではなかったり、自分の縁とは合わなかったりもした。また、中にはただ人の信を利用して利益を得ようとするだけの者もいた。本物と偽物、正と邪を見分けるのは、導く人がいなければ本当に難しいものだ。

だからこそ、後に私は本当の正法と出会う縁に恵まれたとき、言葉にできないほどの感謝と敬意を感じた。それは決して容易に得られるものではなかった。長年にわたる探求、流した汗、涙、時には血さえも、それらすべての積み重ねの上に初めて得られたものだった。それは、

心から悔い改めて正しい道に戻ろうとする者を、天が見捨てなかった結果でもあった。

あの邪道に足を踏み入れかけた経験は、危険だったが、それはまるで一つの「リトマス試験紙」のような役割を果たしてくれた。それによって、私の内に「免疫力」ができ、よりはっきりと見極める目を養えた。それ以降、正法を求める気持ちはますます強く、揺るぎないものになった。たとえ何度つまずき、失望しても、その信念の炎だけは決して消えることがなかった。

（馬おじさんはエイヴリーを見つめ、その瞳には深い経験と揺るぎない信念が宿っている。）

だからこそ、エイヴリー、君たちのような若い世代が、将来、正法に出会い、明師に導かれる縁に恵まれたとしたら、それは計り知れないほどの福分だということを忘れないでほしい。どんな誘惑や一時的な困難にあっても、決してその志を曲げてはいけない。真正なる修煉の道は、決して薔薇色ではないかもしれない。でも、それこそが、私たちが本当に帰るべき道なのだ。

エイヴリー・リン：

先生のお話を聞いていて、自分のことを振り返ってしまいました。私は大法を得たのがあまりにも簡単で、ほとんど苦難も経験せず、ただ縁と少しばかりの悟性だけで得られたような気がします…。

先生のように、一人で各地を彷徨いながら法を求めるなんて、私にはとても想像できません。どれほどの苦勞、どれほどの劫難と試練があったことでしょう。それに、長い旅を孤独に歩むなんて…。

先生はその年月の中で、山奥の深い森や溪谷で、独りで修行しているような修煉者に会ったことはありますか？

馬長生：

（馬おじさんは微笑みを浮かべ、エイヴリーの思いに共感した様子で穏やかにうなずく。）

君の言うことにも一理あるよ。それぞれの人には、それぞれの縁と、異なる道が定められている。法を得るまでに無数の苦難を経る者もいれば、縁が熟して簡単に得る者もいる。大切なのは、法を得るまでの道が容易だったかどうかではなく、法を得た後に、それをどれだけ大切

にし、どれだけ本気で修煉に取り組めるかだ。君の縁は、きっと過去世からすでに蒔かれていたのだろう。だからこそ、今生ではそれが自然と実を結んだのかもしれないね。

山奥で独りで修行する修煉者についてはね、三十年の旅の中で、確かに出会ったこともあるし、話に聞いたこともあるし、その存在を感じ取ったこともある。

（馬おじさんは静かにうなずき、視線を空の彼方に向けながら、過去の情景を思い起こすように話し始める。）

ある時のこと、私は中国南西部の陰しい山岳地帯を通っていた。そこは神秘的な森と毒蛇の棲む谷で、人の足がほとんど入らないような場所だった。地元の人たちから、その奥深い山中には、世俗から離れた高德の修行者が隠れて住んでいると聞いた。私はその話に心を動かされ、少しの希望を胸に、一人で山奥へと足を踏み入れた。

数日間、森をかき分け、川を渡り、ようやく見つけたのは、蔦に覆われた大きな洞窟だった。中は薄暗く湿っていたが、不思議と静寂に満ちていた。目が暗さに慣れてくると、私は驚くべき光景を目にした。

洞窟の中央、平らな石の上に、一人の人物が坐禅を組んでいた。その人がどれほどの間、そこに座っていたのかは分からない。衣服はすでにぼろぼろで、厚い埃に覆われ、長年の風雨にさらされたようだった。髪も髭も白く、七十代を越えた老人のように見えた。しかし、驚いたのは、顔や手の皮膚が滑らかで、張りがあり、まるで三十代の若者のようだったこと。そしてその人は、まったく呼吸していないように見えた。胸は動かず、鼻の呼吸も感じられず、本当に像のようだった。

私はその場に立ち尽くし、心臓が高鳴るのを感じながら、ただ見守るしかなかった。一日、また一日、三日が過ぎても、その人はまったく動かなかった。私は「この人は生きているのだろうか、それともすでに入寂したのだろうか」と自問した。そしてこの人は、どんな法門でここまで深い入定を成し遂げたのだろうか、と。

四日目、私はついに「近づいて確かめてみようか」と考えた。足を動かそうとしたその瞬間――突然、私の頭の中に、低くて穏やかな声がはっきりと響いた。「私の修行を妨げてはならない。」

私は愕然とし、修行者を見つめた。彼の口は閉じたままで、目も瞑っていた。だがその声は、間違いなく私の心

に直接伝わってきたのだ。私は恐れと恥ずかしさが入り混じった感覚に襲われ、両手を合わせてその人に向かって深く頭を下げ、心の中で謝罪した。そして静かに洞窟を後にし、後ろを振り返ることもなかった。

その出来事は、私の心に深く刻まれた。世界には、私たちの常識では到底想像もつかないほどの奇跡が存在する。まだ見ぬ法門、未知の境地がこの世には確かにあるのだと、改めて感じた。そして私は、自分が歩んできた道が決して無駄ではなかったことを確信した。どこかに、真正なる法、真の修行者が必ず存在している。今はまだ縁が熟していないだけで、自分の修行も未熟なだけなのだ。

（馬おじさんは少し間を置き、再び語り始める。）

そんな特別な出会いだけでなく、旅の中で何度か、山中の僻地で修行の痕跡を見かけたこともある。たとえば、山の斜面にひっそりと建てられた小さな庵。中には古びた敷物と、いくつかの簡素な道具しかない。住人に会えたことは少ないが、彼らはおそらく森の奥深くにいたか、あるいは深い入定中だったのだろう。その庵を見ただけで、私はその修行者の強い志を感じ取ることができた。

彼らは、誰にも知られず、認められずとも、ただ静かに、自然と向き合い、自分自身と向き合い、心の奥にある執着や煩惱と闘っている。そこには、とてつもない覚悟と信念が必要だと思う。

人それぞれに修行の道があり、縁がある。にぎやかな俗世の中で修行する人もいれば、山深くにこもって静かに修行する人もいる。どちらが楽ということはない。大切なのは、その修行者の心が本当に解脱に向かっているかどうかだ。彼らの姿を見るたびに、私は修行の世界の広大さを改めて感じる。そして、後に真正なる正法に出会えたこと、その縁を心の底からありがたく思うようになった。――世の中と断絶することなく、世間の中でこそ真の円満を成し遂げられる道、それが私の出会った法だった。

（馬おじさんはお茶をひと口すすする。その話は、山々に囲まれたこの小さな家の中で、まるで別世界の扉を開くようだった。）

エイヴリー・リン：

おそらく彼らは「静谷（せいこく）」のような修行法を

実践していたのかもしれませんが、あるいは何かの秘伝的な法門だったのかもしれませんが…。

先生の歩んだ道に話を戻しますが、たとえ明師に弟子として正式に受け入れてもらえなかったとしても、経典や様々な実体験を通して、多くのことを悟られたのではないのでしょうか…。そして先生がいつも身につけていた、お祖父様からいただいた『道德経』ですが、年月を経て、先生はそこから多くの悟りを得られたのでしょうか？

馬長生：

（馬おじさんはうなずきながら、その『道德経』に対する敬意を湛えたまなざしを見せる。）

君の言う通りだよ。確かに、直接的に教え導いてくれる明師には出会えなかったけれど、この三十年の旅路の中で、数えきれない体験と、『道德経』をはじめとする数々の経典との付き合いが、私に多くの悟りをもたらしてくれた。苦難、奇遇、そして危うく迷いかけた出来事さえも、すべてが私にとっての学びであり、師であったのだ。

お祖父様からいただいた『道德経』は、単なる形見ではなく、長い旅の道しるべとなる親友であり、灯火でもあ

った。最初の頃は、前にも話したように、書かれていることがさっぱり理解できなかった。だが年月を重ね、物事の浮き沈みを経験するたびに、何度もその書を読み返し、同じ文字でもまったく新しい意味が浮かび上がってくるようになった。

（馬おじさんは少し間を置き、静かに思い出をたどる。）

ある時のことだ。私は崑崙山脈を越えようとしていた。約二年にわたって険しい山々を歩き続け、それでも何の奇遇にも恵まれず、疲れ果てていた。ある日、ようやく小さな道観を見つけて、そこで一晩休ませてもらうことができた。疲労困憊していた私は、昼夜間わず昏々と眠り続けた。そしてその眠りの中で、非常に不思議な夢を見たのだ。

私は、白雲が漂う広々とした空間に立っていた。すると、そこに老子が現れた。白髪に白い髭、竹の杖を持ち、悠然とした佇まいだった。

彼は私を見て、優しく微笑み、静かな口調でこう言った。だがその一語一語が、心の奥深くに刻み込まれるようだった。「よい。しかし、私の書を真に理解したければ、まずは二千五百年前の背景に立ち、その当時の言葉の本

来の意味を理解しなければならない。」そう言い終わると、老子の姿は次第に薄れて消えていった。

目が覚めると、太陽はすでに高く昇っていた。夢の中の老子の言葉が、ずっと耳に残っていた。そして私は一つの重要なことに気がついた。これまで私は、現代の視点、現代語の理解で『道德経』を読んでいた。でも言葉というものは、何千年もかけて意味や使い方が大きく変わっている。もしその「本来の意味」を理解していなければ、老子の深遠な思想を本当に理解することはできないのだと。

この夢は、まさに大きな啓示だった。それ以降、私は『道德経』をただ読むだけでなく、古典的な注釈書を調べたり、春秋時代の社会背景や文化を学んだりして、当時の言葉がどのように使われていたのかを理解するように努めた。

それが、私の『道德経』に対する学びに大きな転機をもたらした。やがて私は、書の中に隠された流れのようなものに触れるようになった。以前は漠然として難解に感じていた内容が、だんだんと明晰に見えてきたのだ。

たとえば、冒頭の句「道可道，非常道；名可名，非常名」について。啓示を受ける前、私も現代の多くの人と同じように、「非常」を「非凡」や「偉大」という意味で解釈していた。そしてこう読み取っていたのだ——「語ることのできる道は偉大な道であり、名付けることのできる名は特別な名である」と。聞こえは立派だが、それは老子の本来の意図からかけ離れていた。

古典語の意味を調べた結果、私は悟った。「非」は「ではない」、「常」は「永遠・不変」の意味である。「非常道」とは「常なる道（不変の真理）ではない道」、つまり「言葉にできる道は真の道ではない」という意味だった。なぜなら、真の道とは形も姿もなく、人間の限られた言葉で完全に表現できるものではないからだ。言葉にしてしまった時点で、それはすでに「道」ではなく、ただの概念、理論になってしまう。同様に、「名可名，非常名」も、名付けられるものは本質的な「名」ではないということだ。名とは単なる約束にすぎず、本質は名を超えている。

この悟りは、私の中の「名」「形」「語」に対する執着を大きく手放させてくれた。私は理解した。真理は、どれだけ経典を暗記しているか、どれだけ難解な用語を知

っているかにあるのではなく、その「道」を自分の呼吸や、日々の現象の中で実感できるかどうかにあるのだと。それはまた、私が他人の説を聞くときにも、耳障りの良い言葉だけに惑わされず、根本の意味を慎重に見極めるようにしてくれた。

また、たとえば「上善は水のごとし」という一節。水は万物を潤し、争わず、皆が嫌がる低い場所に留まる。これが私に謙虚さ、忍耐、そして見返りを求めない無私の奉仕の精神を教えてくれた。世間から冷たく扱われたときでも、この言葉が心を支えてくれた。

こうして『道徳経』の一章一節が、私の経験と交わるたびに、新しい意味を開いてくれた。それはただの読み物ではなく、自己を照らす鏡となり、師となったのだ。

（馬おじさんは窓の外を見つめる。夕暮れの陽射しはだ
いぶ和らぎ、その顔には苦難の中で知恵を見出した人の
安らぎが浮かんでいた。）

エイヴリー・リン：

ああ！先生の「道可道、非常道；名可名、非常名」の解説を聞いて、ようやく老子の本当の意味がわかった気がします…そうすると、次の一節「無名は天地の始まり、有名は万物の母」も自然に理解できるような気がします。

馬長生：

そうだね、君。その最初の句「非常道」「非常名」の意味を正しく理解できれば、次の句——「無名、天地の始（はじまり）；有名、万物の母」——もすんなりと腑に落ちるようになる。

「常道（永遠の道）」がまだ名前を持たず、「名」によって限定されることもなかった段階、それが「無名」、すなわち天地が始まる前の状態なんだ。そのとき、万物はまだ混沌としていて、分化もされておらず、具体的な形も名前も持っていなかった。それが純粋な本源、根本的な在り方だ。

そして人間が物事を認識し、区別し、名前を与え始めたとき——たとえば、これが山だ、あれが川だ、この植物はこう呼ぶ、あの動物はこうだ——そうして「有名」の段階が現れる。その「有名」こそが「万物の母」となる。なぜなら、名前があることで、物事が意識の中で明確に

なり、多様性が生まれ、今私たちが見ているような豊かな世界が成り立っているからだ。名づけるという行為は、いわば万物を「生み出す」ことでもあるのだよ。

これを理解すると、老子の言葉選びの妙がいかに深いか分かる。「無」と「有」は単なる対立ではなく、同じ実在の異なる側面、異なる局面なんだ。「無名」の「道」から「有名」の「万物」が生じる。「無」は「体（たい）」であり、「有」は「用（よう）」だと言える。

この理解はまた、心を「無欲」に、清らかに保つことの重要性を教えてくれる。なぜなら、心が欲望や先入観、あるいは自らがつけた「名」によって覆われていないときこそ、「其の妙を見る（そのみょうをみる）」ことができる、つまり物事の本質や神秘に触れることができるのだから。反対に、心が「有欲」、すなわち執着や思い込みで満たされていると、我々は「其の微を見る（そのこうをみる）」——つまり外面的なもの、限られた姿しか見えなくなる。

（馬おじさんは少し間を置き、さらに深く考え込むように話を続ける。）

このような『道德經』からの悟りは、単に哲学的な理解にとどまらず、私の人生観、修行の姿勢にも深く影響を与えてくれた。例えば、世間から「乞食」「落伍者」「迷信家」といった「名」を貼られたとしても、私はそれを気にせず、もっと深いレベルで物事の本質を見ようと努めてきた。

そしてね、この「無名」と「有名」の理解を持って、後に私が仏教の經典に触れたとき、「空性（くうしょう）」や「無我」といった概念との不思議な共通点に気がついたんだ。表現の仕方は異なるが、どちらも、名や形、あらゆる二元的な分別を超えた実相への指向がある。そのことに気づいたとき、私はさらに強く信じるようになった——真理は一つ。ただし、それは様々な手段や言葉で語られ得るのだと。

（馬おじさんは微笑む。それは、大いなる思想の流れの中に秘められた共通の根を見出した者の、穏やかで確信に満ちた笑顔だった。）

エイヴリー・リン：

先生のお話を聞いて、作者の立場や視点に立って初めて、

言葉の本来の意味を理解し、その奥にある深い法理に気づくことができるのだと分かりました。

でも歴史が巡る中で、多くの言葉が表面的には変わっていないように見えても、実は意味が 180 度変わってしまっていることもありますよね。そうすると、古典經典を読むのは本当に難しくなりますね…

先生はそうのように感じたことがありますか？ ご自身の経験から、意味が失われてしまった言葉に出会ったことはありますか？

馬長生：

（馬おじさんはうなずきながら、少し沈思した表情を浮かべる。）

その通りだよ。まさにそれは、我々現代人が昔の聖人たちの經典や教えを学び、理解しようとする際に直面する最大の難関の一つだ。時が流れ、文化が変わり、社会も移り変わっていく中で、言葉の意味もまた「失われ」たり、変質したり、時にはまったく逆の意味に捉えられてしまうことすらあるんだ。

君の言うように、表面的には文字は同じでも、その中身――魂や核心はすでに大きく変わってしまっている。だから、もし注意深く文脈や語源、そして言葉が生まれた時代背景を学ばなければ、古人の意図を誤解したり、全く逆の解釈をしてしまう危険性があるんだ。

私が『道德經』を読む中で得た経験は、その明確な証だよ。もし夢の中での「点化」がなかったら、私は今でも世間に溢れる「現代風」の解釈に振り回されて、老子の本来の意図から遠ざかっていたかもしれない。

そしてこれは『道德經』に限らない。仏教の經典を学ぶ中でも、あるいは儒家の古典に触れる中でも、私は同じ現象に気づいた。現代人が当たり前のように使っている言葉の中には、昔とはまったく違う、あるいは正反対の意味で使われているものが多くあるんだよ。

（馬おじさんは少し間を置き、ふと思い出したように話を続ける。）

そうだ、「江湖（こうこ）」という言葉について、私が興味深いことに気づいた例があるよ。今の人たちは「江湖」と聞くと、すぐにアウトロー、無法者、暴力団、復讐劇など、暗くて荒れた世界を思い浮かべるだろう？

でも、古い文献を紐解いていくと、「江湖」という言葉にはまったく異なる、むしろ美しく高貴な意味が込められていたことが分かる。ある文献によると、昔、江蘇と湖北の地域には非常に徳の高い二人の道士がいて、多くの人が彼らの教えを求めてこの地を訪れたそう。そして「江（こう＝長江）」と「湖（こ＝洞庭湖）」のあるこの地方へ師を求めて旅する者たちを、次第に「江湖の人」と呼ぶようになった。つまり、最初の「江湖」とは、真理を求めて旅する求道者たちを意味していたんだ。

また、別の由来として、「江＝川」「湖＝湖」の字義そのままに、水の流れや大自然を指して「江湖」という言葉が生まれたという説もある。それは朝廷や都市のしがらみから離れた、自由で束縛のない場所、つまり隠者や修行者が求めるような理想の天地を意味していたんだ。

『莊子』には、こんな話がある。二匹の魚が干上がった川に取り残され、お互いの唾で身を湿らせながら生き延びようとしていた。その様子に対し、莊子はこう言った。「相忘於江湖（江湖において互いを忘れる）方がよい」と。つまり、本当に自由な境地では、無理に依存せず、広大な江湖のような自然の中で本性に従って生きることこそが、真の在り方なのだと説いている。

このように、「江湖」という言葉は元々、美しく自由で、高尚な意味を持っていた。求道者、修行者、義を重んじる旅人たちが行き交う、理想の場であったわけだ。

ところが、時代が下るにつれて、その意味はどんどん変質し、今ではほとんどが否定的な文脈でしか使われなくなってしまった。それは、人々が「江湖」という言葉の本来の精神や哲学を忘れ、ただの社会のはぐれ者や無法地帯の象徴としてしか捉えなくなったからだ。

これはあくまで一例に過ぎないけれども、言葉の意味がいに深く変容してしまうかを示す象徴的な話だ。他にも多くの古典に出てくる言葉が、現代では誤解されたまま使われている。そのような誤読が積み重なれば、聖人たちの教えの本質に触れるどころか、逆にその教えを歪めてしまう危険すらあるんだ。

だからこそ、真剣に学びたいと思うなら、過去の注釈書や古典、先人たちの研究を丁寧に読み、比較・検証していく努力がとても大事になる。それによって初めて、混濁の中から清らかな源泉を見出し、聖人たちの「真の声（真音）」に触れることができるのだよ。

（馬おじさんはふうっと静かに息をついた。それは疲れではなく、時の流れと人の無知への深い感慨の吐息であった。）

エイヴリー・リン：

ああ！今初めて、「江湖」という言葉の本来の意味がこんなにも美しいものだったと理解できました。もし古い時代の背景を知らなければ、ただの修行の経典だけでなく、『西遊記』のような古典文学作品ですら、まるで「牛に対して琴を弾く」ようなものになってしまい、作者の深い意図を汲み取ることは難しいですね？

馬長生：

（馬おじさんはうなずき、共感の光を目に宿す。）

まさにその通りだよ。修行の経典だけじゃなく、古典詩文や寓話、古代の文学作品にも同じことが言える。もしその作品が生まれた時代背景や、「文化的暗号」、そして作者が一文字一絵に託した隠された意味を理解できなければ、それはまさに「牛に琴を弾く」のようなものに

なってしまう。私たちはただその表層だけを見て、本質——つまりその深い魂や核心には触れられないんだ。

古代の偉大な作品というのは、ただの娯楽ではなく、多層的な意味、人生観、道德、さらには天機までも内包していることが多い。だがそれらの意味を「解説」するには、読者に一定の文化的教養、歴史知識、そして典故・故事の理解が求められる。

（少し間を置いてから、馬おじさんは一つの具体的な例を挙げるように語り始める。）

たとえば、誰もが知っていて愛している『西遊記』。表面的には、三蔵法師とその三人の弟子が天竺へ経典を求めに行くという冒険物語であり、八十一の試練を乗り越えるというファンタジーだ。でもそこだけで理解が止まってしまうなら、それはまだ氷山の一角にしか過ぎない。

君は孫悟空が五行山に封印された場面を覚えているかい？ 普通の読者は、それを天界を騒がせた猿の懲罰とだけ見るかもしれない。でも、もっと深く考えてみると、あれは非常に象徴的な意味を持っている。

五行山——つまり金・木・水・火・土——は、三界のすべての存在、すべての物質を構成する五つの基本要素だ。孫悟空が五行山に五百年間押さえつけられていたというのは、実はこの三界の全ての衆生、我々人間も含めて、五行という物質的な枠に縛られ、生老病死の法則に従い、六道輪廻から逃れられないという深い暗示なんだ。

孫悟空は、七十二変化や筋斗雲で十万八千里を飛ぶような、超常的な力を持っている。彼の存在は、自由になりたいという生命の本能的な渴望を象徴している。しかし、どれほど力があっても、まだ三界の中にいる限り、五行の中にいる限り、仏祖の「手のひらの外」には出られない——つまり、正しい法による導きと修行がなければ、永遠にその束縛から抜け出すことはできない。

五百年の封印は、衆生が無数の輪廻を経て苦しみながらも、業力を消し、魔性を削り、ついには救いの縁を得て、正しい修行の道に入るための準備期間でもあるんだ。

そして三蔵法師とその三人の弟子。彼らはそれぞれ異なる性格と役割を持っていて、互いに補い合いながら困難を乗り越えていく。三蔵法師は時に弱く、妖怪に騙されたりもするが、仏を目指す心と慈悲の心を常に保っている。それが修行者の根本の心だ。孫悟空は優れた能力を

持っているが、性急で激しやすい。そのため、金の輪（戒律と法の象徴）によって抑制される必要がある。猪八戒は食欲に弱く、怠惰で、欲望が多い（人間の本能的な欲求を象徴）。沙悟浄は黙々と働き、荷を担いで黙々と前進する（修行の忍耐と根気を象徴）。

この四人のキャラクターは、実は一人の修行者の心の中にある異なる側面なんだ。経典を求めて西に向かう旅、それはすなわち心を修め、性格を磨き、執着を捨てていく精神の旅でもある。一つひとつの試練は、偶然ではなく、それぞれが心の奥に潜む欲望や未熟さを表面化させ、それに気づかせるための試練なんだ。

これらの象徴的な意味を理解できなければ、『西遊記』はただの神話、娯楽小説に過ぎなくなる。そして古人がその作品に託した深い修行の教えや、三界における生命の真の姿を、私たちは見落としてしまうんだ。

（馬おじさんは語りながら、まるで寓意と象徴の世界に生きているかのように夢中になっていた。その目には、知恵の宝庫を発見した者だけが持つ喜びの光が宿っていた。）

エイヴリー・リン：

ああ…！馬伯父の『西遊記』についての話を聞いて、また一つ深い意味を理解できました。子供の頃、テレビで『西遊記』のドラマを観て、神通力や妖怪退治のシーンに夢中になっていましたが、呉承恩先生が伝えたかった隠された意図までは理解できていませんでした…

あっ…もうこんなに暗くなってしまったんですね…！すみません、時間に気づかず、夜のお休みに差し支えるほど長話をしてしまって…

馬長生：

（馬おじさんは穏やかに微笑みながら、窓の外を見やる。本当に、外はすっかり闇に包まれ、西の空に微かに残る光が消えかけていた。夜の虫たちの鳴き声が、すでに静かに響いていた。）

気にしなくていいよ、エイヴリー。こうして話が合い、心の奥にある大切なことを語り合っていると、時間なんてあっという間に過ぎてしまうものさ。君の目の中に、興味や気づきの光が宿っているのを見るだけで、私にとっても大きな喜びなんだ。

（馬おじさんはゆっくりと立ち上がり、軽く体を伸ばす。）

もう本当に夜になったね。今日話したこと――旅の途中での奇縁、意味深な拒絶、誤った道への危機、そして古典経書の奥深い意味――こういった話はまだまだ尽きないが、一朝一夕では語り尽くせない。今日はここまでにして、お互い少し休んで、この一日を静かに振り返るのもいいかもしれないね。

もし明日も聞きたいと思うなら、三十年に及ぶあの旅の最終章、そして私が真に探し求めていた大法と出会ったあの運命の時について、続きを話そう。

（馬おじさんはエイヴリーを優しい眼差しで見つめ、励ますように語りかける。）

今日語り合ったことは、ゆっくりと味わいながら心に留めておくといい。君たち若い世代は、情報にアクセスする手段はたくさんあるけれど、本当に大切なのは、表面的なものに惑わされずに、その奥にある核心、本物を見極める目を持つことなんだ。そして、時に古びたと思われるがちなものの中にこそ、時代を超えた知恵が隠されているものだよ。

さあ、もう遅いし、気をつけて帰るんだよ。山道は慣れていても、夜道はやっぱり慎重に歩かないとね。

（馬おじさんはエイヴリーを玄関の縁側まで見送る。夜の山の冷たい空気が流れ込み、草木の香りと大地の静けさが辺りを包み込んでいた。）

エイヴリー・リン：

はい、ありがとうございます。本当に楽しく、有意義な時間でした。また明日、お会いできるのを楽しみにしています！

第三日目

エイヴリー・リン（Avery Lin）：

こんにちは、馬伯父。今日も続きをお話いただきたくて、また参りました…。

馬長生（マ・チャンシェン）：

（読んでいた書物から顔を上げ、それを丁寧に机の上に置く。エイヴリーの姿を見ると、あの優しい微笑みがふたたび浮かぶ。）

ようこそ、エイヴリー。さあ、座って。私もちょうど君が来るのを楽しみにしていたところだよ。今日はね、私の人生の中でも最も意味深く、本当の転機となった時期について話そうと思っている。三十年にわたる探求の果てに、ついにたどり着いたその瞬間のことを。

（お茶を注ぎながら、部屋の中に香ばしいお茶の香りが広がる。午後の柔らかな陽射しが窓辺を照らし、いつものように静かで温もりのある空気が部屋を包んでいる。）

エイヴリー・リン：

はい、昨日は三十年にも及ぶ求道の旅と、いくつかの不思議な出会いや経験についてお話しいただきましたね。今日は、その「法」と出会った経緯について、お話しただけですか？

馬長生：

（お茶碗をそっと机に置き、微笑を浮かべながらうなづく。目がどこか明るく輝いている。）

三十年も彷徨い、希望と失望を何度も味わい、もう少しで手に届きそうになってはまた消え…そんな歳月を経て、私が五十歳に差し掛かる頃のことだった。1996 年のことだよ。ついに、運命が新たな扉を開こうとしていた。

その頃、私は内モンゴルの人里離れた小さなお寺に身を寄せていた。長年の風雨にさらされたせいで体調もかなり悪くなっていてね。ある日の夕方、寺の掃除を手伝っていたときに、老僧と話す機会があった。その方は高齢だったけれど、目には澄んだ光が宿り、慈悲と知恵を感じさせる方だった。

私はこれまでの三十年にわたる求道の旅のこと、さまざまな苦難や葛藤、迷い、そして道を誤りかけたことさえも、すべて正直に語った。老僧は黙って耳を傾け、ときおり静かにうなずいていた。私が話し終えたとき、彼はしばらくじっと私を見つめた。まるで心の奥まで見通しているかのようなようだった。そして、静かに一言だけこう言った。声は大きくなかったが、その響きは鐘の音のように深く私の内に届いた。

「チャンシェンよ、お前の求道の心は尊く、そしてその忍耐もまた十分に満ちている。お前の縁は、そろそろ実

を結ぶ頃だ。南へ行きなさい。北京に行けば、きっと法を得られるだろう。」

その言葉を聞いたとき、私の心臓は大きく脈打った。

「北京で法を得る…？」

三十年のあいだ、どれほど多くの導きの言葉、そして拒絶の言葉を聞いてきたことか。希望を抱いては落胆する、その繰り返し。でも今回はなぜか違っていた。疑いも少しはあったが、それ以上に心の奥に強い直感が湧き上がった。老僧の言葉とまなざしには、それまでに出会った誰にもない重みと確信があった。

（馬おじさんはお茶をひと口すすり、遠くを見つめながら、あの運命の瞬間を思い出す。）

その後、私は寺に数日間とどまり、老僧の言葉を胸に繰り返し思い返していた。北京——それは国家の中心、大都市。人があふれ、喧騒に満ちた場所。そんなところで、私は本当に「法」と出会えるのだろうか？山奥の寺院ばかりを巡ってきた流浪の私に、果たして何が見つけられるのか…。

でも、あのときの直感、あの最後の望みが胸の内に静かに燃え上がった。三十年も旅してきた。これまで数え切

れぬほどの苦勞を重ねてきた。だからこそ、どんなにかすかな希望でも、見逃すわけにはいかない。行かなければ、一生後悔するかもしれない。

そして私は決意した。老僧に別れを告げ、最後の希望とともに南へ旅立った。道中も決して楽ではなかったが、なぜか不思議と心に新たな力が宿っているようで、足取りも軽く感じられた。

北京に到着すると、その華やかさと喧騒に驚かされた。それまでの静かな山の暮らしとはまるで別世界だった。私は郊外の小さな寺に身を寄せ、しばらくそこに滞在することにした。寺の手伝いをしながら、心のどこかであの「法」との出会いをじっと待ち続けていた。

そして…ある早朝、すべてが動き出した。

（馬おじさんの声は少し詰まり、目にはこらえきれないような感情の光がにじんでいた。）

エイヴリー・リン：

はい、私が知っている限りでは、1996 年の時点で大法はすでに大都市で広く伝えられていたようですね。その

とき、馬伯父は法に触れる際に何か困難がありましたか？紹介されたとき、すぐにそれが「それだ」と気づかれましたか？

馬長生：

（馬伯父は静かにうなずき、ほんのりと微笑む。奇跡を語る前のような微笑み。）

そうだね、あとから知ったことだけど、1996 年のその頃、大法はすでに北京や多くの大都市でかなり広まっていた。けれど、あのときの私は内モンゴルの山奥から出てきたばかりで、郊外の小さな寺に身を寄せていたから、そんな情報にはまったく触れる機会がなかった。世間でこれほど多くの人が学んでいた法門があるとは、まるで知らなかったんだ。

でもね、そのご縁というのは、本当に自然なかたちで訪れるものだった。私自身は、北京に来てから特に積極的に何かを探していたわけではなかった。ただ、あの漠然とした希望を胸に抱いていただけだった。

（茶を一口すすり、続ける。）

北京に着いて一、二日が経った頃のことだった。まだ夜明け前、夜露の気配が残る静かな朝。いつものように寺の鐘で目が覚めたわけではなく、どこからか流れてきた、とても不思議な音楽に目を覚ましたんだ。その音楽は、優しく、清らかで、調和に満ち、しかもとても強い慈悲のエネルギーをたたえていた。まるで魂の奥深くに直接語りかけてくるようで、疲れや憂いが一瞬で洗い流されるような、そんな感覚だった。

音のする方をたどって、私はそっと外に出てみた。そして、目の前に現れた光景に思わず息を呑んだんだ。

朝靄の中、境内の前庭で、およそ三十人ほどの人たちが集まり、年齢も性別もさまざまだったが、皆が穏やかな動きでとても美しい動作をしていた。その動作はしなやかで柔らかく、しかもどこか厳かで、古の儀式のような荘厳さがあった。彼らの顔には、なんとも言えない安らぎと静かな幸福感が漂っていた。

それを見ていた私は、なぜだかわからないが、心の中に懐かしさが込み上げてきた。まるで昔どこかで見たような――夢の中か、あるいは前世の記憶かもしれないが――不思議と親しみを覚えたんだ。それまで三十年にわたって数えきれない法門や武術、気功を見てきた私だ

ったが、それらとはまったく異なる、何か特別で、純粋なものを感じた。

私はただ静かに立ち尽くし、彼らの動きを見守っていた。胸の奥から、言葉にできないような期待感がふつふつと湧き上がってきた。

そして、彼らが第五套功法、つまり座禅の瞑想に入ったとき――不思議なことが起きた。私は、何か見えない力に引き寄せられるような感覚にとらわれていた。何も考えず、迷うことなく、ただ自然と足が動き、彼らの後方にある空いている場所に座り、同じように両足を組んで双盤の姿勢をとった。

そのとき私は、彼らがどんな法門を修めているのかも知らなかったし、誰からも声をかけられたり、教えられたりしていなかった。ただ、内側から湧き上がる強い衝動に従っただけだった。

そして――その瞬間、本当の奇跡が起きた。

そのまま三十分ほど静かに座禅をしていたとき、心が完全に静まり、あの慈悲に満ちた音楽が魂を包み込むように響いていた中で、突然――私の「天目（てんもく）」が開いたのだ！

（馬伯父の声が震え、目には涙が浮かんでいる。しばし言葉を止め、感情を落ち着ける。）

それは…それは、私が一生決して忘れられない体験だった。エイヴリー。

夢や靈感のような曖昧なものではなかった。今回は、すべてが——はっきりと、目の前に現れたのだ…。

エイヴリー・リン：

ああ… 初めて功法を練習しただけで天目が開かれたなんて、本当に珍しい出来事ですね。

そのとき、馬伯父が天目を通して見たものは、どんな光景だったのですか？ それほどまでに心を震わせる体験とは… でも、道を三十年も求め続けた方なら、たとえ見たものが多くなくても、心を打たれるのは当然ですよ！

馬長生：

（馬伯父は静かにうなずき、その目にはあの瞬間の衝撃がまだ残っているかのようだ。まぶたをそっとこすりながら、過去の映像を思い起こすように目を閉じる。）

そうだね、あとから修煉を始めてわかったんだけど、初めて功法に触れたその場で、しかもあれほどまでに強い状態で天目が開かれるというのは、非常に稀で、まさに師父による特別な安排だったと思う。三十年もの間、艱難辛苦を乗り越えて道を探し続けた、その誠心が届いたのかもしれないね。

天目が突然開いたとき、最初に見えたのは、目の前の現実ではなかった。それは、まるでスローモーションで流れるフィルムのように、私自身の過去世が映し出されたんだ。

(声が静まり、どこか切ない響きを帯びる。)

ある前世では、私は蜀漢の中級武将だった。関雲長、つまり関羽將軍の麾下で、一心に忠義を尽くして戦っていた。將軍とともに死線をくぐり抜け、あの壮絶な麦城の戦いでも最後まで隣で戦い、そして共に命を落とした。その悲壮で義に厚い気持ちは、今も昨日のことのよう鮮明に感じる。

次に現れたのは、唐の末期の時代。私は一人の宰相で、清廉潔白な正義感を持つ人物だった。国の行く末を憂い、衰退しつつある王朝を立て直そうと、数々の献策を試み

た。だが、君主は暗愚で、奸臣の言ばかりを信じ、私の諫言には耳を貸さなかった。私は落胆し、国家の命運を見届けることなく、官を辞して山奥に隠棲した。その無力感と失意、志を果たせなかった悲しみは、今も胸に残っている。

それ以外にも、いくつかの過去世の映像が流れたが、記憶は曖昧だ。

だが、それだけでも私ははっきりと理解した。人の命というのは、たった一度のものではない。私たちは、無数の人生、無数の転生を通して、喜びと悲しみ、栄光と挫折を繰り返しているんだ。

そして、場面が突然変わった。目の前に現れたのは、もう過去世ではなく、まったく別の空間だった。そこには、言葉では到底表せないほど壮麗で神々しい景色が広がっていた。

宮殿はこの世のものとは思えぬほど輝き、素材自体が光を放っていた。そこには、神々、仏陀、菩薩、羅漢たちが現れ、その姿は荘厳で、慈愛に満ちていた。彼らの体から放たれる光輪は、まさに神聖で、言語を超えた崇高さがあった。

（エイヴリー・リンは黙って聞き入り、目を大きく見開いている。その目には疑いの色は一切なく、馬伯父の一語一句に込められた真実を感じ取っているようだ。彼女の胸には、精神世界の神秘さと高次の存在への深い敬意が満ち、修煉への意欲がさらに強く湧き上がっていた。その思いは、静かな顔きと、深い理解と共感のこもったまなざしとなって表れていた。）

それだけではなかったんだ、エイヴリー。
私はその神聖な景色に心を奪われていたとき、ふと座禅をしている周囲の人々を見渡してみた。すると、彼らの間に見えない「縁」の糸のようなものがつながっているのが見えた。

そして、前列に座っていたある女性の同修——後で知ることになるが、新しい人をよく手助けしていた方だった——その人を見ると、突然、前世の情景が浮かんできたんだ。その女性は、前世で私の妻だった。
彼女の隣に座っていた現在の夫も見えた。彼は唐の時代に、私の政敵だった武官で、かつて私に多くの困難をもたらした人物だったんだ。

（馬伯父は一瞬言葉を止め、複雑な想いを含んだ目で静かに語り続ける。）

これは、私の中だけに留めていたことだ。決して本人たちには語ったことはないよ。今、こうして君に話しているのは、この世の「因縁」がいかに不思議であるか、そして、大法の慈悲がいかに深く、前世の怨念さえも解きほぐし、人々を再び同じ法の中で共に修めさせてくれるか、それを伝えたかったからなんだ。

そのとき見たすべて――過去世、自分の使命、異次元の世界、同修との因縁――ほんのわずかな時間のうちに現れたにもかかわらず、私の世界観を根底から揺さぶるのに十分だった。

音楽が終わり、皆がゆっくりと禅定を解いたとき、私はまだそこに座ったまま、呆然としていた。現実に戻るのにしばらくかかったよ。

すると、その女性の同修――つまり、前世での妻だった人が、優しく微笑みながら近づいてきて、とても丁寧に声をかけてくれた。そして、ある小さな本を私に手渡してくれたんだ。それは、表紙もない、ただ紙を簡単に綴じただけの謙虚な冊子だった。

彼女は言った。「これは修煉の根本的な指導書です。もし興味があるなら、どうぞお読みください」と。

私は手が震えるほどの想いでその本を受け取った。そのときは、まだその書の名前も知らなかった。だが、最初の数行を読み、次のページをめくった瞬間――
天目の開示よりもさらに強烈な衝撃が、私を貫いたんだ。

その中の一文一文が、まるで私の魂に直接語りかけるようで、三十年にわたって抱えてきた疑問、苦悩、すべてに明確な答えを与えてくれた。

宇宙とは何か。命の意味とは。人として生きるとは。真の修煉とは。真・善・忍とは――

私が探し続けていたすべてが、そこにあったんだ。

その瞬間、私はすぐに悟った。

これこそが「大法」だ。

これこそが、あの高僧が夢の中で言っていた「明師」だ。
これこそが、私が三十年かけて探し求めた答えだったのだと！

涙が止まらなかった。

それは絶望や悲しみの涙ではなく、至福の涙だった。ついに、漂流する船が港に辿り着いた。感謝の気持ちで胸がいっぱいだった。

（馬伯父は目頭をぬぐい、声を震わせながらも、その顔には限らない安堵と喜び、そして静かな平和の光が宿っていた。）

エイヴリー・リン：

はい、三十年もの風霜を経て四方を巡り、ついに大法を得られ、しかも天目が開かれ、壮麗で神聖な光景を目の当たりにし、さらには因縁までも見る事ができたなら…それは本当に、魂を深く揺さぶる体験だったに違いありません。

私も以前、似たような体験談を読んだことがあります。ある女性の同修が初めて公園で皆と一緒に功法を練った時のこと——ちょうど馬伯父と同じように、第五式功法の座禅をしていたとき、天目が開かれたそうです。そして彼女は、自分がかつて天国の中の至高の神であったこと、その天国の光景を目の当たりにしたのです。彼女は、自分が転生を繰り返してやっと本当の「家」を見つけたという深い感動を覚え、思わず涙を流したのだそうです。

でも、そのとき周囲の同修たちは、彼女が足を痛がって泣いていると思って、「痛いなら無理せず足をほどいて

いいですよ、ゆっくり慣れていけばいいんです」と優しく声をかけていたそうです。

馬長生：

（馬伯父は静かに微笑む。その笑顔には深い共感と理解がにじんでいる。喜びの涙の名残がまだ目尻に残っている。）

そうだね、エイヴリー。あの魂を揺さぶるような感動は、単に不思議なものを見た驚きではなく、長年の探求がついに実を結んだという確信、精神世界が確かに存在するという確信、そしてこの世の理解を超えた高い法理が実在するという気づきをもたらす、心の深い震えなんだ。

その女性同修の話、私はとても共感するよ。天目が開いて、想像を超える景色を見て、自分の本当の由来や縁が少しでも分かれば、それだけで胸がいっぱいになる。涙が自然にあふれてくるのも当然さ。それは肉体の痛みの涙ではなく、師父への感謝、大法への感謝という、言葉では言い尽くせない深い感動からくる涙なんだ。

（馬伯父は、エイヴリーの語った同修たちの微笑ましい誤解を思い出し、やさしく微笑む。）

他の同修たちが、彼女の涙を「足の痛み」だと思って声をかけたのも、無理はないさ。そのような体験をしたことがなければ、人はどうしても常識の範囲でしか物事を理解できない。だから、精神の深い世界や、天目が見せてくれる境地というのは、そう簡単に説明できるものではないんだ。

私自身のときもそうだった。涙があふれて止まらなかったとき、あの女性の同修——前世で私の妻だった人——も、少し戸惑っていた。彼女はとても親切に声をかけてくれて、本を手渡してくれたんだけど、私は彼女に何をどう説明していいかわからなかった。ただ、「ありがとうございます」と震える声でお礼を言うことしかできなかったよ。

あのとき受け取ったその本——あとで知ったけど、それが『轉法輪』だった。この本が、私の運命を根本から変えた。放浪する乞食でしかなかった私が、心の中に渦巻いていた疑問と悩みによりやく答えを得て、生まれ変わったように感じたんだ。

その後の数年間——1996 年から 1999 年半ばまでの約三年間——あれは、私の人生で最も美しく、最も穏やか

な時期だったよ。私は法に浸り、毎日学法し、功法を練り、静かに修煉に励んだ。

世界観は完全に変わった。人間として生きる目的は、競争したり快樂を追ったりすることではなく、修煉を通して本来の自分に帰ること、「反本帰真」することだと心から理解できた。

大法の「真・善・忍」という原理は、まるで天上の甘露のように私の心を洗い清めてくれた。私は法に照らして自分の言動を見直し、心に巣くっていた悪しき執着や習慣を一つずつ取り除く努力をした。そして、あれほど体を蝕んでいた慢性の病も、いつのまにか消えていた。長年の風霜でボロボロだった体が、まるで再生したように軽くなった。心も穏やかで寛容になった。

（馬伯父は窓の外を眺めながら、あの懐かしくも輝かしい日々を思い返している。）

あの頃の北京の修煉環境は、本当に純粹で活気に満ちていたよ、エイヴリー。早朝と夕方になると、市内の公園や広場、あらゆる公共の場所が練功者でいっぱいになっていた。やさしく、慈悲に満ちた練功音楽が街中に響き

渡り、老若男女、あらゆる職業の人たちが一緒になって練功していた。

誰に命じられたわけでもなく、皆が心から進んで練功し、大法との縁を大切にしていた。あの光景を見るたびに、私の心はさらに深く感動し、確信が強まったものだった。あれはまさに黄金の時代、嵐が来る前の、貴重な静けさだった…

（その言葉とともに、馬伯父の声は少し低くなり、目にはほんのわずかな陰りがよぎる。）

エイヴリー・リン：

私もあの歴史的な時期について多くの情報を読んだことがあります。最盛期には、中国全土でおよそ 1 億人の人々が日常的に練功していたそうですね。公園や寺院の広場など、公共の場所はどこも練功者で溢れかえっていたといいます…私はそのような賑やかで壮観な光景をこの目で見たことはありません。アメリカでも現在、三十人以上の練功点を見つけるのは稀なことです…。

馬長生：

（馬伯父はうなずきながら、その壮大な光景を思い出し、深い郷愁の念を浮かべた。）

その通りだよ、エイヴリー。「1 億人」という数字は一見すると大げさに聞こえるかもしれないが、当時の北京で私が実際に見た光景を思えば、まったく誇張ではない。それはまさに現実を反映した数字であり、心性を修め、健康を養うという未曾有の大波だったんだ。

君が言ったように、今のアメリカでは信仰の自由があるにもかかわらず、三十人が集まる練功点でも十分に「大所帯」と言えるだろう。だが当時の北京では、数百人、時には千人以上が集まる練功点も珍しくなかった。

私が覚えているのは、天壇公園や紫竹公園といった大きな公園だ。朝日がまだ昇りきらぬ早朝、すでにあらゆる道から人々が続々と集まってきていた。年配の方も若者も、小さな敷物を敷き、カセットテープで練功音楽を流し、静かに列を整えて五式功法を一斉に練っていた。そこには騒がしさや混乱は一切なく、ただ穏やかで美しい動作と、優しく流れる音楽、そして慈悲に満ちた純粋なエネルギー場があった。その場に立っているだけで、心

が洗われるようで、すべての悩みが消えてしまうように感じられた。

それは公園に限らず、団地の前庭や広めの歩道、私が身を寄せていた寺の境内など、どこでも人々が穏やかに練功する姿を見ることができた。それは当時の北京、ひいては中国全土の市民にとって、生活の一部になっていたと言っても過言ではない。

それは誰かの呼びかけや大々的な組織によるものではなかった。完全に自主的なものであり、それぞれが実感した効果に基づいていた。健康が改善され、病が癒え、心が穏やかになり、家庭も円満になる。そのような良い結果が広まって、自然と人から人へと伝えられ、修煉者がどんどん増えていったんだ。

それはまさに希有な光景であり、道徳と精神の高まりを象徴するものだった。人々は法輪大法に政治的な動機で来たのではなく、物質的な利益を求めたのでもなかった。ただ、より良い人間になりたい、より健やかに生きたい、真・善・忍の原理に従って生きたいという純粋な願いから来ていたのだ。

（馬伯父は少し黙り、淡い悲しみの表情を浮かべた。）

だが、もしかすると、そのあまりに純粹で美しく、精神的に強大な力こそが、共産党政権内の嫉妬心に満ちた者たちや、邪悪な勢力には到底容認できなかったのかもしれない。彼らは、自分たちが制御できない、権力や利得で操れないものを恐れたのだ。

あの穏やかな修煉の日々の中で、私の天目は、開かれてしばらくの間は多くの景色を見ることができたが、1999年の初め頃、つまり迫り来る弾圧の前夜に、その能力は次第に弱まり、やがて完全に失われた。そのとき、私は少し戸惑いもしたが、やがてそれが師父のご安排であると悟った。師父は私に、神通力に頼るのではなく、外界の現象に囚われることなく、心性を実質的に修め、これから訪れる試練に正念と法への堅い信念で立ち向かうよう導いてくださったのだ。

そして実際、その穏やかさは長くは続かなかった。あの当時、私たちは皆、大法の素晴らしさを信じていたし、政府の透明性も信じていた。誰一人として、善良な修煉者を標的にした残酷な弾圧、民族全体を暗黒に包み込むような大災難がすぐそこに迫っているとは、夢にも思わなかった。

（馬伯父の声は沈み、部屋の空気全体が重く、何か不吉な予感に包まれたかのようにだった。）

エイブリー・リン：

当時の年月は、修煉者である馬伯父のような人々にとって、本当に輝かしい時代の記憶ですね… あの頃、私はまだ 4～5 歳で、何も分かっていませんでした。それからすぐに、1999 年の迫りくる迫害の直前に、家族と共にアメリカに移住しました…。

天目についてですが、私の悟りによれば、天目が開くことには利点もあれば、欠点もあると思います。利点は、修煉に対する信念を深める助けになることです。でも、欠点としては、「幻境」や「自心生魔」といった状況に陥りやすく、自分を見失って道を踏み外す可能性もあると思うのです…。

馬長生：

（馬伯父はうなずき、エイブリーの幼い頃からの経験や、迫害を避けられたことへの共感のまなざしを向けた。）

そうか、エイブリー、君も迫害が始まる前にアメリカに移住するという特別な縁を授かったのですね。師父がそうした手配をしてくださったのだと思います。それは本当に大きな福分です。

そして天目について、君の考えはとても理にかなっています。利点と欠点の両面から天目の開きについて悟ることができているのは、実に深い理解だと思います。

君が言ったように、利点としては修煉者にとって信念を深める助けになります。私の場合、初めて大法に触れたときに天目が開き、過去世や他の空間の壮麗な景色を見たことは、大法の教えが真実であると強く確信させるものでした。それは、三十年にわたる探求の末に残っていたわずかな疑念をも消し去り、私が迷うことなく修煉の道に進むことを可能にしました。

また、輪廻や因縁、神仏の存在についても、以前は経書や偶然の体験からしか曖昧に感じていなかったものが、はっきりと実感できるようになったのです。

しかし同時に、欠点も決して小さくありません。もし修煉者が心性をしっかり保てず、正法の指導を得られないままなら、幻境に迷い込み、「自心生魔」の状態に陥る危険性があるのです。天目が開くと、奇妙な光景を見た

り、通常では聞こえない音を耳にしたりします。それに惑わされ、自分はもう高い境地に達したとか、何かしらの能力を得たと錯覚してしまうことがあります。そこから、顕示心や自負心が生まれ、さらには低次元の生命や邪霊に利用され、誤った情報に騙されてしまい、修煉の方向を見失ってしまうのです。

私も、天目によって少しの機能を得た人が、それを保てず、最終的には道を誤ってしまったという話を何度か聞いたことがあります。

だからこそ、迫害が始まる直前に私の天目が徐々に閉じられていったことは、師父による非常に大きな加護であると私は悟りました。あの苛烈な環境の中で天目が開いたままであれば、邪霊が作り出した偽の景象に心が揺さぶられたり、同修たちの苦難を目の当たりにして恐れや迷いを生じたりする恐れがあったからです。

天目が閉じられたことで、私は内に向かって心を修めるしかなくなりました。法を学び、心性を修め、「真・善・忍」の原理に照らして自分自身を見つめ直すしかなくなったのです。判断も行動も、何か「見た」や「聞いた」ことに基づくのではなく、法を根拠にするようになりました。それが、後に生死を賭けるような試練を乗り越え

るための、冷静さと揺るがぬ信念を支える礎となったのです。

私たちの大法は、本質的に心性を修め、宇宙の特性「真・善・忍」と同化するための修煉です。機能や神秘的なものを追い求めるためのものではありません。

機能とは、心性が一定の境地に達した時に自然と現れる副産物です。それに執着し、追い求めてしまえば、むしろ回り道をすることになり、最悪の場合、道を踏み外してしまうのです。

師父は『轉法輪』の中でこの問題について非常に明確に説かれています。本当に修煉する者は、「無所求而自得」――求めないのに自然と得られるものです。しっかりと法に基づいて心性を修めていれば、必要なものは自然と与えられ、見てはいけないものや知るべきでないものは、師父が助けてくださり、避けることができるのです。

（馬伯父は師父の手配に対する深い感謝の気持ちを込めて語った。彼の目はエイブリーを見つめ、励ましの光が宿っていた。）

君のこの問題に対する悟りからは、君が法を深く学び、理解していることがよく伝わってくる。これはとても尊いことだよ。

エイブリー・リン：

その栄光の年月の中で、1999 年に“嵐”が襲来する前、同修たちと一緒に特に印象に残る修煉体験などありましたか？

馬長生：

（馬伯父は微笑んだ。その笑顔は、同修たちとの美しい思い出を懐かしんでいるような、温かなものであった。）

あるとも、エイブリー。その年月は短かったけれど、心に深く刻まれる修煉体験や美しい思い出がたくさんあった。そこは非常に純粋な環境で、皆が互いに助け合いながら精進していた。私心は一切なかったよ。

中でも最も印象に残っているのは、集団での法の勉強会だ。朝や夜の煉功の後、私たちは小さなグループに分かれて集まり、公園やある同修の家などで『轉法輪』と一緒に読み、自分の悟りや体験を分かち合った。その雰囲気

気は厳かでありながらも、とても和やかだった。年齢や社会的地位に関係なく、誰もが真心を込めて法から得た悟りや、心性を修める中で直面した困難、あるいは修煉によって人生がどう変わったかを率直に語った。

中には高齢で学が少ない同修もいたけれど、その素朴で真実味あふれる言葉は、人の心に深く染み入った。また、知識人の同修たちは、科学や哲学の視点から法の深い理解を語ってくれ、私たちの認識をより広げてくれた。そうした交流から私は多くを学んだ。法をより深く理解できただけでなく、他の同修たちを鏡として、自分の不足点にも気づくことができたんだ。

それから、共に法を広めに出かけたことも、忘れがたい思い出だ。当時は誰もが大法の素晴らしさを実感していたから、家族や友人、そして縁ある人々にもその素晴らしさを伝えたいという思いが自然と湧いていた。私たちは法輪功を紹介するチラシや冊子を持ち、公共の場や遠方の村々まで足を運んだ。強制ではなく、純粋な心から、他人にも法の恩恵を受けてほしいという思いだけだった。

ある時、私たちは北京郊外の貧しい農村に行ったことがある。最初、村の人々は警戒心を持っていたが、私たちが辛抱強く、修煉によって健康が改善されたことや道徳

心が高まったことを語り、さらに一緒に動作を教えてあげるうちに、徐々に心を開いてくれた。その素朴な笑顔と、法に触れたときに目に宿る希望の光を見て、私は心から温かさを感じた。

もちろん、理解されなかったり、反対されたこともあった。でも、同修たちは常に善と忍の心で説明し、誤解を解こうとした。そうした過程を通じて、皆の心性も一段と高まったんだ。

もう一つ忘れられないのは、同修同士の無私の思いやりだ。誰かが生活に困ったり、修煉上で悩みを抱えたときには、誰もがためらうことなく支え合った。それは利害を超えた関係であり、世間一般の人間関係とはまるで違う。私たちは皆、一つの道を歩む仲間として、家族のように接していた。

特に記憶に残っているのは、あの女性の同修（私が前世で見た人）だ。彼女は、私が修煉を始めたばかりの頃、非常に丁寧に動作を教えてくれ、法の意味も一つ一つ説明してくれた。また、他の同修たちも、私が遠方から来て身寄りもないことを知って、必要な生活用品などを何も言わずに分けてくれた。些細なことかもしれないが、

その一つ一つに、金にも代えられない心の温かさがあった。

（馬伯父は小さくため息をついた。その顔には一抹の名残惜しさが浮かんでいた。）

あの頃は本当に理想的な修煉の環境だったよ。人間の世の中にありながらも、まるで清らかな浄土のような場所だった。皆が「真・善・忍」の原理に従って共に生き、争いも嫉妬もなく、ただ慈しみ合い、共に精進していた。あの純正なエネルギー場があったからこそ、多くの人が短期間で心性も健康も大きく向上できたのだと思う。

残念ながら、その美しい時代は長くは続かなかった。
「木は静かにしたくとも、風が止まず」——善良なものをそのままにしておけない、邪悪な力が存在したのだ。

（部屋の空気が一瞬で沈んだ。馬伯父とエイブリーの心には、あの黄金の年月の後に訪れる暗雲を思い、静かに悲しみが広がっていった。）

エイブリー・リン：

はい、その後に起こったことはまさに「木は静かにした

いが風はやまず」ですね…

どうしてあの当時の中国共産党の指導部が、大法の素晴らしさを見抜けなかったのか、本当に理解できません。あれはもう、妄想じみた嫉妬心が爆発して、まるで火山の噴火のように悪が噴き出したようでした！

生き証人である馬伯父から見て、大法の神奇さを物語るような出来事を実際に経験したこと、または目撃されたことがあれば、いくつか教えていただけますか？

たとえば、交通事故に遭ったけれど無事だった話とか、重病で病院に見放された人が、大法を心から修煉した結果、急速に回復したような例などです。

馬長生：

（馬伯父は静かにうなずきながら、その迫害の不条理さと残酷さを思い出し、わずかに哀しみを帯びた表情を浮かべた。そして深く息を吸い込み、心を落ち着かせてから奇跡のような出来事について語り始めた。）

おっしゃる通りだ、エイブリー。当時の支配層の狂気は、常識ではとても説明できない。おそらく、大法のあまりにも純粋で素晴らしく、精神的な力があまりに強大だったため、邪悪な心を持つ者たちは自分たちが脅かされて

いると感じたのだろう。彼らは、自分たちのコントロールを超えたものや、物質的な価値観を超えたものを到底受け入れられなかったのだ。

だが、そうした悲しいことはさておき、迫害が始まる前の修煉の年月において、私は実際に目の当たりにし、また自分自身も経験した大法の神奇な事例がいくつもあった。それらは決して噂や誇張ではなく、実在の人物と出来事なのだ。

（馬伯父は一瞬言葉を止め、記憶をたどるように目を閉じた。）

思い出すのは、一緒に煉功していた 70 歳近いおばあさんの話だ。彼女は重度の心臓病を患い、何軒もの病院を回ったが、どこでも「治療法はない、薬で延命するしかない」と言われ、家族も覚悟するように言われていた。子どもたちも既に葬儀の準備を始めていたほどだった。

そんなとき、誰かが彼女に大法を紹介した。最初は体がとても弱く、自力で歩くこともできず、誰かに付き添われて煉功場所まで来ていた。煉功も満足にできず、ただ座って音楽を聴き、皆が法を読むのを心の中でなぞるのが精一杯だった。

ところが、不思議なことに、1 か月ほど続けるうちに、彼女の顔色がだんだんと明るくなっていった。やがて自力で歩けるようになり、第一式の穏やかな動作もできるようになった。3 か月後、病院で再検査を受けたところ、医師たちは大変驚いた。治療不能とされた心臓病が、信じられないほど改善していたのだ。薬も不要となり、彼女は健康そのものになり、動きも軽やかで、他の同修たちと一緒に法を広める活動にも参加するようになった。信じていなかった家族も「これは奇跡だ」と言わざるを得なかった。

また、ある青年は長距離トラックの運転手だった。ある夜、運転中に疲労から居眠りをしてしまい、重いトラックがコントロールを失って道路脇の急な斜面に突っ込み、何度も転がって大破した。彼が目覚めたとき、自分は潰れたキャビンの中に挟まれていたが、驚くべきことに体にはかすり傷一つなかった。ほんの少し気を失っていただけだった。

通行人たちは事故の惨状を見て「運転手はもう助からないだろう」と思ったが、彼を引き出して無傷なのを見て、皆が目を丸くした。彼は、「トラックが転げ落ちる瞬間、私は師父のことに修煉している法輪大法のことを思った。

それが私を守ってくださったのだ」と語った。その後、事故車の鑑定では、キャabinはほとんど粉碎されていたそうだ。誰もが「これで運転手が生きているなんて信じられない」と言ったという。

私自身の話もある。以前お話ししたように、長年放浪していた私は、食事も満足に取れず、寒さと風雨の中で多くの病気を抱えていた。しかし、大法を修煉し始めてから、短期間でそれらの病気はすべて、いつの間にか消えていった。体が軽くなり、心も晴れやかで、まるで生まれ変わったようだった。以前は、天気が変わるたびに体中が痛んだものだが、それもなくなった。それは薬のおかげではなく、心性を修め、五式の功法を真摯に煉功したことによる、大法の神奇な力だったのだ。

こうした話はまだまだたくさんある、エイブリー。これらは大法の超常的な力を物語る生きた証拠だ。大法は単なる健康体操ではなく、真に心と体を修める修煉の道であり、身心を浄化し、心性を高め、危機のときには師父が私たちを守ってくださる。まさにこうした事実こそが、多くの人々が大法を信じ、修煉の道へと入っていった理由なのだ。

（馬伯父の語る声には確固たる信念が込められ、その目は大法がもたらした奇跡を思い出して輝いていた。）

エイブリー・リン：

大法の神奇さというのは、やはり自分で実際に体験してこそ、その真の素晴らしさが分かるものだと思います。外から聞くだけでは、どうしても「半信半疑」になってしまう人も多いですし、場合によっては「作り話だ」とまで言う人もいます…

私自身、すでに 10 年以上大法を修煉していますが、馬伯父のような出来事を自ら体験したことはなく、ただ悟性と信念に頼って修煉を続けてきたにすぎません。

馬長生：

（馬伯父は静かにうなずき、エイブリーに向ける眼差しは、理解と励ましに満ちていた。）

まさにその通りだ、エイブリー。「百聞は一見に如かず、百見は一験に如かず」と言うように、大法の神奇さ、それがもたらす奇跡というのは、実際に経験した人だけが、心の奥深くまでその真の意味を理解できるのだ。

外の人たちは、どれだけ話を聞いても、心が開かれていなければ、または実証科学という既成概念や偏見に縛られていれば、なかなか信じることができない。それどころか、「迷信だ」「でたらめだ」と言い出す者さえいる。

だが、エイブリー、君が 10 年以上も大法を修煉してきて、自ら何か特別な体験がなかったとしても、ただ悟性と信念に基づいて修煉を続けてきたという事実、それこそが非常に尊いことなのだよ。それは君の根基が良く、大法との縁がとても深いことを示しているのだ。

君も知っているように、師父は「修煉の道は人それぞれ異なる」とおっしゃっている。一人一人に対する安排もまた異なっている。奇跡的な出来事や生死をかけた試練を経験しなくても、静かに法を学び、自分の心性を内に向けて見つめ、日々コツコツと煉功に励むだけで、次第に向上していける人もいるのだ。

君のその「信」は、目に見える現象や超常的な能力に頼らない、「法理」と「師父の偉大さ」に対する正しい理解から来るもので、それこそが揺るぎない信であり、本当の信仰の力なのだ。それは困難や誘惑、人の噂などでは簡単に揺るがされない。

私自身、様々な奇跡を見てきたが、それらはあくまでも最初の信念を固めるための助けにすぎない。本当の修煉というのは、やはりこの「心」を修めることであり、「真・善・忍」の法理に照らして、自分の一念一行を正していくことなのだ。

外の現象ばかりを追い求めて、心を修めることを疎かにすれば、本当の意味での向上はあり得ない。

だから、君は君の道を自信を持って歩いていけばよいのだよ。法を実証する方法は人それぞれ違う。健康面の劇的な改善で実証する人もいれば、困難を乗り越える堅い意志で証明する人もいるし、またある人は思想の高まりや法理の深い理解を通して示すのだ。どれもが、大法の偉大さと神奇さの現れであることに変わりはない。

大切なのは、私たちが法に出会ったときの「初心」を持ち続けているかどうか。

法を本当に宝として大切にしているか、心から修煉して本来の自分に還りたいと思っているかどうかだ。その心さえあれば、師父はいつでも傍にいて、私たちの一步一步を点化し、守ってくださる。

（馬伯父は心からの語り口で話し、エイブリーに向けた眼差しには揺るぎない信頼と希望がこもっていた。若い世代のエイブリーが、正しい認識と確かな信念を持っていることを心から嬉しく思っているようだった。）

エイブリー・リン：

はい、ありがとうございます、伯父さん…

もうすぐ日も暮れそうですね。今日はこの辺で一旦終わりにしましょうか。

法を得る縁や、1996 年から 1999 年の中国での修煉の雰囲気について、たくさんのお話を聞かせていただき、本当にありがとうございました。

明日は、あの「嵐」が襲ってきたときの恐ろしい光景について、そして、生き証人である伯父さんから、実際に見聞きされたことをぜひ伺いたいのですが、よろしいですか？

馬長生：

（馬伯父は窓の外に目をやった。確かに、夕焼けが木々の梢をオレンジ色に染めながら、空を包み込み始めてい

た。少し沈んだ眼差しを浮かべながら、そっとうなずいた。))

いいとも、エイブリー。君の言う通り、日も傾いてきた。あの平穏な修煉の年月を振り返ることは美しいことでもあるが、それはまた、その後に待ち受ける大きな試練への準備でもあったんだよ。

今日は、伯父さんが三十年にわたって法を求め歩いた道のりを振り返り、その中で、法に巡り会えた幸運と、純粹な修煉の環境、そして大法がもたらしてくれた深い変化について語ることができた。それを君と分かち合えて、伯父さんも本当に嬉しかったよ。

(伯父さんは一瞬言葉を止め、声を落とした。)

明日は、また別の時期――試練と痛みの時代について話そう。あの「嵐」が襲ってきたとき、伯父さんはその「嵐の中心」にいた者として、自分が実際に見たこと、聞いたこと、体験したことをできるだけ正直に語ろうと思う。それは、君や、そして将来これを読むかもしれない人たちが、この迫害の邪悪さを、そしてその中でもなお揺るがぬ真の大法弟子たちの慈悲と堅い信念を、理解する助けになると信じている。

それは楽しい話ではないが、大法の歴史に欠かすことのできない一部であり、
また、伯父さんの修煉の旅路においても、極めて重要な一章なのだ。

さあ、今日はこれでお帰り。ゆっくり休んで、また明日の夕方に会おう。

（馬伯父はエイブリーを玄関まで見送りながら、心のどこかにこれから語る記憶への重さを感じていた。しかし彼には分かっていた――その真実を語ることこそ、邪悪を暴き出し、大法の正しさを証すために必要なことなのだ。）

第四日目

エイブリー・リン：

こんにちは、馬伯父。またお邪魔しました…

昨日は、1996 年から 1999 年まで――伯父さんが大法を得てから、迫害が始まる直前までの話を聞かせていただきました。

今日は、その「嵐」の前の背景、そしてその後の伯父さんの道のりについて、続きをお聞きしてもよろしいですか？

馬長生：

（馬伯父は穏やかな微笑みを浮かべ、変わらぬ落ち着きと深さを湛えた眼差しでうなずいた。）

ようこそ、エイブリー・リン。さあ、お座りなさい。ちょうど君が来るのを待っていたところだよ。

昨日は、本当に特別な時間だったね。大法の光が差し込み、多くの心に道が照らされた年月の話をした。

（伯父さんは静かに息をつき、その眼差しにほんのりと懐かしさが浮かぶ。だがそれは哀愁ではなく、過去への深い感謝の念だった。）

君が「嵐」の前の背景と、その後の旅路を聞きたいというのなら…もちろん、話そう。あれは、天地の気も変わり、人々の心も大きな試練を迎えた時期だった。

君にもっと深く理解してもらうために言うとね、あの大嵐がやって来る直前——当時の中国で、私たち大法修煉者が置かれていた空気というのは…それは本当に、今とはまるで違っていたんだよ。

（伯父さんは少し沈黙し、心の奥に眠る生々しい記憶を呼び起こそうとするかのように目を閉じた。）

1999 年以前——特に 1994 年、95 年あたりから、大法は中国全土に大きく広まっていった。都市から農村まで、知識人から労働者まで、あらゆる場所で煉功する人々の姿があった。公共の公園や花園、校庭には煉功点が次々と設けられ、早朝や夕方には煉功音楽が穏やかに流れ、ゆったりとした動作、調和の取れた気の流れ…それは、多くの人々の日常に溶け込んだ美しい風景の一つになっていたよ。

伯父さんが思うに、何よりも尊いのは——人々の「心」の変化だった。人々は「真・善・忍」の法理に従って生きことを学び、他人を先に思いやるようになった。家庭や社会における対立も自然と解け、健康も目に見えて良くなった。難病で苦しんでいた人々が生きる希望を取り戻すような例も少なくなかった。誰かに命じられたわ

けでもない。すべては、自分の体験からくる心からの「自発」だったのさ。

当時の政府も、多くの地域では肯定的に見ていた。市民の健康が改善され、社会も安定し、医療負担も軽減される——そんなメリットを理解して、賞賛する表彰や報道記事もあった。すべてが、とても清らかで、理想的な方向に進んでいたかのように見えたんだ。

（馬伯父はゆっくり首を振り、その表情には一瞬、陰りが差した。）

けれども…やがて「黒い雲」が現れはじめた。最初は小さな兆しにすぎなかったが、それらは次第に集まり、やがて激しい嵐の前触れとなった。

君はその「嵐」が起こる前に現れた兆候についても、聞きたいかい？

本題——すなわちその嵐と、それに続く出来事の話に入る前に。

エイブリー・リン：

こんにちは、馬伯父。また来ました……

昨日は、1996 年から 1999 年にかけての時期、つまり、あなたが大法を得たご縁から、迫りくる弾圧の前までのことをお聞きしました……。

今日はその「嵐」の前の状況、そしてその後の道のりについてお話しいただけますか？

馬長生：

（馬伯父は穏やかに微笑み、その目には依然として落ち着きと深みが宿っていた。彼は静かにうなずいた。）

こんにちは、エイブリー・リン。どうぞ座ってください。私も君が来るのを待っていたよ。うん、昨日は特別な時間だったね。大法の光が世の中を照らし、多くの魂が進むべき道を見いだした時代だった。

（馬伯父はそっとため息をつき、その目に一抹の懐かしさがよぎったが、それは悲しみではなく、過去への敬意だった。）

「嵐」の前の状況とその後の歩みが聞きたいんだね……よかろう。あれはまさに天地が変わり、人々の心が大きな試練を迎える時期だった。

よりよく理解してもらうために、あの激動の前、中国で私たち大法修煉者にとっての空気は……君も知らないだろうが、まったく違っていたんだ。

（馬伯父は少し黙り、生き生きとした記憶を呼び起こすようにしていた。）

1999 年以前、特に 1994 年から 1995 年以降は、法輪大法は非常に広範囲に広まっていた。都市部から農村部まで、知識人から一般労働者まで、あらゆる場所で人々が功法を修煉していた。公園や広場、学校の庭など、あちこちに煉功点が設けられた。早朝や夕方には、優しい煉功音楽が流れ、ゆっくりと穏やかな動作が広がっていった……それは多くの人々の生活に美しい一部として溶け込んでいた。

最も貴いのは、私が見た限りでは、人々の内面からの変化だった。人々は「真・善・忍」の原理に従って生きることを学び、他人をまず思いやるようになり、家庭や社会での矛盾も自然と解消された。健康面でも著しく改善され、医者にも見放されたような病からも回復する人が多く現れた。誰かが号令をかけたわけでも、強制したわけでもない。すべては自発的に、大法から受けた恩恵と体験に基づいていた。

当時の政府機関も、少なくとも地方レベルでは肯定的に捉えていたところもあった。国民の健康状態が良くなり、社会も安定し、医療費の負担も軽減されたとして、表彰状や新聞記事などで評価されていた。すべてがとても良い方向、純粋な方向へと進んでいるように見えた。

（馬伯父はゆっくりと首を横に振り、その目に一瞬の憂いが走った。）

しかし……やがて黒雲が立ちこめてきた。最初はわずかな波紋だったが、次第に積み重なって、巨大な嵐の前触れとなっていった。君が望むなら、その前兆となる出来事についてまず話そう。それから「嵐」そのもの、そしてその後に起こったことについても順を追って語るとしようか。

エイブリー・リン：

はい、それでは当時のあなたや周囲の方々の心境や感情について、教えていただけますか？

馬長生：

うん、そのときの心境や感情について話すと……本当にいろいろな思いがあったよ、エイブリー・リン。

最初の兆候が現れたのは、例えば一部の地方新聞において法輪功を歪曲したり、中傷したりする記事が掲載され始めたことだった。最初、私たちの多くは驚き、そして信じられない気持ちだった。なぜなら、私たちは自分たちが何をしているのかをよく知っていたし、法輪功が人を善へと導き、善良な人間にし、社会に健康と調和をもたらしていることを理解していたからだ。一部の記者による誤解、あるいは理解のない者が事実とは異なることを書いたのだらうと、多くの人がそう思っていた。

当時の学習者の心持ちは、総じてとても純粹で善意に満ちていた。私たちは善が必ず理解されると信じていたし、真心をもっていれば、どんな誤解もいずれ解けると信じていた。そういった記事が出ると、多くの人には自然な反応として新聞社に足を運んだり、関連機関に手紙を書いたりして、法輪功が何であるか、その恩恵について丁寧に説明した。すべては穏やかに行われ、ただ人々に正しい理解をしてもらいたいという一心だった。

多くの人、私も含めて、依然として修煉を堅持し、毎日公園に行って功法を練習し、一緒に法を学んでいた。師父と大法への信頼は非常に大きかった。「真・善・忍」という普遍的な価値が間違っているはずがないと信じていた。時には、「これは恐らく私たちの心性を試すための試練なのだろう、悪口に対しても善念を保てるかどうかを見ているのだ」とすら思っていたよ。

しかしね、エイブリー・リン、そうした出来事が次第に増えていき、上層部から「法輪功修煉者に注意を払え」といった密かな指示が各機関や組織に下され始めたとき、特に以前の政治運動を体験していた年配の修煉者たちは、何かおかしいと感じるようになった。法学習グループでも、皆で不安を分かち合いながらも、大法の正義を信じる気持ちは変わらなかった。

私自身も、そのときまでの修煉の体験と法から得た理解を通して、何か良くないエネルギー場が形成されつつあるのを感じ取っていた。私はこう理解した——この末法の時期において、世間に広く善なるものが伝わる時、それは必ず魔難に遭い、人々の救済を妨げようとする旧勢力の干渉があるのだと。

そのとき私は、冷静さを保ちながら観察し、自分にも周囲の同修にも「ますます精進しなければならない、法を師とし、自分の言動を真・善・忍に照らし合わせよう」と呼びかけていたよ。

感情としては、落ち着きと信頼が根底にある一方で、善なるものが誤解され、意図的に歪められていることに対する憂いもあった。でも決して恐れたり、暴力で対抗しようとする気持ちはなかった。私たちにあるのは、ただ「善良」と「真実」という唯一の武器だった。

それが「嵐」が本格的に始まる前の時期であり、信念と純粋な善意がまだ強く存在していた一方で、不安の波が静かに押し寄せていた時期でもあったんだ。

エイブリー・リン：

当時の歴史的な記録を読むと、状況は非常に緊迫していて、最終的に数万人の修煉者たちが中南海の外に平和的に請願に行ったそうですね。それなのに中共は、これを口実にして「法輪功が中南海を包囲した」として、反政府的な意図があったと非難しました…

そのとき、馬伯父はどう思われましたか？ この平和的
請願に参加されましたか？

馬長生：

（うなずきながら、表情が少し真剣になる）

そうだよ、エイブリー・リン。1999 年 4 月 25 日の出来事は、まさに転換点だった。あの日を境に、状況は急激に変わっていったんだ。

それ以前にも、先ほど話したように、法輪功を中傷する記事や、裏での干渉があった。でも、本格的なエスカレートのはきはきは、天津の青少年向け科学雑誌に掲載された、学者・何祚庥による法輪功を誹謗中傷する記事だった。天津の修煉者たちは、その雑誌社に穏やかに事実を伝え、訂正を求めに行った。目的はただ一つ、誤解を解き、法輪功の潔白を取り戻すことだった。

ところが、天津当局は対話に応じるところか、武装警察を動員して修煉者たちを暴力的に逮捕・殴打した。釈放を求めに来た修煉者たちに対し、天津の警察は「この件は北京の指示によるものだ。解決を望むなら北京に行って陳情しろ」と告げたんだ。

その言葉と、不当な逮捕が、多くの人々に「もう黙ってはいられない」と思わせた。修煉者たちには政治的な目的などなかった。誰かに反対するつもりもなかった。私たちが望んだのは、ただ「法に則って修煉できる環境」と、「真・善・忍」に従って善良な人間として生きる自由、そして「私たちの師父に対する敬意と、法輪大法の書籍が合法的に出版される権利」だけだった。

天津の事件が広まると、全国の修煉者たち、私を含め、多くの人が「平和的に声を上げる責任がある」と感じた。私たちは組織もなく、誰かが呼びかけたわけでもなかった。それはまさに、良心と信念に基づく自発的な行動だった。

（馬伯父は少し遠くを見つめる）

あの日、私は北京にいた。国家信訪弁公室、つまり陳情を受け付ける政府機関の付近にいた。そこには全国から数万人の修煉者が集まっていた。最も印象に残っているのは、そして後に最も歪曲された点でもあるが——それは群衆の「驚くほどの平和と秩序」だった。

私たちは警察の誘導に従い、歩道に静かに立っていた。スローガンも、扇動的な横断幕もなかった。騒ぎもなく、

交通の妨げにもならなかった。誰もが自発的に清掃し、警官が捨てたタバコの吸い殻すら拾っていた。多くの人々が法輪大法の書籍を持ち、黙々と読んでいた。空気は静かで厳粛だった。私たちの唯一の願いは、政府と対話し、真実を伝えることだった。

彼らが後に広めた「中南海包囲」なる宣伝は、まったくの捏造で、白昼の嘘だよ、エイブリー・リン。中南海は中国の中央指導部の所在地で、非常に機密性の高い区域だ。誰一人として、そこを「包囲」しようとした者などいなかった。私たちは、警察の指示する場所に整然と立っていた。しかも、中共の本質を考えれば、本当に「包囲」や「反政府」的な行動であれば、彼らがすぐさま弾圧しないはずがないだろう？

私たちの目的は、非常に明確で簡単だった：

天津で不当に拘束された修煉者たちの即時釈放。

法輪功の書籍が合法的に出版されること。

法輪功を穏やかに修煉できる、干渉のない環境の確保。

その日、朱鎔基首相が修煉者の代表数名と面会し、話を聞いてくれた。そしてその後、天津で拘束されていた修

煉者たちも釈放された。表面的には、状況は一時的に落ち着いたように見えた。みんなは静かにその場を去り、自分たちが立っていた場所をきれいに掃除してから帰った。ゴミ一つ残さなかった。

そのとき、多くの人々、私自身も含めて、わずかな希望を抱いていた。「私たちの善意が、きっと伝わったはずだ。政府も公平な目で見えてくれるはずだ」と。しかし内心では、私はこの政権の本質を知っていたから、「これは嵐の前の静けさかもしれない」と感じていたよ。なぜなら、法輪大法の急速な広まりと、そこから生まれる精神的な価値は、彼らの無神論や階級闘争の思想とは根本的に相容れないものだったからだ。

彼らにとって、「中南海包囲」なる言い訳は、残酷な弾圧を正当化するためにあらかじめ用意されていた、数多の嘘のうちの一つにすぎないのだよ。

エイブリー・リン：

では、弾圧が正式に始まったとき、馬伯父が目撃された具体的な光景や出来事をいくつかお聞かせいただけますか？

馬長生：

（しばし沈思しながら、目を遠くに向ける。その眼差しには、あの激動の時代を回想するような重みが漂う。声にも重さが加わる。）

1999 年 7 月 20 日、弾圧が正式に始まったその日、エイブリー・リン、本当に「空が崩れ落ちた」ような感覚だったよ。4 月 25 日の請願の後、かすかに残っていた希望が、一気に悪夢に変わった。

その朝のことは、今でもはっきり覚えている。中央から地方まで、すべてのテレビ局、ラジオ局、新聞が、まるで一斉指令でもあったかのように、法輪功と私たちの師父を誹謗中傷する番組や記事を次々と流し始めた。毒々しい言葉、でっち上げの話、捏造された映像——それらが昼も夜も繰り返された。社会全体が、急に息苦しく、疑念と敵意に満ちた空気に包まれた。かつては笑顔で挨拶し、法輪功を褒めてくれた隣人や同僚、さらには家族までもが、私たちを見る目を変えた。恐れる者、距離を置く者、宣伝を信じて非難してくる者まで現れた。まるで世界全体が、私たちに背を向けたような感覚だった。

忘れられない光景がある。それは、修煉者たちのために自発的に練功場所を運営してくれていた「輔導員」たち、

私たちがとても敬愛していたその人々が、次々と姿を消していったことだ。学習者の間ではすぐに噂が広がった——あの人は昨夜逮捕された、あの人は公安に呼び出されたまま戻ってこない… 私は実際に、私の地域の輔導員が警察に連行される現場を目の当たりにしたことがある。深夜 2～3 時頃、玄関のドアを荒々しく叩く音、怒鳴り声、小さな子供の悲鳴、妻の懇願する声… 警官たちは家中を荒らし、法輪大法の書籍や師父の写真を押収し、その輔導員を手錠で連れて行った。パトカーの赤い光が夜に閃き、周囲は凍りついたような静けさに包まれた。その光景を見た者たちは、もはやこれは「誤解」などではなく、計画的で組織的な弾圧であると悟った。

そして、それまで毎朝みんなと一緒に喜びを分かち合っていた練功場所は、突如として監視下に置かれた。警察や治安員が見張っていて、近づくだけで追い払われ、名前を控えられ、練功しようとすれば即逮捕された。私たちが命のように大切にしていた大法の書籍、穏やかな練功音楽のカセットは、「違法な証拠物」とされ、多くの家庭が警察や地元幹部によって家宅搜索され、押収された。本を守ろうと説明する人もいたが、本が粗雑に袋に詰められていくのを見て、黙って涙を流す人もいた。彼らは、私たちに書籍を提出させ、修煉を放棄する誓約書

を書かせようとした。従わなければ、職を失い、子供は学校に通えなくなり、家族も連座させられると脅された。

その重圧は、一人一人、すべての家庭にのしかかった。健康を得たい、心を落ち着かせたい——ただそれだけの願いで修煉していた人たちが、突然、信仰と日常生活との間で、真実と一時的な「安全」との間で、苦しい選択を迫られることになった。その日々は、恐怖、不安、苦悩、そして抑えられた怒りに満ちていた。

私自身も、他の修煉者と同様、非常に辛い思いをした。師父が中傷されること、大法が汚されること、民衆が毒された宣伝に騙されること、それらすべてが本当に心痛だった。しかし、心の奥深くでは、「真・善・忍」への信念、大法の正義への確信は微塵も揺るがなかった。私は分かっていた。これは大きな試練、修煉者として乗り越えるべき「魔難」なのだと。そして、どれほど困難であろうとも、私たちは善の心を持ち続け、偽りに対しては真実で応えるしかないのだと。

エイブリー・リン：

その光景は本当に恐ろしいですね……

それで、その時、警察に嫌がらせを受けるようなことはありましたか？

馬長生：

（軽くうなずき、微笑を浮かべるが、その記憶の深刻さまでは隠しきれない）

あったとも、エイブリー・リン。その嵐の中で、法輪大法を修煉する者で政府や警察の「関心」を受けなかった人など、ほとんどいないよ。私も例外ではなかった。

禁止令が出された後、まもなく私は地元の派出所や区の公安から「お招き」を受けた。「逮捕」ではなく、「話をしたい」「状況を知りたい」などと、穏やかな言葉が使われたが、誰もがその裏にある意味を理解していた。

ある日のことをよく覚えている。私は派出所で丸一日拘束された。狭い取調室に数人の警察官が交代で入ってきて「話し合い」を持ちかけてきた。最初は柔らかな口調で、「いつから法輪功を始めたのか」「どんな効果があったか」と聞いてきて、そのうちに話は「法輪功の反動的で迷信的な性質を認識すべき」といった内容に移っていった。用意された資料や誹謗中傷の記事を読み上げさせ、「認識を高める」ようにと要求された。

（彼は一息つき、エイブリー・リンが注いだお茶をひとくち飲んでから話を続けた）

その時の私はとても落ち着いていた。むしろ、これは真実を伝える機会だと思った。私は穏やかに彼らに説明した。法輪功は「真・善・忍」に従って人々に善良な人間になるよう導き、健康を改善し、道徳を高めるものであり、政治的な目的は一切ないと。私は自分や家族が得た利益、社会に現れた良い変化について語った。テレビや新聞で言われていることは事実ではなく、中傷であると。

若い警官の中には黙って耳を傾ける人もいた。その目には少しの戸惑いや揺らぎが見えた。しかし、年配の警官や「立場の堅い」者たちは話を遮り、「君は騙されている」「洗脳されている」と言ってきた。彼らは私に、法輪功を放棄する誓約書に署名し、すべての書籍と資料を提出し、他の修煉者と連絡を取らない、外で練功しない、「宣伝」しないと誓うように求めた。

私は彼らにこう言った。「皆さん、『真・善・忍』は人として目指すべき美德です。法輪大法は、私たちにそれに従ってより良い人間になり、健康になるよう導いてくれます。そのどこが間違いなのですか？『真・善・忍』を捨て、善良な人間になる努力を放棄しろというのなら、

それは私にはできません。大法の書は、人生の意味を教えてください。貴重なものです。それを手放すことなどできません。」

警察側はさまざまな手を使ってきた。柔らかに説得したかと思えば、脅しに切り替える。協力しなければ職を失い、子供の将来にも影響が出る、「再教育」施設に送ることもあり得る——そうやってきた。それらの脅しには確かに重みがあった。家族がいれば、愛する人がいればなおさらだ。

でも、そんな時こそ私は師父の教えを思い出した。多くの修煉者たちの犠牲と勇気を思い出した。修煉者であるならば、このような試練には正義と善良な心で向き合うべきだと。恐れてはならない。恐れは、悪をますます増長させるだけだと。

職場の幹部や地域の住民委員も、命令で私の家に来て「説得」や「助言」をしてきた。命令通りに動く人もいれば、「今は耐えるしかないよ、家でなら練功してもいいけど外ではやめておいたほうがいい」とそっと教えてくれる人もいた。その気持ちは理解できた。

その結果、私は「重点監視対象」に指定された。すぐに逮捕されることはなかったが、それは私が主要な輔導員ではなかったこと、また私の態度が常に穏やかで理知的で、警察側に直接的な口実を与えなかったからかもしれない。でも、それ以降の生活はもはや平穏ではなかった。常に誰かに見られている、監視されている——そんな感覚が常にあった。

これが、弾圧が始まった初期に私が経験したことだ。他の多くの修煉者が体験したこと——逮捕、拷問、投獄、命を失うような事態——に比べれば、私の経験はまだ「軽い」部類かもしれない。それでも、この弾圧の残酷さと理不尽さを痛感するには十分だった。

エイブリー・リン：

当時の状況はどんどん緊迫していったと聞いています。ある修煉者たちは天安門広場にまで行って抗議したそうですね……その場面を実際にご覧になったことはありますか？

馬長生：

（ゆっくりとうなずき、彼の目には深い悲しみが一瞬浮かんだ）

その通りだよ、エイブリー・リン。あらゆる平和的な対話の道が閉ざされ、政府に対する真実の説明も通じず、国営メディアでは中傷と誹謗が日々強まっていき、さらには多くの修煉者たちがただ信仰を捨てなかつただけで逮捕され、殴られ、時には拷問まで受けるようになると……一部の修煉者たちは、自らの声を届けるために天安門広場に赴くことを選んだのだ。

それは絶望からの行動でもあったが、同時に「真・善・忍」への揺るぎない信念と勇気から来たものでもあった。彼らは決して騒ぎを起こそうとしたのではないし、誰かを転覆させるつもりもなかった。ただ世界に、中国国民に向けて「法輪大法は素晴らしい！」「真・善・忍は素晴らしい！」という真実の一言を伝えたかっただけだ。そして不当な弾圧をやめてほしいという願いを届けたかった。多くの人が手書きの小さな横断幕を持ち、あるいは静かに座って功法を煉っていた。

（彼は少し黙り込み、まるでその時を思い出すかのよう
に）

私も……私も何度か、その場にいたことがあるんだよ、エイブリー・リン。修煉者として、仲間たちが迫害されていくのを黙って見ているわけにはいかなかった。そこが非常に危険な場所だということは分かっていた。ほんの少しの「異常な動き」すら、すぐに取り締まりの対象となるのだから。

ある日のことを、私は今でもはっきり覚えている。いつものように、私は僧侶の法衣を身にまとい、頭を剃っていた。出家してから大法に出会うまで、私はずっとその修行の形を守ってきたからだ。その日、小さなグループの修煉者たちとともに広場に近づいた瞬間、まだ何もしていないのに、警官や私服の者たちが一斉に押し寄せてきた。

彼らは大声で怒鳴り、周囲の修煉者たちを乱暴に引き離していった。叫び声や怒鳴り声が飛び交っていた。私ももうすぐ逮捕されるのだと覚悟していた。だが、警官の一人が私の法衣と剃髪を見て、突然手を振って大声で言ったのだ。「このお坊さんは関係ない！ あっちへ行け！」別の者も言った。「あの僧侶は放っておけ。関係ないんだ！」

彼らは私を、どこかの寺の僧侶だと思ったのだろう。法輪功とは無関係だと勘違いしていたのだ。

その瞬間、エイブリー・リン、私は言葉にできないほどの切なさを感じた。私が「見逃された」のは、彼らの尊重によるものではなく、単なる誤解からだった。彼らは私が他の修煉者たちと同じ、法輪大法の修煉者であることを知らなかったのだ。「私も法輪功の修煉者だ！」と叫びたかった。でも、仲間たちはあっという間に連れ去られ、その場の混乱の中でそれは叶わなかった。私はその場に立ち尽くし、連れて行かれる仲間たちの背中を見送りながら、胸が締め付けられるようだった。

あの時の天安門広場の光景は、今でも心に焼きついている。何の武器も持たず、ただ一言の真実を伝えたかっただけの修煉者たちが、まるで危険な犯罪者のように扱われ、暴力を受け、警察車両に押し込まれていった。そしてその後は、派出所や拘留所、労働教養所での監禁と拷問の日々が待っていた。多くの人々が、二度と帰ってくることはなかった。

そうした出来事を目の当たりにするたび、あるいは聞かされたたびに、私はこの弾圧の本質的な邪悪さを一層強く感じた。そして、それでもなお「真・善・忍」を守り抜き、

信念を貫いた修煉者たちの偉大さを痛感した。彼らこそ、本当の意味での修煉者であり、人としての尊厳を体現した存在だったのだ。

エイブリー・リン：

このような弾圧の中で、修煉の環境も 180 度変わってしまったんですね……その時、どのように法を学び、功を煉られていたのですか？ もう公園には行けなかったでしょうし……大法を広めることも、きっとより困難になったのでは？

馬長生：

（うなずきながら、遠くを見つめるような眼差しに、深い思いがにじむ）

そうだよ、エイブリー・リン。君の言う通りだ。かつては公に、自由に修煉でき、社会からも良い評価を受けていた環境が、一夜にしてまるで罪人のように追われる存在へと変わってしまった。修煉の環境は 180 度変わってしまったのだ。

法の学習と功法の煉功について言えば、公園や公共の場所で行うことは完全に不可能になった。そうした場所はすでに警察や警備員に監視されていて、煉功の動作を少しでも見せればすぐに介入され、逮捕されるようになった。

私たちが命のように大切にしていた大法の書籍、特に『轉法輪』は、誰もが非常に慎重に隠していた。見つければ警察に没収され、ひどい扱いで焼却されることもあった。君も知っているように、本を持っている者は夜中や人目を避けた時間に、家の中でそっと読むしかなかった。集団での法学習も秘密裏に行うしかなかった。信頼できる少人数の仲間だけが、ある家に集まり、一緒に法を読み、体験を分かち合った。そうした学法の時間は非常に貴重で、信念を保ち、困難な中での方向性を見出す大きな助けになった。中には法を暗記しようと努力する者もいた。本は奪われても、心と頭に刻まれたものは誰にも奪えないからだ。師父の法の教えこそが、真偽と善悪を見極める羅針盤となった。

煉功についても、家の中で行うしかなかった。多くは早朝、空がまだ暗いうちか、夜中に人々が寝静まった後に静かに煉功する。以前のようなエネルギーに満ちた集団

煉功はなくなり、皆がそれぞれに静かに続けた。もし条件が整い、安全が確保されれば、ごく親しい同修たちが集まり、密かに一緒に煉功することもあったが、細心の注意が必要だった。

大法を広める「洪法」は、そのような状況下では公に行くことはほぼ不可能だった。しかし、それに代わってもっと大切で緊急な任務が生まれた。それが「真相を伝えること（講清真相）」だった。なぜそれをしなければならなかったか、君はわかるかい？ 国の宣伝機関は全力で大法を誹謗中傷し、人民を欺き、憎しみを煽っていた。もし私たちが黙っていたら、嘘がさらに広まり、人々は毒され、大法に対する弾圧は正当化されてしまう。だから私たちは真実を語らなければならなかった。それは大法の名誉を回復するためだけでなく、嘘に騙された人々を救うためでもあった。彼らが仏法に背いて罪を犯すことのないように。

では、どうやって真相を伝えたのか？

主に家族、友人、同僚、信頼できる隣人から始めた。自分自身の体験、法輪功の修煉によって得た健康や精神的な変化、この法門の平和で善良な本質を語った。そして、テレビや新聞で言われていることは事実とは違うと説明

した。多くの修煉者は、自らで真相を伝える資料を作った。自分の貯金で紙やインクを買い、文章を打ち、コピーして、大法の素晴らしさと弾圧の残酷さを伝える文書を配布した。郵便受けに入れたり、ドアの隙間に挟んだり、人のいない公共の場所にこっそり置いたりした。中にはお札に「法輪大法は素晴らしい」「真・善・忍は素晴らしい」と書いて流通させる人もいた。もっと条件の整った人たちはインターネットを使い、検閲を潜り抜けて海外や国内のネットユーザーに向けて情報を発信した。

エイブリー・リン、これらすべての行為は極めて危険だった。真相を伝える資料を配っただけで長期刑を受けたり、労働教養所で残酷な拷問を受けたりする可能性があった。それでも多くの修煉者が続けた。なぜなら、彼らは真実の力を信じていたし、人々を救いたいという慈悲の心を持っていたからだ。

それはまさに力の不均衡な闘いだった。一方には暴力とメディアを握る巨大な弾圧機構があり、もう一方には手ぶらで、信仰と善良さしか持たない修煉者たちがいた。しかしそのような過酷な状況の中でこそ、真に修煉する者の信念が鍛えられ、世俗の目的で来ていた者との違い

が明確になった。まさに「火で金を試し、苦難で人を試す」という言葉の通りだよ、エイブリー。

エイブリー・リン：

はい、そのような状況の中で、先生はじっと一か所にとどまって「嵐を避ける」つもりだったのでしょうか？それとも、何か別のご計画があったのでしょうか？

馬長生：

（ほほえみながらも、どこか物思いにふけた表情）

たとえ「安全」と言えるような場所に留まったとしても、私の心は安まらなかったよ、エイブリー・リン。師父が誹謗され、大法が中傷され、無数の同修が苦難に耐え、数え切れない人々が欺かれている中で、自分自身の安全だけを考えることなんて、私にはできなかった。修煉者として、魔難の時こそが心性を示し、法を実証する時なのだ。逃げ隠れることは、解決にならない。

私は思ったんだ、自分が行かなくてはならないと。まだ真相を知らない人々のところへ行き、伝えなければならぬと。それもまた、修煉の一部であり、大法を得た時

の誓約を実行する道でもある。さらに言えば、私がいまだに仏教の修行者の姿であったことは、ときに思わぬ利点になることもあったんだ。君が天安門の話で聞いた通り、あれは誤解によるものであったが、結果的には助かった。

こうして、心を整え、少しの準備をしてから、私は新たな旅に出た。数年にわたり、全国の多くの省や都市を巡る旅だった。私はそれを「洪法と真相を伝える旅」と呼んでいる。

その年月の中で、エイブリー・リン、私は本当に多くの人々と出会った。一般の人々から、他の宗教の修行者たちまで。ある場所では短期間だけ滞在し、人々に法輪大法について、迫害の真相について語り、そして去った。またある場所では、条件が整っていれば、もう少し長く滞在して、小さな学法グループを再構築し、同修たちが信念を保てるよう支援した。

私は自分の生活様式を保ち、菜食を守り、戒律を守り、たとえ正式な寺院がなくても、常に心は修煉に向いていた。縁ある人々に出会えば、「真・善・忍」の美しさや、大法のもたらす恩恵を語り、同時に、政府の宣伝による偽りと毒害を暴露することも忘れなかった。

もちろん、この旅は決して平坦ではなかった。危険は常につきまといっていた。公安に「呼び出される」ことや、監視されること、あるいは逮捕されることも、当然のように起きた……

（馬長生は少し言葉を止めた後、続けた）

うん、一つ話しておこう。あの旅の中で、天安門のように誤解されて見逃されたケースばかりではなかった。本当に逮捕され、取り調べや拘束を受けたこともあった。

実際、逮捕の原因は公安に直接見つかったからとは限らない。恐れや誤解、あるいは想像もしていなかった人からの通報によって起きたこともあった。

ある時、私が訪れたのは、ある山間部の遠い省にある古びた寺院だった。静かなその場所なら、真の修行者と出会えるかもしれないと思い、数日間の宿泊をお願いした。

最初は住職も親切で、仏法や私が旅してきた場所について色々と話をしてくれた。私は慎重に、しかし誠意をもって、法輪大法について、「真・善・忍」の原理について、そして私たちが受けている不当な迫害について少しずつ語っていった。彼は真剣に耳を傾け、うなずき、多

くの点に共感してくれているように見えた。私は小さな真相資料もいくつか手渡した。

だが、思いもよらないことが起きたんだ、エイブリー・リン……

（馬長生の顔にかすかな悲しみが浮かぶ）

数日後のある日、私が部屋で静かに坐禅していたところ、突然公安が押し入ってきた。「法輪功を違法に宣伝している」という通報があったとのこと。その瞬間、私はすぐに悟った。あの住職が、きっと寺院が連座されるのを恐れたのか、あるいは私の言葉を信じてはいなかったのか、密かに通報したのだと。

手錠をかけられて連れて行かれる時、私は住職の姿を見た。彼は隅に立ち、私を見ようともせず、目をそらしていた。私は彼を恨まなかったよ、エイブリー・リン。むしろ哀れに思った。この末法の世では、権力への恐怖が、善と正義への信念を上回ってしまうことがあるのだ。

その後、私は長時間にわたって拘束され、尋問を受けた。彼らはありとあらゆる手段を使って、信仰を捨てさせ、

仲間の修煉者の情報を吐かせようとした。でも、もちろん私はそれをすることはできなかった。

私がその時を特に忘れられないのは、公安の厳しさではなく、むしろあの状況が、すべてをかけて真実を伝えた相手から裏切られるという形で起きたことだった。それは、真相を伝える道の厳しさと、人心の複雑さを改めて痛感させる出来事だったのだ。

エイブリー・リン：

末法の時代には、多くの寺院がもはや清浄な場所ではなくなっており、寺にいる僧侶たちの中には本物の修行者ではなく、むしろ中共の「手先」になっている人もいると聞きました。

それで、先生は逮捕された後、他の学習者たちが経験したような拷問を受けたりしましたか？

馬長生：

（その目はふと沈み込み、深い沈思の色を帯びる。静かにうなづく）

エイブリー・リン、君の言うとおりでよ。末法のこの時代、残念ながら、僧衣をまとった場所がすべて清浄であるとは限らなくなってしまった。寺院も世俗に染まり、時には権力に利用され、本物の修行者ばかりとは限らない。恐怖や私利私欲、あるいは当局の甘言に惑わされて、知らず知らずのうちに、あるいは故意に、仏教の教えに反する行為をしている者もいる。あの住職の件はその一例にすぎない。私は彼を責める気はない。ただ、混乱したこの世相の一つの表れとして、哀れに感じるだけだ。

（少し間を置いて、エイブリー・リンを真っすぐ見つめる。声は落ち着いているが、そこには重みがある）

そして、私が逮捕された後に他の学習者のように拷問を受けたかどうか……エイブリー・リン、この弾圧で中共の狙っているのは、単なる拘束ではないのだ。彼らは「転向」させたいのだ。つまり、修煉者の意志を折り、真・善・忍への信仰を捨てさせ、師父を否定させ、大法を中傷させようとしている。その目的のためには、手段を選ばない。

私も例外ではなかった。あの寺で逮捕された後、地元の公安局に連れて行かれ、さらに拘留所に移送された。そこでの日々は、単なる尋問や脅しでは終わらなかった。

彼らの手口は多様だったよ、エイブリー・リン。ある夜には、眠らせないために交代で尋問され、強い照明をつけっぱなしにされた。精神を弱らせ、屈服させるのが狙いだった。

そして、師父や大法を侮辱する言葉が、拡声器や公安自身の口から繰り返し投げつけられた。それは挑発であり、反応を引き出すための策略だった。

身体的にも、決して楽ではなかった。私のような年配者でも、長時間の立たされたり、しゃがまされたりして、身動きも取れないようにされた。食事は粗末で、衛生環境も劣悪だった。

私が「三書」――修煉放棄の誓約書、反省文、他者の密告文――にサインしなかったために、より強い手段が使われることもあった。若い公安職員が、「実績を上げたい」とか、あるいはプロパガンダに洗脳されていたのか、暴力をふるったこともある。

（馬長生は小さく息を吐いた。それは悲観ではなく、重い記憶を静かに手放すような吐息だった）

でもね、エイブリー・リン、私たち修煉者は、そうしたものに直面しても、内に法がある。私は常に師父の教えを思い出し、正念を保つよう努めた。恐れや憎しみが心

を支配しないように。これは魔難であり、試練なのだと理解していたからだ。彼らが私の身体にダメージを与えられても、私の真・善・忍への信仰を揺るがすことはできない。私はできる限り善意をもって接し、真相を語ろうとした。たとえ彼らが聞く耳を持っていなくても、だ。

私の経験は、他の多くの同修が経験した残酷な拷問、障害を負うほどの暴力、果てには命を落とすような迫害と比べれば、まだ「軽い」部類かもしれない。

だが、それでも十分に、中共によるこの弾圧の残酷さを実感し、同時に、法輪大法の修煉者たちがいかに信念を貫き通しているかを、より深く理解することができた。彼らこそ、本当に命をかけて信仰を守り抜いている、大法弟子なのだ。

エイブリー・リン：

先生が拘束されていた時期、他の学習者が暴行を受けたり、さらには臓器を摘出されたりする場面を目撃されたことはありますか？

馬長生：

（彼の顔は非常に厳粛な表情となり、その目には押し殺された痛みと憤りが浮かんでいる。長く沈黙した後、まるでこれから口にする恐ろしいことばを選んでいるかのようにゆっくりと言葉を紡ぐ）

エイブリー・リン、その質問は…それは、善良な人々の想像を遥かに超える罪悪だ。

あの場所にいた時――拘留所や労働教養所の中では、私の同修が残虐な拷問を受けるのを目の当たりにするのは、ほとんど日常茶飯事だった。私は本当に多くの胸が張り裂けそうな光景を目撃した。

取調室から響く悲鳴、血まみれで引きずられていく同修、あるいは房に戻されたときには全身に傷とあざを負い、まともに歩けない姿。

ある者は手錠で何日も吊るされ、感覚の鋭い部位に電気警棒を押し当てられ、硬いプラスチックチューブで強制的に食事を与えられ喉が血まみれになり、冬の極寒の中で冷水を浴びせられることもあった…。

彼らの目的は、極限の肉体的苦痛を通じて精神を崩壊させ、私たちに信仰を放棄させることだった。

多くの同修は非常に信念が固く、死線をさまようような拷問を受けても、「法輪大法は素晴らしい」と言い続け、一言も不満を口にせず、ただ静かに耐えていた。その不屈の姿こそが、時に加害者をますます狂気に駆り立てることすらあった。

そして…その…臓器摘出の件についてだが…。

（馬長生は深く息を吸い込み、その声にはかすかな震えが混じる）

あそこにいた当時、私は誰かが目の前で解剖される現場を直接見たわけではない。

そのような前代未聞の行為は、極めて秘密裏に行われ、私たちのような立場の人間には一切その痕跡が見えないようにされていた。

だが、私は明らかにおかしいと感じざるを得ない状況をいくつも目撃している。特に若くて健康で、「転向」しないことを断固として拒んだ同修たちが、ある日突然、何の説明もなく姿を消してしまうのだ。

その前に、彼らは詳細な「健康診断」と称して血液検査や各種検査を受けさせられていた。他の囚人にはない「待遇」だった。そしてその後、彼らは消息を絶つ。

家族が問い合わせても、当局は「釈放した」「他の場所
に移送された」「病気で死亡した」などと曖昧に答える
ばかりで、遺体を見ることは許されず、見たとしてもす
でに火葬された後だった。

囚人の間では、ひそひそとした噂がささやかれていた。
「法輪功学習者の臓器は質がいい」「高値で売れる」
と…。

その時私たちは、ただただ恐ろしく、混乱して、信じた
くない思いだった。

だがその後、拘束が解かれ、外の世界の情報——国際的
な調査報告、目撃証言——に触れるようになってから、
私がかつて見聞きした断片が少しずつ繋がっていった…。
そして、その「真実」はあまりにも恐ろしすぎるものだ
った。エイブリー・リン、それは単なる個人的な犯罪で
はなく、国家の後ろ盾のある組織的な犯行の可能性があ
る。

対象は拘束された法輪功修煉者。彼らは人間として扱わ
れず、「生きた臓器バンク」として臓器移植産業に供さ
れていたというのだ。

突然姿を消した同修たち、あの不可解な健康診断——思
い返すたび、私はあの残虐非道な罪と繋げずにはいられ

ない。

それは、今なお生き残って真実を知った私たちの心に、決して癒えることのない傷を残している。

それは人類に対する罪、ジェノサイドなのだよ、エイブリー・リン。

エイブリー・リン：

はい…それは本当に胸が痛む光景です…。

では先生は、どれくらいの期間、拘束されていたのですか？

馬長生：

（馬伯父は静かにうなずき、目に少し思いを巡らせる表情が浮かび、やがてははっきりとした眼差しになる）

ちょっと正確に思い出してみよう…。あの寺で拘束されたときだが、取調べや監禁、「転向」させようという試みを経て、実際に収監されていた期間は、だいたい三～四ヶ月ほどだったよ、エイブリー・リン。

確かに、多くの同修が何年、あるいは十年以上も拘禁されていたことを思えば、私の期間はそう長くはなかった。それでも、たぶん一因として、私が常に正念を保ち、師と法への信を貫いたことがあると思っている。どんな圧力や尋問に直面しても、私は常に善の心で真実を伝えるよう努めた。恐れず、怨まず、ただ「法輪大法は人に善を教える」「真・善・忍は正しい」「この迫害は間違っている」と、静かに語り続けた。

何度か、師父の加持（加護）を感じたこともある。最も困難な瞬間を乗り越えられたのは、きっと師父の慈悲のおかげだと信じている。心が正しく純粹であれば、恐れがなければ、邪悪は入り込む隙を見つけられない。修煉者の正念は、環境すらも変える力がある——私はそう確信している。

三～四ヶ月という短い期間であっても、彼らのありとあらゆる手段——誘惑、脅迫、精神的・肉体的な圧力——を体験し、目撃するには十分だった。彼らは私の信念を揺るがすことができず、「三書」を書かせることもできなかった。それに、彼らにとっても、「転向」させられない年老いた僧侶を長く拘禁しても、何の得にもならな

いと判断したのかもしれない。最終的に、彼らは私を釈放した。

たった三～四ヶ月とはいえ、それは極めて厳しい修煉の場だったよ、エイブリー・リン。その経験を通して、私はこの迫害の本質をより深く見抜くことができたし、自分の歩むべき道への信念は一層固まった。

そして釈放された後も、たとえ監視や制限が続いていようと、私は法輪大法の弟子として、すべきことを続けた。

エイブリー・リン：

釈放された後も、法を広め、真相を伝える道が続けていらっしゃるんですね？何か印象に残っている出来事をいくつか教えていただけますか？

馬長生：

（穏やかに微笑みながらも、その目には揺るがぬ決意が宿っている）

もちろんだよ、エイブリー・リン。やめられるはずがないじゃないか。釈放された後も、自分がまだ彼らの「監視対象」だとわかっていたが、弟子としての責任、師父

と大法が誹謗中傷されている現実、そして多くの人々が
いまだに欺かれている状況を前にして、黙ってはいられ
なかった。拘禁中の時間は、真相を伝えることの重要性
をいっそう痛感させてくれた。

法を広め、真相を伝える旅は再び始まった。以前より慎
重にはなったが、心は以前にも増して堅くなった。

忘れられない出来事かい……数え切れないよ、エイブリ
ー・リン。一つひとつの出会い、真相を伝えられた人、
それぞれが物語なんだ。

ある時、かなり辺鄙な農村を訪れたことがある。そこ
では情報がほとんど遮断されていて、住民たちはテレビの
プロパガンダでしか法輪功を知らなかった。農民の一家
と接触することができて、彼らには重病を患っている息
子がいた。多くの病院を訪ねても治らず、家計も苦しか
った。彼らはとても素朴で善良な人たちだった。

最初に法輪功の話をしたとき、彼らは非常に怯えて、
「それは禁止されている邪教だ」と何度も手を振って否
定した。でも私は焦らず、自分の体験を話した。大法か
ら得た恩恵、修煉を通して健康も心も救われたこと、そ

して迫害の実情を。私は「真・善・忍」の原理について語り、人としてどうあるべきかを話したんだ。

数日間、その家に泊めてもらい、雑用を手伝いながら真心を込めて接した。すると彼らも次第に私の姿からテレビの話と違うことを感じたようで、やがて話を聞いてくれるようになった。私は小さな真相資料を渡した。

三日目の朝だったか、寝たきりだった息子さんが突然「少し楽になった」と言って、自分から体を起こそうとした。家族は驚きと喜びで目を丸くした。私は言った、「それは、あなた方の心が大法に対して善念を持ちはじめたからかもしれません。仏法は無辺であり、真心を持てば、神仏はそれを見ておられます」と。そして私は「法輪大法ハオ（素晴らしい）」「真・善・忍ハオ」と心の中で唱えてみるよう勧めた。

その家を離れるとき、家族みんなが村の入り口まで見送りに来てくれて、お母さんは私の手を握って涙を浮かべながら言った。「もうテレビのデタラメは信じません」と。彼らがその後修煉に入ったかどうかは分からない。でも私は、善なる種が彼らの心に蒔かれたと信じている。それだけでも、苦難の中で前へ進む力になった。

もちろん、逆に敵意を持たれたこともある。市場で真相資料を配った時、あるいは公共の場に小さな掲示を貼った時など、通報すると脅されたこともあった。そういうときも私は常に冷静を保ち、説明できる相手には丁寧に話し、聞く耳を持たない相手には静かにその場を離れる。争うことではない、自分がやるべきことをやった、それが大切なんだ。

巡る中で、寺院や道観で修行している人々とも多く会ったよ。もちろん、先日の通報した住職のような人もいたけど、全員がそうではない。中には本当に道を求めている修行者もいて、大法や迫害についての理解は浅くとも、話を聞いてくれる人たちもいた。そういう出会いが、私に時代の深さ、そして修煉の道とは何かを考えさせてくれたんだ。

エイブリー・リン：

では、法を広める旅は順調でしたか？大法と縁のある人々に多く出会いましたか？

私は聞いたことがあります、寺で修行している多くの僧侶たちは、長年経典を読み、数々の法理を悟っていると

感じていて……そうすると、どうしても「自分は高みにいる」という心が生じてしまい、対話や体験の共有が非常に難しくなるとか……

馬長生：

（穏やかに微笑むが、その表情にはわずかに思索の色も浮かぶ）

「順調」とは、あの旅を形容するのにふさわしい言葉ではないかもしれないね、エイブリー・リン。一步一步に危険が潜んでいて、一言発するにも細心の注意が必要だった。でも、縁ある人々に出会ったという点では、確かに少なくはなかったよ。

「縁」と言っても、いろいろある。話し始めた瞬間から、私の誠意や大法の素晴らしさを感じ取り、心を開いてくれる人もいた。そういう人は、もともと良い根基を持っていて、おそらく長い間待ち望んでいたのだろう。さっき話した農村の家族も、その一例だ。

一方で、最初は疑い深く、あるいは強く反対していた人たちも、私が真心を持って真相を伝え続けることで、次第に態度が変わっていった人もいた。すぐには信じなくても、少なくとも思考が芽生え、盲目的にプロパガンダ

を信じることはなくなる。彼らの心に一粒の善念の種を蒔くことができれば、それだけでも私にとっては大きな成果なんだ。

そして、君が言ったような寺で修行している僧侶たちについて……それは確かに特別なケースであり、簡単ではない。

（少し間を置き、遠くを見るように目を細めて）

君の言うとおりでよ、エイブリー・リン。多くの僧侶たちは、人生のほとんどを經典の研究に費やし、それぞれの宗派の戒律を守っている。彼らの心には、自らが学び悟ってきた法理や修行の経験が深く根付いていて、それは切り離せない存在になっている。そうになると、まったく新しい法門、未知の認識を受け入れるというのは、非常に大きな試練になるんだ。

「高みにいる心」というのは、いろいろな原因で生まれる。自分の知識に執着し、「自分の知っていることが最も高い」と思い込む心。常に人から敬われる立場にあることで、知らない人間の話の聞こうとしない傲慢な心。そして、この末法の時代において、僧侶の姿をしていますが、真の修行心が失われ、世俗の影響で信仰の本質が薄

れてしまっている人もいる。彼らは見かけ上は法理を語るのが上手でも、謙虚さや新たな真理を受け入れる心の広さに欠けていることが多い。

そういう人に出会ったとき、私は決して議論したり、自分の法が「上」だと証明しようとしたりはしない。ただ、誠実かつ尊敬の心を持って自分の体験を語るだけだ。大法に出会ってから心身ともに向上できたこと、「真・善・忍」という普遍的な価値がいかに人間として重要かを、静かに伝えるんだ。そして、もし機会があれば、末法の時代における修行環境の乱れや、彼ら自身が感じているであろう純粹性の欠如についても、さりげなく話すこともある。

彼らの中には、ただ静かに耳を傾けて反応を見せない者もいれば、はっきりと否定する者もいる。でも、私はそれでいいと思っている。人にはそれぞれ縁と悟性がある。私は縁を結ぶことしかできないし、受け入れるかどうかは彼ら自身の選択だ。

とはいえ、すべての僧侶がそういうわけではない。真に道を求める心を持ち、固定観念に縛られずに新たな理解を受け入れようとする人にも出会ったよ。その中でも、ある古い寺院の住職との対話は特に深く心に残っている。

私たちは長い時間話し合い、末法の時代、現代の修行の困難さ、「不二法門（ただ一つの法門）」の本当の意味などについて、それぞれの体験から語り合った。その出会いは、私にとっても大きな省察をもたらしたんだ。

エイブリー・リン：

はい、その住職との出会いについてお話しいただけますか？もし詳細に覚えていらっしゃれば…

馬長生：

（微笑みながら、遠くの記憶を見つめるような眼差し。だが、それは今なお鮮やかに心に刻まれている様子だった）

もちろんだよ、エイブリー・リン。あの出会いは今でもはっきりと覚えている。

それはある午後のことだった。私は山の斜面にひっそりと佇む、とても静かな古い寺に足を止めたんだ。そこの住職は、私の見たところ七十歳を超えていて、威厳があり、顔つきも穏やかだった。

一晩泊まらせてもらえるかお願いしたところ、快く受け入れてくれて、その後、一緒にお茶を飲みながら話をした。彼の部屋はね、エイブリー・リン、経典で埋め尽くされていたよ。本当にいろんな種類の経典があった。正統な仏教経典はもちろん、道教の書物、さらには他宗教の書物や民間信仰の経典まで、たとえば『王母娘娘経』のようなものもね…

彼は自身の博識ぶりを誇りに思っているようで、「多くの法門や教えを研究してきた」と語っていた。

彼はこの混迷の世に対する憂い、そして人々の道德の衰退、修行者たちの苦しみについて嘆いていた。「人々の苦しみを和らげる道を探し続けている」と言っていたけれど、その言葉の中には、どこか曖昧さや不確かさがあり、彼自身もその内心を隠しきれていないようだった。

彼の話聞いたあとで、私は「末法の時代」に対する自分の悟りを彼に語った。

ただ単に道德が乱れているのではなく、より根本的な問題として、正統な経典は次第に失われ、理解が困難になっており、後の世の人間による個人的な悟りを基にした書物ばかりが増えている。それらは表面的には分かりやすいかもしれないが、本来の深遠な意味や真意には到達

していないのだと。人々はその浅い理解に惑わされ、それをもって「悟った」と勘違いしてしまっている。

そしてもう一つ重要な点として、私はこう伝えた：
過去に神仏が世に降りて法を伝えたとしても、その法はある一定の時期しか存続できないということ。
末法の時代に入った今、かつての法門はもはや本来の力を失っており、人々を真に救うことはできない。なぜなら、その法を説いた覚者たちの「任期」はすでに終わってしまっているからだ。
例えるなら、任期の終わった大統領がもはや国家を指揮できないようなもの。今こそ、人々は新たな「真の法」、未来の仏である「弥勒仏」が世に降臨するのを待っている時なのだと。

彼の部屋にさまざまな種類の経典が積まれているのを見て、私は「不二法門」に対する自分の体得も静かに語った。

「学ぶな」という意味ではないが、真に解脱を目指す修行においては、一つの法門に専念することが極めて重要だと。

私はこう例えた：「私たちが修行するには、心性を修め、法理を悟るだけでなく、『徳』を『功』に転化する必要

がある。

すべての正法門には、それぞれの師が弟子を助け、『徳』を『功』へと変える独自の機構がある。

もし、ある一定量の『徳』しか持っていないのに、それを複数の法門に分け与えようとしたら、ちょうど一軒分の建材しかないのに何軒もの家を建てようとしているようなもので、結局どの家も完成しない」。

彼があまりに多くの経典を読んでいることで、心が散乱し、エネルギーが集中できず、もし彼に信じる正統な法門の師がいたとしても、その師も彼を高く引き上げることが難しくなる。それは、無意識のうちに「不二法門」の原則に背いてしまっているということなんだ。

その住職は長く黙り込んでいたよ、エイブリー・リン。彼の顔には驚きと深い思索の色が浮かび、きっと私の言葉が彼自身の修行の中で感じていた迷いや行き詰まりに触れたのだろう。反論することはなく、ただ静かに頷き、最初の自信に満ちた表情とは違って、深い沈思の眼差しを浮かべていた。

その後、私が出発する前に、『轉法輪（チュワン・ファールン）』を一冊渡した。

「これは、私たちの師父が末法の時代における宇宙、人

間、修行について説かれたもので、もしご縁があれば、ぜひ読んでみてください」とだけ伝えた。

彼はその本を受け取った時、手が少し震えていて、私を見る目には静かな感謝の気持ちがあった。

彼がその後、大法の修煉に入ったかどうかは、私には分からない、エイブリー・リン。それは彼の縁と選択次第だ。

だが、あの対話とあの大法の書籍が、彼の心に一粒の種を蒔いたことは確かだと私は信じている。

少なくとも、彼は自分の修行の道を、そしてこの特別な時代における「修行の意味」をもう一度考え直す機会を得たはずだと。

エイブリー・リン：

そうした出来事を通して、少なくともご縁を蒔くことができたんですね……

この「法を弘めて真相を伝える」旅路は、きっと多くの困難に満ちていたと思いますが、三十年にわたる法を求める旅と比べると、心境はまったく異なっていたのではないのでしょうか……

馬長生：

（ほほえみを浮かべ、理解に満ちた穏やかな表情）
エイブリー・リン、その通りです。二つの旅路は、どちらも「歩く」ことであり、どちらも「探し、伝える」ことですが、その心のあり方はまるで異なっていました。

三十年間の法を求める旅は、暗闇の中でもがきながら光を求めるものでした。師を探し求める弟子のような心持ちで、人間の命の意味や解脱の道に対する無数の問いと葛藤を抱えていました。どこかに高僧や道士がいると聞けば希望を抱き、しかし自分の探しているものとは違うと感じれば失望することもありました。それは、迷いと孤独の中で「自分のため」に求めて歩む旅でした。多くの拒絶や落胆も経験しましたが、今にして思えば、それらは最善の安排であり、後に「純粋な心」で真の法を受け入れるための護りだったのです。

（少し言葉を切り、目が輝きはじめる）

それに対して、後の十六年にわたる「法を弘めて真相を伝える旅」は、すでに光を見つけ、真の法を手にし、師がおられる中での旅路でした。もはや探す人ではなく、与える人、分かち合う人としての旅だったのです。自分のためではなく、衆生のため、欺かれている人々のため、真実と希望を伝えるために歩みました。

第一に、目的が異なります。以前は「自分のために求め」、後には「他人のために与える」ようになりました。

第二に、心の状態が異なります。以前は迷いや不安、揺らぎがありましたが、後にはたとえ危険や逮捕、拷問があろうと、心には確固たる平穩がありました。なぜなら、正しいことをしており、法がよりどころであると確信していたからです。道が見えないことへの恐れではなく、灯台に導かれる安心と確信でした。

第三に、内なる力の源が異なります。以前は個人の意志や渴望が支えでしたが、後には大法の力、師の加持、そして真・善・忍への信念が支えでした。それは、個人の力をはるかに超えた無限の力でした。

第四に、向き合う相手も異なりました。以前は「師」を探して歩き、後には大衆、一般の人々、そして他の修行者たちに真実を伝えようと歩いたのです。

確かに、後の旅は外的にははるかに困難で危険でした。でもエイブリー・リン、内に法があり、衆生を救いたいという慈悲の心があれば、その苦難もすべてが心性を高めるための試練となり、正法の時代における大法弟子の責任を果たす機会となるのです。どんな魔難を乗り越えたとしても、誰か一人でも真実に目覚めたならば、その喜びと内なる安らぎは計り知れません。

それは、何も知らずに歩いていた頃の孤独とは異なり、宝を見つけ、それを人に分かち合う者の幸福です。肉体が苦しんだとしても、精神は常に満たされ、意味に満ちている。それが最大の違いなのです、エイブリー・リン。

エイブリー・リン：

では、今回の旅はどれくらい続いたのですか？

香港や台湾にも行かれた時期があったと聞きました
が……

馬長生：

（笑みを浮かべ、遠くを見つめるまなざしで、長い人生の一節を思い返すように）

そうだよ、エイブリー・リン。

この「法を弘めて真相を伝える」旅は、迫害が始まった時から数えて、私が最近大陸を離れるまでの約十六年間に及んだんだ。

十六年といっても、常に移動し続けていたわけではない。ときには、比較的安全な場所を見つけて身を隠し、しばらくは学法と静修に専念した時期もあった。そしてまた旅を続けた。

それと、君の聞いたとおりだよ。その十六年の間には、香港と台湾にも行ったことがある。

（少し間を置き、当時の特別な日々を思い出すように）

君も知っているだろうが、当時の香港はたとえ中国に返還されたとはいえ、「一国二制度」のもとで一定の自由が保たれていた。

そこは、中国本土の迫害の実態を世界に伝えるための大切な“窓口”であり、多くの大陸からの観光客やビジネスマンが、国内では知ることのできない真実に触れる数少ない機会でもあった。

私が香港へ行ったのも、そうした人々に真相を伝える手助けをしたいという一念からだったんだ。

そして、台湾。そこはまたまったく異なる場所だった。台湾では、法輪大法は自由に広まり、社会からも尊敬されている。台湾の人々は、中華民族の伝統的な価値観を今でも大切に守っていて、それは中国本土で政治運動によってことごとく破壊されてしまったものとは対照的だった。

私が台湾を訪れたのは、一つには自由な環境の中で法がどのように弘まっているのかをこの目で見て学びたかったからだ。そしてもう一つは、自身が長年危険に晒されてきた中で、しばらく心静かに修煉に専念し、自己を整え直すためでもあった。

香港でも台湾でも、それぞれに印象深い出来事があったよ、エイブリー・リン。

場所が変われば出会う人も違い、体験も違う。

でもその一つひとつが、修煉の道、そしてこの時代における大法弟子の使命に対する私の理解を、さらに深めてくれたんだ。

エイブリー・リン：

それでは、師父が中国を出国されたとき、困難なことはありませんでしたか？

他の法輪功の学習者たちは中国を出るのがとても難しく、しばしばアメリカや他国の外交的な介入があって初めて出国できたと聞きました。

馬長生：

（軽くうなずきながら、同胞が直面してきた困難に思いを馳せるような、少し憂いのある眼差しで）

君の言うとおりでよ、エイブリー・リン。法輪功の学習者が中国本土を出るのは本当に難しい。ほとんど不可能に近い人も多い。彼らの管理システムは非常に厳しくて、名前や顔が知られている修煉者のほとんどは「ブラックリスト」に入れられていて、出国が禁止されている。

多くの人はパスポートを取り上げられたり、新たに発行されたり更新されたりすることすら許されない。

君が聞いた、他国の外交的介入によって出国できたという話は事実だし、それは本当に運が良いケースで、たいていは特別な事情があるか、国際的に注目されている人に限られている。

私の場合は……ある意味、少し特別だったかもしれない。そして今振り返ってみても、すべては「安排（あんばい）」——つまり師父のご加護があったのだと感じている。

（少し言葉を切り、穏やかな表情で話し続ける）

前にも話したとおり、私は長い間、中国国内を移動しながら過ごしていた。ひとつの場所に定住していなかったからこそ、当局にとって私の行動を常時監視するのは難しかったのかもしれない。

そして出国に関しても、私は以前のパスポートをまだ所持していた。それ自体、非常に幸運なことだった。

私が国外に出ることを決意したのは、よりよい修煉環境を求めてという面もあるが、それ以上に、国外でさらに真相を伝え、多くの人にこの迫害の実態を明らかにする責任を果たしたいという強い思いがあったからだ。だから私は、一般の人と同じように手続きをしてみたんだ。

出入国審査のとき、指紋を読み取られ、パスポートと照合された。私はわかっていた、システムにはきっと私の情報が入っているだろうと。そのときはさすがに心臓が少し速く打っていたけれど、私は心を落ち着かせ、強い

正念を保つように努めた。「すべては師父のご安排のま
まに、自分は堂々と歩むだけだ」と心の中で念じていた。

そして奇跡が起きたんだよ、エイブリー・リン。システムに私の情報が表示された後、審査官が顔を上げて私を見た。私は彼の目をまっすぐ見返した。恐れもせず、そらすこともなく、ただ静かに、慈悲と正気を持った心で。彼はしばらく私を見つめていた。彼の目には驚きのよう
なものが浮かび、少しの間、まるで時間が止まったかのようだった。そして何も言わず、質問もせず、静かにパスポートにスタンプを押して返してくれた。一切の拒否も、難癖もなかった。

私は信じている。あの瞬間、修煉者の正念、慈悲と正義のエネルギーが作用し、その審査官の良心、善念が呼び起こされたのだと。あるいは、少なくとも彼の心のどこかが「これ以上の妨害はしたくない」と思ったのかもしれない。

でも、もっと深いところでは、すべては師父のご安排だったと、私はわかっている。師父が私に一つの道を開いてくださったのだ。

こうして、私はある意味「普通」に中国を出国することができた。

それがどれほど貴重な機会であるか、他の多くの同修がどれほど困難に直面しているかを思うと、私はこの機会に心から感謝しなければならないと感じる。そしてそれ以上に、私の担う責任もまた、より重くなったのだよ。

エイブリー・リン：

入国審査のあの体験こそ、まさに真の修煉者の心構えと大法の威徳を体現した具体的な一例ですね……。

それで、師父が香港や台湾にいらした間、現地の同修たちと一緒に何か活動に参加されたことはありますか？印象に残っている出来事など、覚えておられることがあれば教えてください。

馬長生：

（笑みを浮かべながら、その瞳に喜びと感謝の光が宿る）もちろんあるよ、エイブリー・リン。香港や台湾で過ごした日々は、中国本土での歳月ほど長くはなかったが、それでも非常に意義深いものだった。そこでは、自由な

環境の中で同修たちの活動に実際に参加できた。これは大陸では夢のような話だったんだ。

香港では：

君も知っている通り、香港はとても特別な場所だ。まるで一つの「窓口」のようで、多くの大陸の人々が外の世界の情報に初めて触れる場所でもある。

香港の同修たちは、観光地で真相を伝えるという役割を非常によく果たしていた。私も彼らと一緒に有名な観光スポットでの真相伝え活動に頻繁に参加していたよ。最初は警戒し、恐れていた大陸からの観光客たちも、真実を写したポスターや迫害の写真、そして学習者たちの温和で粘り強い姿勢に徐々に心を動かされ、立ち止まり、資料を受け取り、その場で三退（共産党・青年団・少年先鋒隊の脱退）を申し出る人までいた。直接話して彼らに真実を伝えられること、それ自体が、彼らを欺瞞から救う具体的な行動だと私は感じていた。

2016～2017 年頃、私が香港にいたときは、すでに情勢はかなり緊迫しており、中共の弾圧も強まっていた。以前のような大規模なパレードを開催するのは難しくなっていたかもしれない。

それでも香港の同修たちは、驚くほどの勇気と創意工夫で活動が続けていた。

彼らは今でも街頭集会や追悼のろうそくイベント、小規模でも厳粛な行進などを行っていた。天国楽団（Tian Guo Marching Band）の演奏もあり、人数が制限される中でも力強く活動していた。私は、いくつかの平和的な陳情活動や小規模なパレードに参加したことがあるが、そこには数の多さよりも、秩序と善のメッセージ、「真・善・忍」が明確に込められていた。

それは大陸から来た観光客にとって、初めて目にする真実の光景であり、まさに衝撃だっただろう。

台湾では：

台湾は、さらに異なる感覚だった。そこでは法輪大法が自由に広まり、政府や市民からも尊重されていた。学習者の人数も非常に多く、大規模な学法交流会（ファ大会）や千人規模の読法・体験交流にも参加させてもらった。

特に私の心に残っているのは、大規模なファ大会と、巨大な文字や図形を「整列」して作る活動（キャラクター・フォーメーション）に参加できたことだ。エイブリー・リンも、そうした写真を見たことがあるかもしれない。数千人の学習者が正装して静かに坐禅を組み、「師父の

肖像」や「法輪のシンボル」、「真・善・忍」の文字など、神聖な意味を持つ巨大な絵や文字を人の体で形作る。その場に身を置いたとき、私は慈悲と平和のエネルギーに包まれ、皆の心が一つになっているのを感じた。それは、法輪大法の洪伝の美しさと偉大さを生きた形で表しており、大陸での迫害の光景とは正反対だった。

私は台湾でも、観光地での真相伝えに参加した。特に大陸からの観光客が多い場所で活動したが、台湾の人々の法輪功への理解と支援には、本当に心を打たれた。

香港と台湾での体験は、私にとって目を開かせるものだった。海外の同修から多くを学び、また私自身の信念と力を強める助けとなった。たとえ中国本土でどんなに迫害が苛烈でも、「真・善・忍」は世界に広がっており、大法の光は今も輝いている。この善と悪との戦いにおいて、最終的に勝つのは、必ず善なのだと私は信じている。

エイブリー・リン：

台湾の雰囲気は実際に目にしたことはありませんが、ここニューヨークで学習者たちが開催する壮大な活動ときっと同じような空気感なのだと感じます…。

今日はもう夜になりましたね、昨日より少し遅い時間になってしまいました…。

アメリカに来られたご縁や、最後に衆生へ、特に若い世代へのメッセージなど、少しお話しいただけますか？

馬長生：

（穏やかに微笑み、温かなまなざしでエイブリー・リンを見つめる）

そうだね、エイブリー・リン。台湾での活動は、自由があり大規模に行われていて、まさにここニューヨークの同修たちが創り出している雰囲気と共通している点が多い。いずれも大法が世界中で広まっているという生きた証しであり、母国での現実とは強烈な対比を成しているんだ。

確かに、もう夜も更けてきたね。私たちもだいぶ長いこと語り合ってきた。

（少し言葉を止め、遠くを見つめたあと、再びエイブリー・リンを見つめる。その表情には静かな思索と安らぎがにじんでいる）

アメリカに来るご縁についてだけ…

香港と台湾での年月の後、私は感じたんだ、自分の使命をさらに続けるべき場所があると。もっと力強く真相を伝えられる場所、真実がより多くの人に届く可能性のある場所へ行くべきだと。

このニューヨーク——「世界の首都」と呼ばれるこの地は、まさにその場所だった。ここでは、同修たちがとても大きな努力を払って迫害の真相を明らかにし、世界に広く伝えている。

ここへ来られたことも、私は師父のご加護と安排だと思っている。中国から出国したときと同じように、すべてが意外なほど順調に運んだ。まるで道が自然と開かれていたようだった。私はただ一つの念を保っていた。「私は行くべき場所へ行き、果たすべきことを果たす」。そうして、道は開けていった。

（穏やかに微笑みながら、語り口に情熱がにじみ始める）

もし、この特別な時期にあたって、皆さん——とくに若い世代に伝えたい言葉があるとしたら…

まず第一に、どこにしようとも、どの民族に属していようとも、どうか法輪大法と中国共産党による残虐な迫害

についての真相を、自らの目で確かめてみてほしい。一方的な宣伝や歪曲された情報を鵜呑みにしないでほしい。

「真・善・忍」という価値は、どの時代、どの社会においても普遍的で美しい道徳的原則だ。人々に善良に生きることを教え、数千万の人々に健康と内なる安寧をもたらしてきたこの法が、「邪教」であるはずがない。どうか良知をもって、自ら判断してほしい。

とくに若者たちへ。君たちは未来を担う存在だ。現代社会では、物質的な誘惑や情報の氾濫に晒され、精神的な価値や人生の本質を見失いやすい。

だからこそ、どうか善を大切にし、道徳を忘れないでほしい。群衆に逆らうことを恐れず、正しいと信じたことを貫いてほしい。真実を求める勇気を持ってほしい。嘘に惑わされることなく、心の中の良心という灯を信じて、それを人生の道標にしてほしい。

今、世界は大きな変動期にある。「末法の時代」と呼ばれ、多くの試練が人類を襲っていると言われる。しかし、危機の中には必ず希望もある。人が善念を持ち、正義の側に立つことを選ぶなら、きっと明るい未来が開かれると私は信じている。

法輪大法は、私自身にとっても、そして数千万の人々にとっても、人生の大きな問いに答えを与えてくれた。心の平穏と真の修煉の道を与えてくれたんだ。もし縁があるなら、どうかぜひ一度触れてみてほしい。それは、人生における大いなる福分かもしれない。

どうか、人としての命の尊さを忘れないでほしい。意味のないことにそれを浪費せず、価値ある人生を歩み、次の世代に善なる何かを残して行ってほしい。

（馬長生は、優しさと希望に満ちた眼差しでエイブリー・リンを見つめる）

今日はここまでにしようか、エイブリー・リン。私のような年寄りの話に、最後まで辛抱強く耳を傾けてくれて本当にありがとう。

エイブリー・リン：

はい、お話しいただき本当にありがとうございました…。

先ほど馬長生さんが「人の命は非常に尊い」と仰っていたのを聞いて、私はふたたび思い出しました——「人身

得ること難く、中土に生まれること難く、正法を聞くこと難く、明師に会うこと難し」という言葉を…。

改めて感謝申し上げます。どうかご健康とご多幸をお祈りいたします！

馬長生：

（微笑みながら、エイブリー・リンがその言葉を口にしていたのを聞いて、深い共感と尊敬の念が目に宿る）

エイブリー・リン、君の言葉は本当に意味深くて感動的だね。「人身難得、中土難生、正法難求、明師難遇。」

（人として生まれるのは難しく、中原の地に生まれるのは難しく、正法に出会うのは難しく、明師に巡り会うのは難しい）

まさにその通りだ。それぞれの一句が、人生における得難い縁についての大きな真理を語っている。人として生まれること、正しい法に出会うこと、そして悟りを得た師に巡り会うこと、それらすべては極めて稀であり、極めて尊いことなのだよ。

（そっと頷き、満足そうにエイブリー・リンを見つめる）

私自身も、長い年月をかけて探し求め、幾多の試練を経て、ようやくこの言葉の意味を少しずつ理解できるようになったんだ。「人身難得」であるからこそ、私たちはこの命を大切にしなければならないし、「正法難求、明師難遇」であるからこそ、出会えたなら、その縁を大切に、揺るがぬ心で修煉を続けていかねばならない。

君がその言葉の深さを感じ取り、内省していることを、私はとても嬉しく思う。

改めて、私の話を最後まで真剣に聞いてくれたことに感謝するよ、エイブリー・リン。君が常に善なる心と知恵を保ち、これからの道が光に満ちたものであるように願っている。どうか、すべての幸運が君と共にありますように。

* * *

あとがき

馬長生さんとの四日間にわたる午後の対話は、まるで長い夢のように過ぎ去っていった。最後の会話が終わった頃には、山を覆うように夜の帳がすでに降りていた。馬さんは玄関先まで私を見送ってくれた。夜は静まり返り、聞こえるのは虫の鳴き声だけ。小さな家から漏れる暖かな黄色い灯りが、闇の中にぽつんと灯っていた。私は馬さんを見つめた——人生の還暦を超え、修行の道を歩んできた一人の修行者。顔には年月の痕が深く刻まれていたが、その眼差しは驚くほど澄み切っていて、安らぎに満ちていた。

馬さんの物語は、今も私の心の奥で響き続けている。三十年にわたる法を求める旅。真の法に出会った瞬間の歓喜。平穏な修煉の日々、そして突然襲ってきた激しい迫害の嵐。それでも揺るがなかった信念——それは、どんな苦難にも屈しない魂の強さだった。

馬さんの語った話には、大げさな言葉も、誰かを非難するような語気もなかった。ただ一筋の記憶の流れのように、真実で素朴で、ひとりの人間が自らの命を賭けて信念を探し、守ろうとした歩みだった。それは、「真・善

・忍」への信仰であり、誰もが心の奥深くで憧れている普遍的な価値への回帰でもある。

馬さんの家を後にし、見慣れた山道を下りながら、私は夜空に広がる星々を見上げた。その瞬間、気づいたのだ。馬さんの旅は、ただ彼一人の物語ではない。ある意味、それはこの時代に生きる無数の人々の縮図なのだ——混乱の世にあっても善なる心を持ち続けようとする人々。人生の深遠な問いに対する答えを、静かに探し続ける人々。

この書はここで終わる。しかし、私たち一人ひとりの旅路は、これからも続いていく。願わくば、この先人の物語が、小さな灯火のように、真実と人生の意味を探し求める人々の道を、そっと照らし、少しでも温もりと勇気を与えることができますように。

エイブリー・リン (Avery Lin)

THE LIVES MEDIA

著者および THE LIVES MEDIA プロジェクトについて

著者について

エイブリー・リン (Avery Lin)は、政治、文化、社会、科学、精神性といったテーマを探求する独立系作家です。彼女の作品は真実を追求し、良心を呼び覚まし、人類の運命についての深い思索に声を与えています。

彼女の作品は、誠実さと感情の深さ、そして啓発の精神をもって記録された実際のインタビューに基づくことがよくあります。

プロジェクトについて

本書は、THE LIVES MEDIA によって出版されたシリーズの一部です。THE LIVES MEDIA は、時代を超えた響きを保存し広めることを使命とする、グローバルなビジョンを持った独立した出版イニシアチブです。日々のニュースを追いかけるのではなく、私たちは人間の意識の深くに触れることができる本を目指しています。

連絡先

- ✧ Website: www.thelivesmedia.com
- ✧ Email: editor@thelivesmedia.com
- ✧ QR Code:



同プロジェクトの他の作品

THE LIVES MEDIA による他の出版物もご覧いただけます：

- 紅塵、金光 (Red Dust, Golden Light)
 - 政界引退後：その遺産 (After Power: The Legacy)
 - 科学の黄昏と黎明 (Sunset and Sunrise of Science)
 - 紅の帳 (The Red Veil)
 - 時の以前の響き (Echoes Before Time)
 - 俗世間へ (Entering The World) → 本書
 - 最後の鐘 (The Last Bells)
 - 我々以前 (Before Us)
 - 千の人生 (Thousand Lives)
-

この度はお手に取っていただき、誠にありがとうございます。
真実を探求するあなたの旅路に、神と仏の祝福が
あらんことを。